

魔法使いの嫁～AnotherStory～

ケニ一F

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公 南武・セトはニューヨーク近郊に住む19歳

両親の遺した遺産と家で爺やと暮らしていた。

ある日彼は一つの不思議な出来事を目撃したことでの、
彼の人生の歯車は大きく動き出した。

この物語ではオリ設定や公式小説設定がふんだんに使われておりますので悪しからず。

また、原作と並行して話が進むため概念や名称等の変更が行われるかも知れませんが、予めご了承ください。

目次

第一章【目覚め】

第一話『扉の向こう』

第二話『隣人たち』

第三話『稻妻ジャック』

第四話『魔法使いの素質』

第五話『世界の秘密』

第六話『出発』

第七話『彩りの衣エルダ』

第八話『運命の謎』

第九話『竜舌蘭の花』

第十話『魔法使いの弟子』

第二章【接触編】

第十一話『新しい日々』

第十二話『2つの手紙』

第十三話『最初が肝心』

第十四話『結晶の魔法』

特別編「キヤラクター紹介その1」

第十五話『夢追い人』

第十六話『夢。目覚めて。』

第十七話『石切蜂』

第十八話『赤い想い』

第十九話『準備万端?』

第三章【疾走編】

第二十話『罪の取引』

第二十一話『天鱗』――

第二十二話『吟夜弄夢』――

第二十三話『優しいやつは大体が動物に好かれる』――

第二十四話『ハメリーンの笛吹き』――

第二十五話『遭遇』――

第二十六話『再開と契約』――

第二十七話『学院からの魔術師』――

第二十八話『拾い物』――

第四章【翔龍編】

第二十九話『ドラゴンの楽園』――

特別編「キヤラクター紹介2」――

第三十話『菩提樹』――

第三十一話『跳んで、飛んで』――

第三十二話『龍の夢』――

第三十三話『スランプ』――

第三十四話『休息の終わり』――

第五章【暗夜編】

第三十五話『四人の卵』――

第三十六話『面倒なこと』――

第三十七話『忘れてた因縁』――

第三十八話『怒りと罰』――

第三十九話『取引と脅迫』――

第四十話『嫌な匂い』――

第四十一話『接敵』――

第四十二話『渦巻く謎』――

第43話『なにもわからぬままに』

第六章【迎冬編】

第44話「祝い事」

第45話「鉄鑄」

第46話『誕生日の嵐』

第47話「春の嵐」

第48話『羨望』

第49話『邂逅そして』

第50話『霧の中』

第51話『妬み』

第52話『逃亡』

第七章【学院編】

第53話『学院』

第一章【目覚め】

第一話『扉の向こう』

これは、もう一人の魔法使いの物語
あの春、あの人と合つたその瞬間、僕の人生に小さなひなげしの花
が咲いた。

僕の名前は 南武セト（19）英語風だと セト・南武 だね。

親は5年前に他界し今はこのご時世に珍しい使用人の爺やと一緒に、両親の遺した莫大な遺産とニューヨーク近郊のちよつと広すぎる家に暮している。

父は経済関連の仕事をしていて、その関係で僕ら家族は、僕の小さい頃にニューヨークまでやつてきた。

母は翻訳や通訳の仕事をしていて、教育関係の学者でもあった。母はある有名な『Tレックス・ホームズ』シリーズも手がけている。えつ！聞いたことない？そんなバカな！

話を戻そう。

爺やというのは、母の家にいた人で、お祖母さんに恩があるらしく、親の代から仕えているらしい。

僕はといえば定職につかず、かと言つて豪遊もしない小心者で、暇のつぶし方を考えては、爺やに

「そろそろ、定職を考えてみては？」

と言われている。

最近はニューヨークの街中で、日本人相手にボランティア活動をしている。両親の教育のおかげで、英語はペラペラ、日本語もペラペラな訳でまさにピッタリの仕事だろ。

それに、僕は人のいっぱい居る街を見るのが楽しい。不思議と温かみを感じれる気がするんだ。

あの日もそうやって街中でブラブラしていたんだ。

ふと、目の前の路地に黒いローブみたいなのを着た人が通つた。い

つもなら絶対気にしないような一場面だ。けど僕は後ろからこつそり彼を（彼女かもしれない）つけた。角の多い路地を抜けていくと、突然ローブの人は止まつた。慌てて陰に身を隠してゆっくりと覗いてみた、

そこにあつたのは壁、、のはずだつた。ローブの人が片手を壁に当て何か唱えているのが見えた。小声だつたのでうまく聞こえない、けど身を乗り出して聞き耳をたてる度胸もなつかた。しばらくすると、その人は手を下げてそして、あたかもそこに扉があるかのように壁を押した。

すると、その壁は【開いた】のだ！

自分の目が信じられなかつた。もうそこにあるのは壁ではなく、金の彫刻のついた立派なバロック調の扉だつた。

ローブの人が扉の向こうに歩いていく。向こう側を見ようと僕は身体を乗り出してしまつた。その時、ローブがこつちを振り向いたのだ！それと同時に扉から出てくる凄まじい光も目に入つた。あまりの強さに目がくらむ。

「うつ、」

その場に僕は倒れ込んだ。

「お、、い、、に、、」

ローブの人が何か言つてゐる。よく聞こえない、、、
体がその場に倒れる。意識もそこで途切れた。

第二話 『隣人たち』

「ううん、」

しばらくして目が覚めると、まるで何もなかつたかのように、辺りは静まり返っていた。いや、違うね、遠くから街の喧騒が聞こえてきた。

（白昼夢？しかしそれにしては妙にリアルだつたな。）
ううんと唸りながら考え込む、が

「まあ考えても仕方ない！何もなかつたんだ。」

短絡的な考え方だが、一般人の反応としては普通だろう。

しかし、それはそこにいた。

くるりと 方向転換 し、路地を出ようとしたその時だつた！
運命の出会いとはこの事を言うのではないかと思うほどだつた。
目の前を通つたそれは、あまりにも異常で、不思議で、
何より、美しかつた。

人の上半身を持ち馬の下半身を持つ、
昔話に出てくるセントールと言うやつだつた。

つややかなブロンド髪、バランスの取れた上半身

筋肉美すら感じる馬の下半身、どれを取つても【カノジョ】は美しかつた。

僕はハツとした、目があつたのだ！

向こうは僕のあまりにもうぶな反応に若干驚いているように見えた。

「よ、妖精」

かすれた声で僕は言つた。

すると彼女はすぐさま返してきた。

「あら？私たちをそんな無粋な【呼び名】で呼んじやだめよ！私はあまり気にしないけど、風の精霊なんかだつたらカンカンよ！」

僕は呆然としていた、夢じやなかつた。起き上がりつた時にぶつけた足の指はまだ痛い。セントールの彼女は続ける。

「貴方、今時珍しい【見える人】なのね。フフッ随分と驚いちやつて、

まるで、【今の今まで見たことない】って表情してるわね。」

いや、今の今まで見たことないんだよ！

言いたいことも聞きたいこともあるけど、言葉にならない。

「美しい。」

ただ一言そうつぶやいて僕はその場にへたり込んだ。

流石に彼女も気づいたようだ。目を丸くしながら

「まさか、本当に【今まで見えなかつた】なの？」

と聞いた。

コクリと僕は頷いた。

彼女はその栗色の丸い目をさらに丸くして僕を見た。

「あ、貴女は」

やつと落ち着いてきた僕は彼女に聞いた。

「あら？ 人に名を聞くときはまず自分からって言うでしょ」

人のような返しだなあと思いつつ

「失礼しました。私の名前はセト・南武です。」

いつもの調子に戻ってきた。従兄弟に人前では紳士面してるって言われたけな。

「あら、随分あつさりと名乗ったものね。隣人の中には名を聞いただけで相手を縛れるのもいるのに。」

あんたが名乗れって言つたんだろうが！ 心の声を抑えつつ話を聞く。

「まあいいわ、私はルーシイ。昔助けてくれた人がくれたあだ名だけどね。貴方はセトね、氣に入つたわ！ いいわ話を聞いてあげる。」
(聞いてくれなんて言つてないんだが、強引だなあ)

とは言え聞いてくれるなら話そうと思つた僕は今日の一部始終を話しだした。ローブの人、金の彫刻の扉、そしてルーシイとの出会い、その間ルーシイは真剣に聞いてくれた。

「、と言うことなんです。」

ルーシイは少し考えたあと、

「原因はその扉の向こうを見たから。つて決定づけるにはちょっと曖昧よね♪ 妖精の塗り薬^{祝福}を使つて^{匂い}匂いもしないし。、あつ！」

突然出た大声にビクツとしながら、僕はルーシイの顔を見た

「こういう時は、こちらとあちらのどつちにも詳しい人の所に行くのが一番よ！」

「どつちにも詳しい？」

「そう。名前は ジヤツク

稻妻ジヤツクジャツクザフラッショウ

探偵よ」

第三話 『稻妻ジャック』

「ふうん、」

「あ、あのー」

「ちよつと静かにしてくれる?」

「あつ、はい、、ハアー」

探偵事務所についてからもう10分は立たされてジロジロ見られてる。ジャックの鋭い目線が痛いほどだ。どうしてこうなつたか、順を追つて説明しよう。

「20分前」

「ジャック、、さんですか？」

自身たつぱりなルーシイに聞く。誰だか知らない人の名が出てたな。

「そうー優秀な探偵よ。場所は知つてるから早速行きましょう!」

僕が何か言う前にどんどん話が進んでいく。なんだか、出発前に疲れてしまいそうだ、、

「で、行くつてどうやつてですか?まさか、タクシーに乗るわけじやないでしよう?」

「皮肉言わないの。簡単よ、わたしの背中に乗ればいいのよ。大丈夫。今日は優しくするわ。」

何が何に優しいのだろうか?

ん?なんだつて?誰もそんなんこと言つてないぞ。期待したのは

読者の君だけだ。大体、背中だつて言つてたろ!

「背中つて、馬みたいにですか?」

「まつそう言うこと。横から乗るのよ。優しく乗つてね。」

言われたとおりにルーシイの背中に乗る。ルーシイは僕が乗りやすいようにしゃがんでくれた。しゃがむというのか、膝を折つて座つたというのか、馬なんか乗つたことないもんだからちよつと苦労したが、なんとか乗れた。すると、ルーシイがちよつと小馬鹿にした感じで言つた。

「あなた、少しどんくさいわね。」

間髪入れずに、僕の大きな声が彼女の耳に届いた。

「初めて合う人にそれを言うのか！君は！」

若干キレてた。ルーシイは僕が言い返すとは思つてなかつたようで、ビクツとして僕を見た。

ハツとして、言い過ぎた事を謝ろうと口を開こうとしたら、

「ごめんなさいね。言い過ぎたわ、、」

「あ、いえ、いいんです。ぼくも、、言い過ぎましたから、、」

謝るタイミングを完全に逃してしまつた。ルーシイは暗い顔をしてる。気まずい空気が流れていた。なんとかしようと僕は口を開いた。

「そ、それにして、これ」

僕は辺りを見回して言った。

「普通の人に貴女が見えないなら、不自然じやないんですか？」

「大丈夫よ。目隠しの魔法があるから。」

以外に復活が早いタイプらしく、顔もさつきの明るさが戻つていった。僕はほつと胸を撫で下ろす。

「じゃあ、そろそろそのジャックとか言う人の所に行きましょうよ。」「そうね。わかつたわ。さあ！行くわよ。しつかり掴まつてなさい！」

「えっ？掴まるつてこのどうで」

ルーシイは僕が言い終わる前に地面を蹴つて駆け出してしまつた。そこから、ジャックの事務所まではあつという間だつた。僕は凄い勢いで進む彼女の背に掴まりながら、心の中で

（優しい要素どこいったんだよ）

と毒づいていた。

風を切る音がする。ビル達が遙か遠くへ消えていく。その中で僕の目を引いたのは、光だつた。ただの光じやない、キラキラしてまるで星空のようだつた。宙に浮くそれは、あちらこちらにあつて、その先までは追えなかつた。だつてさ、早いんだもん。

（あれも魔法なのかな？あとで聞いてみよう。）

そんなことを考えていたら、突然流れていた風景がぴたつと止まつ

た。

「ついたよ。ここがジャックの探偵事務所のあるアパートよ。」
見上げると、いたつて普通のアパートだった。

てつきり、

「てつきり田舎の外れの一軒家にでも住んでると思った？」

見事的中、彼女は心が読めるらしい。

「心が読めるとかじゃないのよ。ただ、あなたがそんな顔してたつてだけ。」

しつかり心読めてるじやないですか、やだ。若干引き攣った顔を元に戻してルーシイの方を見る。

「で、どの部屋にその探偵さんがいるんですか？」

「彼女に合うにはちょっとコツがいるの。アポなしは特にね。」

そう言うとルーシイは、1つの窓の方へ向かつていった。僕はあたりを見回した。マンハッタンの何処かのようだ。

窓へ向かつたルーシイは、

「ジャック！いる？」

と聞きながら、窓を叩いた。

しばらくすると、ガラツと窓があき、中から人が顔を出した。

「はいはい、どなた？ つてルーシイじやない。どうしたの？」

「お客様よ。ほらセト、こっち来て」

ご指名を受け急いで窓の方へ行く。

近づいてみてわかつた事だが、ジャックと言う人はルーシイとは違つたタイプの美人で、何処か可愛らしさがあつた。

ただ、ちょっとガサツに見えた、

「この子がどうしたの？」

子！ 子ときたか、そんなに子供に見えるか19の僕は！

「それがね、ちょっと不思議なのよ。」

思い当たる節があるかのようにジャックの顔が曇つた

「まさか、見えないやつが突然見える様になつた。とか？」

「そう！ さすが探偵ね！ そういうの分かるもんなのね！」

香気にルーシイが感心してるが、そうじやないのくらい僕でもわか

る。ジャックも呆れ氣味だつた。

「違うわルーシイ。」

「へ？」

流石のルーシイも彼女のジャックの顔色が悪いのに気づいたようだ。

「今日だけで3人よ。」

「誰が、谁が、まさか！」

「そう！見える関係の相談。今日だけで3人！そこの子で4人目よ！」

第四話『魔法使いの素質』

「その子で4人目よ」

ジャックのはなつた言葉はルーシイを驚かせたようだ。

いまいち事の重大さがわからない。そんな僕を置いて話は進む。

「4人もいつぺんに、：そんなことって」

「私も分けわかんないのよ。まあ、取り敢えずその子見るから。ほら！君入つて。そこの戸から回れるから。」

突然声をかけられて反応が鈍ってしまった。

「は、：はい！」

と戸を開けようとしたら、ルーシイが声を掛けってきた。

「なんかわかるといいね。私はちよつとやりたいことがあるからこれで。それにその家に私は入れないしね。またお迎えに来るからね。この石を持つて。それを握つて地面を蹴つて。そしたらすぐ来らから。」

唐突なお別れで少しキヨトンとしてしまつたが、ルーシイは僕に石を渡して何処かへ消えていった。

「それではまた。」

会釈をして僕は建物に入つていった。

#

そして前回の冒頭に繋がるのである。

「やつぱりわからないなあ。まあそこに座つて。話し聞くから。」

そんなに見なくても良かつたような気もするが、：

やつと解放されて、ため息をつきながらソファーアーに座つた。

向かい側にはもう一つ部屋があるようで誰かがいるようだ。ゲームの音が聞こえる。ジャックも僕の視線に気づいたようで、ため息をつきながら頭を抑えて言つた。

「ごめんなさいね。同居人なの。」

「いえいえ、一緒に暮らす人が居るつてのは、いい事ですよ。」

「そうかね？」

「少なくとも私には、、」

両親が脳裏に浮かぶ。思いの外顔は暗かつたようだ。気を使わせてしまつた。

「ごめんなさい。余計なこと聞いたみたいね。」

「いや、良いんです。それより、、」

話を戻す。

「ああ、そうだね。じゃあ、何があつたかその一部始終を教えてくれ。僕は二度目の解説タイムに突入した。」

「、、と言ふことなんです。」

「怪しいわね、そのローブ。他の三人も似たようなこと言つてたわ。」

「ローブですか？」

「そう。ローブの人間に会つてから変になつたつて。

けど、100%とは言えないとさ。」

「それに君はちょっと違う感じだからね」

「違う？何がですか？」

「匂いが違うの、貴方は魔術師と言うより魔法使いの匂いがするわ。唯でさえ素質のある人間は珍しいのに、、しかも、夜の愛し仔スレイベガに近い匂いがするの。」

「えつ、あの、魔術師？魔法使い？すれいべが？なんですか？」

僕に魔術師と魔法使いの違いはわからないし、すれいべがつてのも意味不明だ。どうやら珍しい例のようだが、、

「はあ、やつぱりそうなるわよね。ちょっと長くなるけどちゃんと聞いてなさいよ。重要だから。」

僕は念を押されてシャキツとする。

「はい！」

「それじゃあまず、魔法と魔術の違いつてのはね、、、」
ジャックの話が始まつた。

第五話『世界の秘密』

「まず魔法ってのは、そうだなく簡単に言うと【奇跡】ってやつかな。」

「奇跡……？」

「そう。世界には理ルールがある。ちょうど、そのコンピュータのプログラムみたいな感じの。」

そう言つてジャックは机の上のパソコンを指した。
(魔法をコンピュータで例えるのか、：)

「魔法使いってのは人間以外の、例えば妖精とか精靈、幽靈や惡魔の力を借りてその理ルールに干渉して様々な【結果】を起こせるの。」

逆に魔術ルールってのは一種の【科学】で、魔術師は理ルールを理解し自分の持つ魔力でそれを組み替えたり書き換えたりして魔法使いと同じ様な【結果】を起こすの。」

「なんか、魔法使いのほうがいろいろ出来そうですね。」

「確かに、初めてこの説明を聞くとそう思うかもしれないけど実際は他人の力を借りるものだからそのコントロールは難しいの。ほら、これ見て。」

そう言つて彼女はパソコンの画像を僕に見せてくてた。

そこには腕から鉱石がまるで生えているような、少し不気味な写真があつた。

「こ、これは、、」

「ある魔法使いの腕よ。その人は自分の力量以上の事をしてこうなつてしまつたの。分かつた？これが魔法が難しいとされる理由よ。」

突然不安になつてしまつた。さつき僕にもその魔法使いの素質があるとか言つてたような、、、

「アハハハ。ダイジョブよ。そんな暗い顔しなくても。ちゃんとした師匠のもとで修行すればこんなのは滅多にないわ。」

「そ、そうですか、：」

「まあ、ちょっと脅しすぎたわ。ごめんなさいね。それで話を戻すんだけど、もう一つ夜の愛スレガし仔についてなんだけど、まああれ特異体

質つてやつよ。」

「特異体質ですか、なんか体に異変でも？」

「あるつて言え、あるし、無いつて言え、言え、ないわね。外見には出ないけど、スレイベガは妖精たちにとつて、女王蜂みたいなものなの。」

「妖精は働き蜂なわけですね。」

「まあ、そういう事。スレイベガは魔力の吸収と生産が早くて、通常の魔法使いより多くの力を持つて、その力に妖精達は惹かれるのよ。ただ、」

彼女が言葉を詰まらせた。

「ただ？」

「ただ、スレイベガはその驚異的な魔力の生産能力に体が追いつかないでほとんどが早死してしまうの。」

更に、妖精に好かれも、彼らの好意が人にとっていいものとは限らない。辛い道を進むのが殆どよ。」

「魔力つてあればいいつてものじやないんですね。」

「そうよ。だから自分の力量を見極めることが必要なの」

「僕にもスレイベガのような力が、」

「あなたのは何か微妙に違うのよね。確かに魔力の量は下手な魔術師よりも多いんだけど、スレイベガみたいな感じはしないのよね。まあ比較的妖精もとい隣人達には好まれやすい匂いはするわ。ルーシイが拾つてきたわけだ。」

(拾われたのかアアア！)

「感覚での違いですか、」

「私は魔術師でも魔法使いでもないから、そういうとこ感覚の話になつちやうのよ。」

???僕の頭に疑問符が浮かぶ

「どつちでもないんですか？」

「ああ、言つてなかつたわね。ちよつと特殊なのよ。」
言葉を濁されたので、それ以上は聞かなかつた。

まあ、なんとなくだがわかつてきつた。あとは、

「僕つてこれからどうすればいいんですかね？今まで通りの生活を続ければいいのか、それとも何らかの処置が必要なのか……」

これが一番の問題だつた。わかつたところでどう動けばいいのか。他の三人はどうしたのか。気になつてゐるところなわけだ。

しばらく考え込んだあと、ジャックは口を開いた。

「選択肢はいくつかあるけど、おすすめは更に詳しく調べるために力レッジに行くか、魔法使いのもとを尋ねることね。治したいのであれば、なおさらね。まあ、今のところ害は無さそうだけど、知識は必要でしょ。」

「カレッジというのは？」

「ああ、魔術師養成学校よ。世界中の魔術師たちが所属していて、情報交換をしたり、弟子をとつて教えたりしてるので。」

「魔術師養成学校、、それつて僕とはちょっとずれちゃつてますよね。」

「まあ、そうだけど、魔法に関する情報もいっぱいあるからそこは気にしなくてもいいかも。」

迷つっていた。確かにカレッジとやらに行けば情報は得られるかもしれない。情報は絶対に必要だ。前にルーシイが名前を聞いただけで相手を縛れる妖精が居るつて言つてたしそういう者の対策もしたい。けどこれを治したいとは思わない。むしろもっと魔法を知りたいと思うほどだ。

それならやつぱり……

「ジャックさん。あなたの知つてる魔法使いの住所を教えてくれませんか？」

「分かつたわ。それがあなたの決めた道ね。ちょっと待つてて。今渡すから。」

ジャックが隣の部屋の引き出しを漁りにいつてくれた。

「ありがとうございます。」

すぐ彼女は戻つてきた。手には紙切れを持っていた。

「はい。これ。ずいぶん遠いところの人だけど、信頼に足る人物だわ。」

受け取った紙を見て僕は目を丸くした。

「えつ！イギリス！？」

「そう。イギリスの魔法使いの一人、カラズ彩りの衣アズのエルダよ。」

第六話『出発』

「気をつけてね。エルダには手紙を送つておくから。」

「ありがとうございました。次は約束通り貴女の”推し”のサイン付
単行本用意しありますね。」

「楽しみにしどくわー！」

僕はお礼を言つてジャックの事務所を出た。

辺りはすっかり暗くなつていた。

(ここ)に来たのが四時前頃だつたから、
ざつと3時間はいたようだ。

(さて、帰るか。)

危うく歩いて帰るところだつたが、すぐにポケットの石を思い出
した。

(そうか、ルーシイが迎えにきて来れるから、たしか、
3時間前の記憶を掘り返しながら、

石を手に握り、地面を軽く蹴つた。

すると、持つていた石は一瞬光を放ち、次の瞬間には。

「はい！おまちどうさま！」

目の前にはルーシイが立つていた。二度目の出来事であまりびつ
くりはしなかつたが、正に魔法みたいだつた、いや魔法だけど。
「早いですねえ」

「その石には魔法をかけてあつてね、特定の条件下でのみ石のある場
所へ瞬間移動できるようになつてるの。

それで、どうだつた？」

一番気になるのはやつぱり、

「結局何が起きてるかはわかりませんでした。代わりに魔法使いを紹
介してもらいましたけどね。」

ルーシイは少し驚いたような顔をして、

「へえ、つきりカレッジに行くのかと思つてたけど」

と言つてきた。やっぱり僕の判断は珍しい例のようだ。

「他の三人はカレッジに行つたみたいなんですけど、

私の方は魔法寄りらしいので、やっぱり専門家に聞くのが一番かなと、

「まあ、それもそうね、、それじゃ、帰りましょうか。家まで？それとあの路地まで？」

大真面目に彼女は聞いてきた。

「家つて、、、 しらないでしょ。路地までいいですよ。」

「あら。私がなんで午後の時間忙しくしてたと思うの？あなたの家ぐらい調べたわよ。」

（怖っ！ いくら惹かれるからって、、、 怖っ！）

「え、えつと、じや、じやあ家までお願ひします。」

そう言いながら僕はまた膝を折ってくれたルーシイの上に乗った。二度目ともなるとそう鈍くさくも無くなる。

「じゃあ行くわよ！ しつかり捕まつてね！」

「了解！ のわッ」

再び世界が目まぐるしく変わつていった。そして十数秒後には家の前に着いていた。

「はい！ 到着う！」

「は、はやつ！」

「そりゃあセントールですもの！」

ルーシイの背から降りながら家を見る。相変わらず二人暮らしには広すぎる家だ。

「しつかし、おつきい家に住んでるのね！」

ルーシイはただ感心してるようだ。

「死んだ両親が残してくれたんです、、今は従兄弟の資産の一部を任せていますけどね。」

「ふーん ま、あなたにもいろいろあるのね。さて、そろそろ私も帰ろうかしら。」

「そうですか、、」

「なに寂しそうな顔してるの？ 今生の別れつてわけじゃないんだから。また会えるわよ。」

「そうですね！ それじゃお気をつけて！」

そう言つて僕は手を差し出した。

一瞬彼女は戸惑つたが、趣旨がわかつたようで、僕の手を握つた。

(暖かい)

「ありがとう。じゃあまたね！」

するとルーシィはジャックの家の時の様に何処かへと消えついた。

僕は家の門を開け、入つていった。なんだか数ヶ月ぶりに帰つてきた氣分だ。

「ただいま」

だだつ広いエントランスに声が響いた。

声は帰つてこないが、僕の鼻腔を刺激するいい匂いがあつた。どうやら奥で爺やが夕食の準備をしてるようだ。

支度を解いて夕食のテーブルへと向かう。見回せば使つてない部屋もあつたりして人が住んでなきやちよつとした幽霊屋敷だろう。テーブルは比較的小さい部屋にあり、いつも僕は爺やと一緒に食べる。父も母も使用人という考えを嫌つてたためか、爺やには家族のように接していた。僕もその影響を受けてか、同じように接している。昔から優しい人でよく昔話を聞かせてくれたつけな。

「セト様どうかなさいましたか？」

食べながら色んなことを考えていたら爺やに声をかけられた。気づいたら全然食べていない。これじやあ余計な心配を増やしてしまふ。

「いや、なんでもないよ。いつも通り美味しいよ。」

こう返したもののは僕は再び口を開こうとした。すると

「それは良かつたです。話は変わるのでですが、」

爺やが話をしだした。

「実は息子から手紙が来まして。」

爺やには24になる息子がいる。これまた気のいい人で結婚している。たしか2ヶ月前に子どもが生まれたような、「家を手伝つてくれないかということとして、、それで申し訳ないのですが、しばらくお暇をいただけないかと、、、」

なるほど。たしかにはじめての子育ては先達の 手助けがあつた
方がいい。それに好都合だ。たぶん、

「爺や。それは別に構わないけど、その手紙には☒帰つてこないか
?☒つて書いてあつたんぢやないの?」

「えつ、ま、まあそうなのですが流石に、」

僕はすかさずことばをはさむ

「いいよ」

「えつ！」

「いいよ。実は僕も当分この家を開けるんだ。管理はショウ兄もいる
し大丈夫だよ。」

「そ、そうですか。ありがとうございます。」

「いや、別に構わないよ。それで、出発はいつ頃の予定なの?」
「一週間後には息子が迎えに来る予定です。」

「そうか、分かつた。僕もその一週間後には出発する予定だから」

「そう言ふと爺やは不思議そうに僕の顔を覗き込んだ。

「そういえば、しばらく帰らないご予定とは一体?聞いてませんでし
たよ。」

「ああ、そのことなんだけど、」

僕は頭を搔いた果たして真実を告げるべきか否か。

意を決して口を開く

「実は、今日、笑わないでくれよ、よ、妖精を見たんだ。という
か見えるようになつたんだ。」

爺やは顔をしかめた。絶対、頭おかしくなつたと思われてる。そう
に違ひない。そう思つて恐る恐る爺や次の言葉を待つた。

「セト様そのお話はお食事が終わりましたら聞かせていただきます。」

帰ってきた言葉はそれだけで、その後はいたつて普通の夕食となつ
た。なにかまずいことでも行つたのだろうか、食事中爺やはずつと
無言だった。

食事も終わり、片付けが済んだ頃僕は爺やに連れられ書斎へ向かつ
た。父の趣味で神話の類の本が多く、母や爺やがよく読み聞かせてく
れた。

爺やは机の前の籐椅子に座つた。僕も向かい側の椅子に座る。爺やは僕に事のしだいを聞いてきた。僕が説明をすると爺やは何かを考え始めた。無が部屋を支配している。僕が口を開こうか迷つていると、爺やが、話を始めた

「昔、、もう40年も前のことですが、、」

爺やは今52なので彼が10代の頃だ

「妖精、、その名に相応しい者たちを、私は見たことがあります。忘れられない。」

衝撃だつたそれじゃあ、、

「爺やが見える人だつたなんて、、初耳だよ！」

「見える人とは少し違います。おそらくあれは正午の時が見せた夢。」

「人に精霊が見える時間、、」

「それはそれは美しいもので、幻として切り捨てることができませんでした。まさか、セト様に見える才がお有りであつたとは。」

「爺やは信じてくれるの？こんな荒唐無稽な話を」

「私も見たのですから疑うわけがありません。まして貴方を疑うわけがないでしよう？」

不意に涙が頬を伝つた。最後の家族の言葉が胸にしみた

「ありがとう、、爺や」

「さあ、今日はもう遅いです。お休みください。」

爺やに促され、僕は寝室へ向かつた。

第七話『彩りの衣エルダ』

「今までお世話になりました。」

あれから一週間。あつという間に爺やは荷造りを終わらせ、息子の亮介さんが迎えに来る日となつた。夜明け前の午前5時、すでに荷物は車に詰め終わり、家の前に止まつてゐる。

爺やともこれが最後になるだろう。

「ああ。今までありがとう。元氣でね。」

僕がそう言うと爺やは深々とお辞儀して車に乗り込んだ。

亮介さんは僕の方をちらりと見て軽い会釈をしてから車を空港へ走らせていつた。

日が昇る。

太陽を背に走る車が見えなくなるまで僕はその場を動かなかつた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「あんなにあつさりしたお別れで良かつたのかい？父さん」

空港へ向かう車の中。運転手は隣に座る父親に聞いた。

「家族というものは互いに言葉が無くとも想い合える。そう言うものだよ。」

「古臭い考え方だなあ」

小さなため息が聞こえる。

「そうかもな。だがお前ともその位になれるといいな、・、・」

「うん。楽しみにしてる。」

太陽を背に受け車は空港へ向かう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

日が昇る。

互いに新たな人生の1ページを迎えるに相応しい晴天だ。

僕が家に入ろうとすると後ろから聞き慣れた声が聞こえた。

「あんなにあつさりした会話で良かつたの？長い付き合いなんでしょう。」

僕は振り向きながら答える

「家族つてのは、言葉がなくとも互いを思い合えるものなんですよ。」

ルーシイ

そこにはあのセントールのルーシイが立っていた。

「なんか前時代的ね。嫌いじゃないけど。」

「ふうん、それは良かつた。で、貴女は何故ここに？」

「ああ！ そうそう。ジャックから届け物を頼まれたの。」

「届け物？ ジャックさんから？」

僕はあの日の記憶をたぐつた、、

||||||=||||||=||||||=||||||=||||||=||||||=||||||=||||||=||||||=||||||=||||||=||||||=||||||=

「そうそう。」

事務所を出ようとした僕にジャックが声をかけた。

「推し以外に何か必要ですか？」

「必要なのは私じゃなくて貴方よ。一週間したらあるものを届けるわ。」

「あるもの？ なんですか？」

僕がそう言うとジャックはちょっと悪い目をして言つた。

「密入公用の特別飛行機のチケットよ！」

なぜか楽しそうだ。

「えつー！ どうしてエルダさんに会いに行くだけでそんな物騒なものが必要るんですか？」

またしても恐怖を煽られてる気がする、、

「まあまあ、 そう怖がらないでよ。非公式の公式だから大丈夫よ。」

「非公式の公式？」

（矛盾しないか？）

「国や世界のトップの更に一部は、魔法の存在を知っている者もいるの。だから非公式の公式。エルダの元でなにかしらの措置を受けたとして、当分帰つてこられないかもしけないでしょ。イギリスの简易ビザは6ヶ月しか持たないからそれ以上の期間が必要になつたとき、いろいろな申請は面倒でしょ？」

「まあ、確かにそうですね。」

「そこで役立つのがこのシステム。カレッジに登録している魔法使いや魔術師限定で、ビザなしの移動ができるの。今回はちょっと特別だ

けど、行きと帰りのチケットを私が取つておくわ。」

カレツジ特権恐るべし、：

しかしワープの魔術とかつて無いのだろうか？それがあれば飛行機要らないような気もするが、まあ気にしないでおこう。

「ありがとうございます。」

「一週間で届けるからね。忘れないでよ！』

=====

完全に忘れていた。

「あなた。忘れていたでしょ。」

ルーシイ、君の読心術に磨きがかかってるよ。

「わ、、忘れてませんよ！ただ、貴女が届けに来たので驚いただけです。」

「ふーん。私は基本こういう運び屋をしてるの、そういうことではいこれ。」

そう言つてルーシイは僕にチケットの入つた封筒を渡した。

真っ白な封筒にはいまどき珍しい封蝋がしてある。

「ありがとうございます。ジャックさんにもよろしくお伝えください。」

「分かつたわ。それじゃあね。」

そう言つて、ルーシイはあの時のように光を放つたと思つたら消えていた。

「相変わらず、はしつこい人だ。」

さあ僕も家に戻ろう、：

一週間。それはソニ〇クのよう過ぎ去るもの。

僕は今ジョン・F・ケネディ空港の特別ターミナルにいる。あの封筒にはチケットと飛行機の乗り方が書いてある手紙が入つており、その指示どおり行動したらいつの間にか辿り着いていた。しかしトイレが入り口とは、：

周りに人の気配はなく寂しくアナウンスが響いていた。

9と8分の6ターミナルにお越しのお客様にご案内します。

ロンドン行5：30発1便のお客様のご案内を開始いたしました搭乗口4番でお待ち下さい。

誰もいないターミナルを進み四番口へ向う。そこから飛行機までは特に何もなく、指定どおり最前列の窓際に腰を下ろした。やはり誰も乗つてこない。出発してから人の気配はやはりない。僕の孤独を満たすものは、ポケットに入つたスマートフォンとウオーカーマンだけだつた。音楽を聴きながらチケットを受け取つた次の日を思い出す、

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「自分探しにイギリスへ行く!」しばらく戻らないから家の管理を頼むだあ!?」

「うん」

大きな声を出している従兄弟のショウ・シラカワに若干押されながら返す。

「爺やも居なくなつたししばらく空けることにしたんだ。構わないだろ、ショウ兄さん。」

「まあ、構わないが、一体何でまた突然?」

「色々あつてね」

流石にショウ兄には魔法使いに会いに行くとは言えない。
「しかし、まつお前が決めたらな好きにしろ。家のことは分かつた。気をつけてけよ。」

「ありがとう。切るね」ピッ!

あんまり詮索する方ではなくて良かつたあと想いながらもやはり不安だ。机の上のチケットがただの紙切れに見えてくる、

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ロンドン・ガトウイック空港

19世紀まであつた莊園が名前の由来の歴史ある空港だ。頭で予備知識を反芻しながら飛行機から降りる。

いつの間にか誰もいなかつた筈の飛行機には客が大勢乗つていた。あれだけ魔法を見た今でもやはりその強力さに驚かされる。

空港を出てジャックのメモに書かれた住所へ向かう。ロンドン市

内からずいぶん行つた田舎の方でバスで3時間ぐらいかかった気がする。

(ふう、：)

やつとの思いでたどり着いたエルダの家はすぐ近くに小さめな村と森のある場所だった。

空港の周りと比べればずっとおちついた場所で居心地のいい風が吹いている。

メモを片手に目的の家を探すと目の前に大きなバラの咲く庭が見えた。色とりどりのバラはその庭を持つ質素な

家を華やかにしていた。

「ここか、：」

扉の前に立ち思わずつぶやきながらノックをする。心地良い木の音がした後、室内から何か小さいものが走り回る音がした。思わず首をかしげているとわきの庭から声が聞こえてきた。

「ごめんなさいね。ちょうど庭のハーブを見ていたところなのよ、：あれ？ あなたは村の人じやなさそうね。」

どうやら魔法に携わるひとつてのは美人以外いないらしい。

そこに立つ女性はどこか母性すら感じる美しさを持つていた。しかし一番感じるのは僕への警戒心だ。

「初めてまして。私はセト・ナンブといいます。探偵のジャックさんからエルダさんつて人を紹介してもらつたのですが、：」

警戒心を解くために口を開いたがなぜか固くなってしまい余計警戒させてしまつた氣がする。そんな心配をよそに女性はにこやかな笑顔で僕の目をまっすぐ見た。

「あら、じゃあなたがジャックの言つてた子ね。ごめんなさい。私はエルダ。巷では彩の衣カラーズつて呼ばれているわ。」

夏の日差しを受け僕の運命に新たな鼓動がやつてくる

第八話『運命の謎』

「紅茶にする？ それともハーブティー？」

「あっ、それじゃ紅茶を、」

まつててと言つてキッチンへ向かうエルダを見ながらエルダさんの家を見渡す。なんか外見よりデカイ！？

すぐ目についたのは家を走り回る小さなうさぎだ。どうやら来客を知らせるための物みたいだが可愛らしく、その姿は本物と見間違う程のレベルにいる。これも魔法か、

「（）に来るまで特に何もなかつた？」

紅茶を持ったエルダさんがやつてきて聞く。

「いえ、特に何も、」

咄嗟に嘘をついた。無駄な心配を掛けたくないという思いと面倒くさいと言う思いが僕の心に現れた。

「ホント？ 嘘言わないで！ 細かいことでもいいからしつかり話しなさい。」

突然の厳しい口調のエルダさんに僕は萎縮気味になつてしまふ、「ごつごめんなさい、」

「どうしたの」

「あつ、いや、怒つたのかと、」

「半分正解。でもそんなに厳しい感じだつた？」

自覚ないのかあくこりやきついぜ、

「そういうえば、彼にも言われたな、氣をつけてるんだけどなあ。で、なにかあつたんでしょう。」

あつさり今の会話が無かつたことにされた気がする、だが

確かに何もなかつた訳ではない。ロンדוןに着いてから

「大したことじやないんですけど、ロンדוןに着いてからずつと嫌な感覚がするんですよ。ほんの少しですけど」

「嫌な感覚？」

我ながらここまで確信の無いものがあるだろうか、

「なんかこう、言い表しにくいんですが、悪意と言うか、なんという

か、この国に来てずっとなんですよ。妖精のイタズラですかね？」

エルダは僕の顔を覗き込みながらふくんと言った。

関心とも驚きとも呆れともとれるその声の真意を掴むのは難しい。

「やつぱりジャックの言つていた通り、凄い子が来たわね。」

「へ？」

思つていた反応との違いに思わず変な声が出てしまつた。

「こいついうのつて恥ずかしいよね、」

「そんな小さな物に気づくなんてねえ。私達みたいにその土地に住んでる人間には到底気づけないようなレベルの物よ。ジャックから聞いたわ、センスのいい子が来るつて。まさか卵が来るとわね。」

「卵？」

アガヴェ・エクネ

「竜舌蘭の花とも呼ばれてるわね。才能を持つ者の中でも、魔力の発現が極端に遅い者をそう呼ぶわ。」

「遅い、、ですか？」

何歳で魔力を感知できるのがいいとかはさつぱり分からない。

(もつとジャックさんの元で聞いてくるべきだつたかなあ)

「ええ、遅いわ。普通なら物心ついた頃には目くらましを掛けてない隣人くらいなら見えるはずだわ。そう言うの今までなかつたんでしょう？」

思い当たる節は一切無い、

「はい。あれ以外は今までりませんでした。」

「それならやつぱりあなたは特別だわ。まあそつちを詳しく話す前に聞きたいことがあるわ。」

「私のファーストコンタクトの事ですね。」

この話するの何度目だろう、

「この話するの何度目だろうって顔してるわね。何驚いた顔してるので。フフ、その位はわかるわよ。こういうのはやつぱり本人から聞くのが一番だから。」

読 心 術

僕は三度目の解説タイムに入つた。話すことは変わらないが、相手の反応は別物だつた。詳しく質問を入れ、複雑な表情で話を聞いてい

た。まさに真剣にというやつだ。

一通り話す頃には僕の喉に渴きがやつてきていて、いい加減冷めている紅茶を一口飲みながら、エルダさんの反応を見た。

「ウウム、」

こういう反応もお馴染みとなってきた。しかしながら眠くなつてきたな。疲れたのかなあ

「ちょっと時間がほしいわ。考えを練る時間が。」

「そうですか、……それ、……じゃ、……僕のしつも、……んを」

疲れとはずいぶん回りがはやいなあ

一気に眠くなつてきた、エルダさんが僕の眠そうな顔を覗き込んでいる。

「それもいいけどあなた随分眠そうね。話は明日でもできるわ。取り敢えず2階の部屋が空いてるから。」

声にエコーが掛かつて聞こえてくる、

エルダさんに手を貸してもらつてなんとかベッドに辿り着いた所で意識が途切れた。

温かい日差しが顔を差す。目が覚めたら知らない天井だった。下に降りるとキッチンからエルダさんが出てきたところだつた。
「よく眠れた？」

にこやかな笑顔が気持ちのいい朝をより美しくしてくれる

「はい。おかげさまで。昨晩はご迷惑おかけしました。」

昨日会話の舞台となつたテーブルには一人分の朝食がならんでる。
(なんか悪い気がしてきたなあ)

「いいのよ。私もちよつと時間が欲しかつたし、何より貴方、来たときすごい疲れ顔だつたのよ。」

全く自覚がなかつたが思えばそれもそうだ。飛行機で長距離を飛び、そこからここまでバスを乗り継ぎ。疲れないわけがない。

「ハハハ、……顔に出てましたか」

(ぜんぜん笑えねえ)

「まあ、取り敢えず食べましょ。冷めちゃうわ。」

最近はジャンクなものしか食べてなかつたせいか、エルダさんの手づくり料理は見た目も味も鮮やかに感じる。

食べながらも昨日の話は続いてく。

「少し考えてみたけど、やっぱりそのローブが原因の可能性が高いわ。花が咲くにはそういう魔力的な体験が一番だからね。」

確信を持った声で言うエルダさんを見ながら質問を続ける。

「とすると、意図されたものだと？」

「断言はできないけど恐らくは。」

「はあ、΄΄あとさつき言つてた花つてのはアガ、アガ、΄΄

「アガヴェ・エクネ？」

「そうそれです。そういうことですよね？」

「そいういえばまだ詳しい話はしてなかつたわね。そう、貴方の言うとおりよセトくん。」

初めて名を呼ばれた気がする。あれ？ いつ名乗つたけ？

昨日の記憶が曖昧でしようがない。

「いいわ。詳しく話しましょう。貴方の人生を大きく変えたその力を。」

第九話『竜舌蘭の花』

「確認だけど。昨日私が行つたこと覚えてる？」

昨日といえばおそらく卵発言の後のことだろうなあ。

「魔力の発現が遅すぎるって話ですよね。」

エルダさんは うん と頷いて続けた。

「具体的に言うと魔力の発現つてのは普通なら生まれた時からしてい
るはずって話なのよ。まあ遅くとも物心ついた頃にはつてやつね。」

「え、、それって！」

衝撃の事実か!?

「やつぱり覚えてないのね、、物心ついた頃にはの下りは昨日話した
わよ。」

あれれ？おつかしいぞお？

僕の若干間抜けな反応にエルダさん ため息てるよ、、
「はあゝまあそうなるわよね、、それでね、つまり貴方は遅すぎるわけ
よ。あなた今いくつ？」

「ええと、じきに二十歳です。」

「やつぱり遅いわ。まあ過去に報告が無かつたわけじゃないけどね。」

「前例つてやつですね！」

頷くエルダさんを見て希望が湧いてきた。ジャックは脅しまくつ
てたからなあ。

「はつきりした記録があるのは実験だけね。今やつたら虐待レベル
のものよ。」

「人体実験つてやつですか？」

雲行きが怪しく、、

「産まれてすぐほんとに間もない時に、親や魔力から離れた所で成長
させるつて言う実験。具体的には特殊な結界の中で育てて魔法や魔
術、隣人との遭遇を避けるつてもの。」

「親とも離れるんですか、、」

子どもに選択の余地は無い、、でもなぜそんな実験を？

「才能は親の遺伝が多いからね。接触は避けたいつてわけ。それで実

験は成功。あえて接触させた24まで一度も才能の発現は無かつた
そうよ。」

続けようと口を開くエルダさんに口を挟みたくなつた。

何故、

「何故、そんな実験をしたんでしょうか？話を聞く限りメリットがな
いんですけど、」

「話は最後まで聞くものよ。」

その質問はお見通しつて感じの口調でエルダさんは言つた。

「確かにここまで話だつたらメリットは見当たらない。だけど、あ
なた自身はどうかしら？」

（自分自身？、「アツ！」）

はつとした僕の顔を見てエルダさんは満足した様子で続けた。
「そう。例の隣人に好まれやすい体质、「夜の愛し仔スレイベガ」と似た性質の能
力。」

ジャックからも聞いたがやはり抽象的などころが多い。

「そうね、果物の熟成つてあるでしょ。採らずに置いておくどんどん
甘くなるつて話の。あれと似た考え方よ。外界に晒されない魔
力はよく練られ上質な物になつていくの。」

なるほど。ようやく魔術師達の目的が分かつた。

「つまり、」

「そう！より良い魔力を求めた結果がその実験だつたつてわけよ。ま
あ昔は実験なんかしなくても一定の割合で遅咲きの人間はいたよう
なのだけど、記録は多くないわ。」

「結局は謎が多い能力なんですね、」

過去のことがわかつても、じゃあ僕は一体？やはりローブがなに
かしたのだろうか？

「今回のあなたの場合は昨日も言つたけどローブの人間が怪しいわ。

上質な魔力はだんだん周りにも分かるようになるから、何かの実験を
しようとしたのかもしれない、けど」

エルダさんは僕の全身を見ている。確かに僕は何もされてないの
だ。

「まさに断定はできないってやつね。私も本物の卵を見るのは初めてだからこれって事が言えないの。何か他に聞きたいことある？答える範囲なら大丈夫よ。」

ジヤックのときよりは正確な情報だが、上質な魔力なんて話信じられない。

「今まで魔力と縁もゆかりもない生活をしてきた分なかなか信じられないです、僕がそんな強力な魔力の持ち主だなんて。」

この質問が来るのは分かつていたようだ。ニコツとしながらエルダさんは答えてくれた。

「フフ。自覚がないだけよ。なんせいくら隣人が見えたからって短時間で魔力の存在を呑み込みここまで来てしまうんだからね。その異常なスピードの理解はいい証拠よ。」

初めて気付いた！そういうや僕がここまで來るのに一ヶ月経つてないのか！確かにルーシーと逢った時のことを思い返すと驚かなさすぎに思えてくる。やはりホントの事なんだろう。

「思い当たる節があるようだし。納得できた？」

「はい。あともう一ついいですか？」

「ええいいわよ。」

これは僕にとつて最重要問題だ。

「私はこれからどうしたほうが良いですか？」

エルダさんの顔が突然曇つた。

「あなたは何を望んでいるの？今まで通りの生活？自身の魔力を使う生活？どちらを選んでもそう悪くはないはず、」

「僕は、」

そんなの決まっている。

（だいたい普段の生活に戻つたらこの小説終わりだぜ。）

「僕は自分のこの魔力を使つて世界を知りたいです。今までの生活じゃ絶対に得られない何かが欲しいんです！初めて隣人を見たとき、その、綺麗だつたんです。美しいって思つたんです！この不思議な気持ちに正直に生きたいんです。だから…」

そこまで話すと間髪入れずエルダさんが返してきた

「それだつたらカレッジかい魔法使いを紹介するわ。」

「えつ？」

意外だつた。てつきりこの人自身が受けてくれると思つていたが、

そういうえばジャックからもらつたチケットには手紙がついていた。

『エルダに会いに行く上で最低限は知つておくこと！トップ4

その1 魔法使いは基本長寿（百年くらいはわけないです）

その2 妖精のことを妖精つて呼ばずに隣人とかお隣さんと呼ぶこと。（怒る妖精はほんとにキレる）

その3 魔法使いは別に杖がなくても魔法は使えます。

その4 カレッジにも魔法使いはいます。

それともおまけのその5…』

ついさつきまで忘れていたがやくつと思い出した。忙しいからつてあの手紙を蔑ろにしてたあ～～！

『その5 おそらくエルダは弟子をとりません。』
なんじやそりやああ！

第十話『魔法使いの弟子』

「エルダさんは弟子をとらないんですか？僕はてつきり貴方が…」

エルダさんの表情はあまりすぐれていない。

その質問が来るのはわかつていたらしいが来てほしくないみたいだ：

「え、ええ。私はとらない主義なの。今までも一回も弟子を取つたことはないわ。一緒に暮らすつて気はないの。」

???僕の頭に疑問符が浮かぶ。

（なんで嘘つくんだ？別に『今はとつてない』でいいじゃないか）
「嘘言わないでくださいよ。」

エルダさんがキッと僕を睨む

「嘘？そんなことなでしょ！そんな証拠ないでしょに。それに…」
どうやらあんまり触れて欲しくなみたいだが、これ以上たらい回しはゴメンだ。

「僕が泊まつたあの部屋。」

エルダさんはハツとした様子で開いた口を閉じた

「あそこにある物はよくよく見ると女物ばかりです。しかも若い人向けの化粧品もあつた。古くほこりかぶつてたのもあつたけど、どう考

えてもあなたの物じやないんですよ。匂いも違うし。」

訝しげに僕の顔を除きながらエルダさんは

「匂い？」

と聞いた。

そういうえば自分でもあまり意識してはいなかつたが…

「いや、なんていうんでしょうが？感覚的なやつですよ。一番近い表現が匂いなんですよ。」

「まあいいわ。けど私に子供がないとも限らないでしょ！」

思いの外『匂い』については深く言われなかつた。

（感覚的な話は普通なのか、？？だが今は！）

「子供？それこそありえないですよ。失礼ですが貴女、子供いないでしよう？妊娠してない。」

「それも匂い？」

「嘘の匂いですよ。もし居たとしても養子。だけどさつき人と一緒に暮らす気はないって言つたじゃないですか！もつとありえないですよね。」

ぐうの音も出ないようだ。やり過ぎた感はあるがまだ、、

「匂いだけで思い込むのは困るわ！そ、そうよ。そんなの大した証拠にもならないわ！あの化粧品だつて昔私が使つたものよ！」

反論をするエルダさんに余裕がないのは一目瞭然だ。

申し訳ないとは思つてゐる。こう言うのが情けないし卑怯なのもわかつてる。けど…

僕はゆっくりと腕を上げて暖炉の上の写真を指差す。

そこには2人の女性が写つていた。片方はエルダさんでもう一人はもう少し若い。2人には友人というよりは家族のような…そう言う雰囲気のある種の親密さがある。少なくとも僕には…そしてやはり、エルダさんに最後の一撃を与えたようだ。その表情は歪み、目が潤んでるように見える。

「その写真。気になつてたんですよ。子供のいないあなたとまるで家族のように写るその女性…」

そこまで言うとエルダさんは手を上げ話を遮つた。

「分かつたわ。それ以上言わないで、私の負け。そう、その子は私の弟子だつた子。そしてあの忌まわしい戦争で死んだわ。」

!!!

わかつっていたはずだ。恐らく死んでいる。そんなことはわかつてはいたはずだ。けど、改めて彼女の口からそれを聞いたとき、僕の心は罪悪感で一杯になつていて。やはり僕は卑怯者だ。

「世界大戦ですね…」

「当時、魔法使いや魔術師を使つた戦術も多かつた。私の弟子もある作戦で魔術戦艦の機関室を担当することになったの。出発の日、私は出兵に大反対で、喧嘩腰で半ば追い出すようにしたわ。そしてそれっきり…終戦の直前、その子の上官が報告に来たわ。ドイツの特殊部隊との戦闘中に戦艦は轟沈、あの子は行方不明者になつた。つてね。」

部屋にシーンとして冷たい空気が流れている、、、

僕の生まれる前のことだ。きっとこの人は後悔苦悩の日々を過ごしてきたのだろう。

「僕は。」

なんとか頭に浮かぶ言葉を口にする、、、

「僕は戦争を知らないで生まれ、育ちました。けど、、大切な人がいなくなる悲しい気持ちは分かります。」

「何を、勝手に、、分かる。なんて、そんな言葉で言えるものじやないのよ！」

当然だろう。戦争で誰かが死ぬ気持ちなんか分からぬ。
だけど

「僕の両親は5年前、交通事故で突然死にました。はじめ爺やからその事を聞いたとき、何を言つてゐるのか分かりませんでした。今朝まで一緒にいた人が、つい数時間前まで喋つてた人が、しかも実の親が、、理解には随分かかりましたよ。」

「……」

エルダさんは無言でこちらを見ている。

不思議な表情だった、、、悲しみと憐れみと同情と怒りとが混ざつた
ような、いやそれとも。

「それとこれとは違うわ。」

冷たく言い放つた。どうしても僕を失望させたいらしい。

そうやつて自然に出て行つてくれれば、自分も相手も苦しまないと
思つてゐる。そうに違ひない、、、

「僕は、どこにも行きませんよ。」

「……」

「ジャックは、僕が魔法を知りたいと言つたときに、真っ先に貴方を僕
に紹介しました。弟子を取らない事知つてたのに。」

「あの子らしいわね……」

遠い目でエルダさんは返す。

「僕の目的は魔法をより知ることです。だから、あなたに教えてほし
いんです。僕の生き方を！」

これ以上、これ以上

「僕はもうひとりはヤダ…わがままだけど、それでも僕はどこにも行きませんから!だから、、ウツ…ウ…」

なんで泣いてるんだろうか、、ただただ孤独が怖くなつてくる。

「……あなたつてズルイわね。これじゃあ、私は泣けないわ。」

「…えつ?」

腫れた顔を上げて目を見る。

「そんなに無理しなくていいのよ、、私はあなたに道を示せるかは分からぬ。けど、もう一回だけ、一緒に弟子ひと、暮らすのも悪くないかもね…」

「じゃ、じゃあ…グスン」

エルダさんは僕の顔をに手をあてながら

「いいわ。貴方を私の弟子ひととします。だから…泣くのはもうよしなさい…」

そう言つて涙を拭つてくれた。

ああ、あつたかい…

「よろ…しくおねがいします。エルダ先生」

「こちらこそよろしく。えつと

「セト。でいいです。」

「よろしくね。セト。」

その日の夜僕は泥のように眠つた。

(まだ、ひとりじやなかつた。)

その喜びに浸りながら。

第二章【接触編】

第十一話『新しい日々』

「セトー。そろそろおきなさい。朝食できてるわよ。」

ドンドンと扉を叩く音が聞こえる。

柔らかい布団。清々しい空気。清らかな朝日。

すべてが僕の新生活を祝福しているようだった。

「はい！今行きます。」

時計を見ると朝の6時。夜型不健康生活20代にはちょっと時間が長い時間だ：

寝ぼけ気味でそのまま部屋を出ようとすると先生の声が帰つてきた。

「着替えるのが先よ。下で顔洗つてその後朝ごはんだからね。着替え大丈夫よね？」

もちろんと言いたいところだが、今日の分はともかく実際着替えは2、3日分しか持つてきてなかつた：

なんで持つてこないかなあ

「はい！とりあえずは大丈夫です。」

寝ぼけがまだ抜けないのか若干変な回答にも思えるが、先生はそのまま下に降りていった。

ゆっくりと体を起こし、着替えて下に降りて顔を洗う

(これルーティン決定だなあ)

キッチンへ向かうとすでに食事は昨日のテーブルに並んでおり、先生が待っていた。

「おはようございます。先生

「おはよう。セトー。フフフ」

返事をするなり先生が笑っている。

「どうかしました？」

「いや。なんてことないけど、また先生って呼ばれるとはねえ。つて
ああ、なるほど…」

「70年くらい呼ばれてないもんだからちよつと可笑しくてね。」

第二次世界大戦からもう70年以上経つている。

アメリカや日本では夏に向けてその話題でいっぱいだろう。

「あら。ごめんなさい。早く食べましょう。冷めちゃうわ。」

僕は席に付き食器を手に取った。

今日の朝食はスクランブルエッグにサラダ。あつさりめの野菜スープにトーストだ。

(なんかこんな時間にちゃんと朝ごはんなのって久しぶりだなあ)

「久しぶりなんでしょう?ちゃんとした朝ごはん。」

図星です!

「は、はい、アハハ…どうしてまた?」

「その眠そうな顔が物語ってるわ。日頃の生活のリズムがグチャグチャなのね。けど、弟子入りした以上は、しっかり整えてもらうわよ！」

「げつ…」

「げつじやなくて返事は?」

「は、はい、」

トホホ…

そんなこんなで食事も終わり、話題は今日の事へ変わつていった。

「食器かたしましようか?」

なめたような皿を重ねながら、僕が聞くと

「とりあえず流しに入れておくだけでいいわ。あとでちよつと見せたいしね。」

とニコツとしながら先生は返した。

見せたいものとはなんのことだろうか?考えていると、

「ところで今日なんだけどね、どつちにするか決めたいのよ。」

「どつちと言いますと?」

なんかわくわくしてきた。どんなことでも今の僕なら楽しめるだろう。

「家や、近いとこの村、それから今後の生活についてを確認するか、」
(そいつはいい!)

「ちよつと街へ出て諸々を買いに行くか。どうする？」

（ウーン甲乙つけがたい…）

流しの前で考へてゐると、先生はこつちに来て、

「まあ、洗いながらでも決められるわね。」

と言い、洗い物へ向かおうとした。

「あ！・僕やりますよ！・これでも家では家事は分担だつたんです。」

先生はフフツと笑いながら脇に立つ僕を見つめる。

きれいな目だ…ずつと見ていると吸い込まれそうな…

栗色の髪もつややかだ。そもそも先生はそちら辺の女性じや勝てない程の美人だ

（ああ…きれいだなあ…）

「食生活の改善は髪質の向上にもなるわよ。で、セト。そんなに見つめないでよ、ちよつと恥ずかしいわ。」

「あつーー、ごめんなさい！」

思わず見惚れてしまつた。

しかし僕つてこんなにも表情に出るものなのかな？
どうりで、爺やが僕の考へることをすぐ當てられたわけだ。

「大丈夫よ。それより食器だけね、手伝つてくれるのは嬉しんだけど、せつかくだから魔法を使つて洗おうかなつて。ちゃんとしたのはまだ見てないつてジヤックから聞いたけど？」

思えばここまで、ルーシーの使つていたもの以外、つまり人が使う魔法をちゃんと見たことがなかつた。

「よくまあ、見もしないで弟子入りしようと思つたわね…」

先生はハツとしてる僕を見ながら少し呆れ氣味になつてゐる。そして流しに向かつて手をかざした

「それじゃ行くわよ、しつかり見ときなさい。」

「は、はい！」

「さあ、美しいお隣さんたち、少し力を貸してね。」

そう言うと先生はなにかブツブツと唱え始めた。

アメリカで英語を聞いてもう何年も経つが、今更になつて聞いたことない単語がいくつも出てきて、何を言つてるからよくわからなかつ

たが、大まかに、水へ働きかけてる „のだけはわかつた。

そうこうしていいる内に、不思議な感覚が僕を抜けていった。

暖かく懐かしい、けどまつたく新しい…ただ一つ言えることは、気持ちの良いものだということ。

更によく見ると先生の周りに光る色のついた糸のようなものがいくつも現れ、彼女を包んでいくのが分かつた。

「糸？いやこれは…」

(むしろ光！)

「やつぱり見えるのねこれ。大したものよ。これは私の魔力の結晶とも言えるもの、一種の性質。人によるけど、私の魔力の性質は色や光に関連しやすいわ。」

そうしていると、先生は光の糸の一本をそつとつまんで流れから引き抜いた。糸は少し空中を踊つたあと、洗い物へ向かい消えていった。一瞬強く光つたと持つたら消えてしまつていた。先生の周りの気配と糸も消えていた。

「まあ、こんなものね！こういうのも久しぶりだわ。」

「えつ？もう終わりですか？」

水や石鹼に使われた形跡も無いし、食器だつて積まさつたままだ、

「あせらないでよく見なさい。」

早どちりする僕に先生が釘を刺す。すると

力チヤ

えつ…、

カチヤカチヤ。ジヤー。ガチヤカチヤ。

ひとりでに食器やスポンジが動き出し何もしてないのに水が出てきた。

「す、すげえ…」

思わず声を漏らすと、先生はどこか得意そうに

「ま、こういうことよ。」

と言つた。

魔法の凄さはルーシーに見せられていたが、それとは全く違う性質

の、いわば【人間の魔法】。

やつぱりきれいだ…

感動している僕に先生が、そうそうと付け加えた。

「魔法っていうものは神聖でかつ身近であるものだけど、一番は自分自身で動いて働くこと！こんなことに毎日使っちゃダメよ。今日は特別なだけだからね。」

「無駄に使うなど」

「そうね。まあ遊び半分で使う方が駄目だけどね。それから…」
タツタツタツ！

突然話に割り込んでくる影が現れた。

「あっ！この間のうさぎ！」

そう。割り込んで来たのは初めて僕がこの家に来たとき家中を駆け回っていたうさぎのぬいぐるみだった。

近くで見ても良くできているように見えるがどこかデフォルメされており、可愛らしい。

「そういえばまだ紹介してなかつたわね。この子は来客を知らせたりしてくれる門番のフィル。ある魔法機構マギウス・クラフトに作つてもらつたものの。あつ！マギウス・クラフトは魔法使いの技師みたいなものよ。かわいいでしょ。」

「はあ…確かに可愛らしいですね。」

とりあえず魔法で動くもののはわかつた。

カワイイのは否定しない。

ん？来客用？

「そうね。誰か来たのね。」

ドンドン

言つてる間に扉をノックス音が聞こえる。

ガチャヤ

「どちら様？」

そう言いながら先生が扉を開けると、そこには一人の男が立っている。茶色っぽい髪に眠そうな目。神父のような牧師ような曖昧な服を着ている。

「やあ！エルダさん。お久しぶり！」

馴れ馴れしく手のひらを上げながら挨拶をするその男を見た途端、先生の顔がちよつとめんどくさそうになつてまたもとに戻り次に笑顔になつた。

（そんなに嫌いなのかあ…なんなんだこの人？）

「あ、あらサイモン！久しぶりねどうしてこんなとこに？エインズワースはいいの？」

「まさか!? そんなかんたんに神のご一筆は得られないよ。今日はちよつと急用でね。合間を縫つて飛んできたんだ。なんせこの辺の教会の代表が風邪こじらせちゃつてさ…ん？」

男は先生の後ろを覗き込む。もちろん目当ては僕だ。

「こいつは失礼。お客様がいたのか。それじゃまた…」

「待つてサイモン。いいのよこの子は。」

「いいのつて彼は一体？」

一拍空いた後に先生は少し声を大きめにして言つた。

「私の弟子よ。セトつて言うの。」

「ふうん。セト君ね。うんうん。弟子ねえ……へつ？はつ!?で、弟子!？」

サイモンさんは3度見してる。

澄ました顔で言つた先生みて。僕みて…先生みて…
よほどびっくりしたらしい。

「そうよ。弟子。いけない？別に監視してるわけでもないでしょ。それであなた何しに来たのよ？」

完全にペースを飲み込まれているこの人は驚いた様子を隠せないようだが、やつと用事を思い出した。

「あ、ああ…そ、それでちよつと我々では手が出せない問題がいくつかね…」

はあ…とため息をつきながら先生は扉を大きく開けサイモンさんを迎い入れた。

「話は中で聞くわ。ほら入つて。」

「それじゃ。お言葉に甘えて。」

そう言つて入つてくれれば自ずと先生の後ろにいた僕の前にやつて
来ることになる。

サイモンさんは僕を多少は不思議がつて見てはいたが、

「はじめまして。僕はサイモン教会の神父兼牧師だ。ええっと…」

サイモンさんは手を差し出しながら困った顔をしている。

「私の名前はセト。セト・ナンブです。よろしくおねがいします。」

僕はそう名乗りながら笑顔で手を握り返した。

第十一話『2つの手紙』

「それで…用事っていうのはこれなんだ。」

家に上がったサイモンさんはテーブルの上に5つの手紙を置いた。
別に魔力も感じられないし、ただの手紙のようだ。

先生はその一つ一つを手に取り読み始める。

「少し待つて。今読むから。」

「ああ。構わないよ。今回は厄介なものが多くてね…」

「あ、あの…」

話が途切れたところでサイモンさんに声をかける。

先生は熱心に手紙を読んでいる。

サイモンさんは正面の先生からその脇に座る僕へと目を向けた。

「ん?なんだい?」

「サイモンさんもこれ見えるんですか?」

最近はあまりに見えすぎて普通になつてきたが…家中にはよくわからない生き物が飛んでいた。羽の生えたカエルのような…トカゲのような…ドラゴンつて感じよりサンショウウオつて感じのやつだ。きっと妖精…もとい隣人の一種なんだろう。しかも僕の肩がお気に入りらしく、この2日位でよく乗るようになつていた。まあ先生も何も言わないし、かわいいから別にいいが…

そんな生き物を指して聞く。ここに来た時点で彼が見えている可能性は高いが…

「ああ!もちろん見えるさ。まあだからつて魔法や魔術が使えるわけじゃないけどね。ほんとに見える程度さ。」

そう返すサイモンさんの顔は少し寂しそうではあった。

「昔からそう言うものはよく見えたんだ。親が熱心な人でね、そういう意味では彼らには嫌われてはいたが、子供心にこんなに美しいものがみんなに見えないのはもつたといない。なんて思つたものだよ。」「怖くなかったんですか?」

聞いてから思つたが、変な質問だ。この数週間一度も怖いなんて思つてこなかつたのに…突然、他人に見えないことが不気味に思えて

きた。

さすがにこの質問には手紙を読んでいた先生も顔を上げた。

「怖くなかった。といえば嘘になる。とても不気味ではあったよ。けど僕の住む街には魔法使いが住んでいてね。いろいろ教えてくれたんだ。彼らへの接し方。簡単なおまじない。そうしていくうちに、恐怖を感じることは減つたね。ただ…」

彼の表情が少し曇る。

「ただ…ぐくたまに。どうしようもなく。孤独を感じることはあったよ。」

「他人に見えない。これが如何に孤独か…教会へ行くまではそういう日もあつたね。その点、君は幸せ者だ。」

「えっ？」

「どういった経緯かは聞かないが、エルダは必ず君の良き理解者になつてくれる。」

「サイモンおだてても何も出ないわよ…」

あれ？ ちょっと照れてる？

「なあに。ホントのことを言つたまでき。ハハツハハハ」

笑顔で先生に返すサイモンさんにさつきの曇り顔はなかつた。きっと彼が言いたいことはそういうことなのだろう。

しばらく雑談をしていると、先生が5つの手紙を読み終わつた。「サイモン。あなたの…つまりあなたがた教会からの依頼はわかつたわ。前の一件もあるし…そうねこの2件だけ受けてあげる。」

そう言つて先生は二つの手紙をサイモンさんに渡した。

「2つだけかい？まあ…確かに残りの3つは急ぎではないけど…」

サイモンさんが先生の受けた依頼を確認しながら続ける。

思つていたほどではなかつた。ということだろう…：

先生もここは譲る気がないらしい。キチツとした座り方からよくわかる。

「こつちもセットがいるし、あんまり危険な物事や、遠出するわけには行かないの。」

言い訳にされた気もするが本人にその気はないようだ…

「あつ…もしかして、僕のせいですかね…」

少し心配になつた。ゆっくりサイモンさんの顔を見ると、意外にもそこには笑顔があつた。

「そんなことは断じてない。神に誓つたつていいさ。君のせいなんてことはないよ。そんなに周囲に気を使っておどおどせず、もつと君らしさを前に出していいんだ！ そうだろエルダ。」

隣に座る先生もまた微笑みながら

「そうよ。もともとこれ全部は受ける気はなかつたし。あなたが気を使うことでもないわ。」

と言つて、彼に同意した。その言葉に嘘はなかつた。

「はい…ありがとうございます。」

ちよつと場が落ち着いたところでサイモンさんが椅子を立ち「さて…それじゃそろそろおいとましようかな。それじゃ！ 手紙の一件頼んだよ。」

と言つて机の上に先程の二つの手紙を置き出口へ向かつた。

「そう。気をつけてね。」

玄関まで見送りに来た先生が声をかける。

(僕も…)

「あ…あのー」

「ん？ どうかしたかい？」

「あ、いえ……今日はありがとうございました。」

まつすぐとまえをむき、頭を下げた。

「ハハ。そんな固くしなくていいよ。こっちこそ。今日は楽しかつた。そうだ！ 最後に君にいいことを教えておこう。」

何か思い出したかのようにサイモンさんが止まつた

「なんでしょう？」

「魔法使いとして行くのなら、薬をつくるといい。僕もある魔法使いに助けられててね。魔法使いの作る薬は秘薬と呼べようものとなる。君もきっといい魔法使いになれるよ！ それじゃ！」

そう言つてサイモンさんは帰つていつた。

「なんか、明るくていい人でしたね。」

「そうかもね。けど胡散臭いのは相変わらずつてとこね。」

さて…

「今日は予定変更！この依頼の話と…取り急ぎあなたに魔法道具が必要になつたからそのアポ取りと…これは忙しくなつてきたわ！」

「元気よくしている先生を見ていると、僕自身もなんだか楽しくなつてきた。」

「まあ、まずはこの二つの手紙を説明するわ。」

再びイスに戻り先生は手紙を広げだした…

第十二話『最初が肝心』

「これが受けた依頼の内容よ。」

そう言つて先生は机の上に例の手紙を広げた。

一枚目には

『教会関係者の魔法使い失踪。黒き森に単身調査に向かいその後消息不明。行方不明者名「キリド・フェーン」依頼内容：行方不明者の捜索。本案件の責任者「サイモン・カラム』

二枚目には

『魔術品販売会において非合法品「ドラゴンの天鱗」が出品。依頼内容：その真偽の調査と確保。本案件の責任者「キリド・フェーン』とある。

うーむ。わからんワードも多いがそんなに難しいことは書いてなさそうだ。確実に一つわかることは1件目と2件目に関連性がありそうな事だけだ。

首をかしげる僕に先生が解説を入れる。

「キリドってのは私の知り合いよ。マギウスクラフトで、前に壊れたファイルを直してくれたことがあつたの。今は教会に出入りしていたらしいんだけど。見ての通り行方不明。そんなやわな子じやないし、無謀なことはしない性格だから何かあると見ていいわ。そして、」一息おいて続ける

「その関係ある一件はおそらく2件目の違法取引ね。ドラゴンの素材は取り扱い注意やドラゴンの命に関わるような物も多いから、基本は、カレッジか教会や素材の持ち主本人。つまりドラゴン。あとは管理人からの取引のみが認められているの。で、ここにある魔術品販売っていうのは、そう言うの無視した裏取引で有名なところなの。」いきなりきな臭い話だ。先生の話は終わつたところで僕も口を開く。

「とすると、」

「その販売会の調査に絡んでキリドさんなる人は事件に巻き込まれた可能性がある。と？」

先生は領き

「そう。そしてその販売会は一週間後よ。調べるにも時間がないし、一回そちらに行つてみるしかない。」

といつた。

「僕も行きます！」

こんなにこの世界のことがわかるチャンスはない。しかしおそらく駄目だろう。さすがに素人の僕でもその危険さがわかる。「ダメよ！」

やつぱりか…これはコツソリ行くしか…

「と言いたいところだけど。そういうつてコツソリついてこられても困るし。私から離れない。絶対言うことを聞く。これを守れるなら来てもいいわ。それでも危険だけね。」

心を先回り…、

完全に読まれていたが許可はもらえた。

思わずその場でガツツポーズをとつていた。

「はい！約束します。」

「ホント？ まつたく…口だけじやだめよ。」

呆れながらも先生はどうか楽しそうだ。やつぱり…

「けど行くとなつたらいろいろ準備がいるわ！ 物事はじめが肝心だからね。今手紙で知り合いのマギウスクラフトに貴方に必要なものを頼むわ。明日はその人に合うために、ロンドンへ向かうわよ。」

それでもいくらなんでも無理がある！

「先生。それだと手紙届く前に僕らそこに行くことになりますん？」

今日は安息日。集荷は明日だ。しかもここからロンドンまでは随分ある。速達でも明日中は怪しい…

僕の心配は先生には全く意味をなさない。先生はにこにこしながら

ら

「それはもちろん、普通に出したらそうなるわよ。」

と言つて手紙をサッと書いてしまつた。

今まで万年筆も持つていなかつた筈なのにいつの間に?!

「驚くのはここじゃないわよ。ほら！」

先生の言うとおり。驚くのはここからだつた。

先生が窓を開け、書いたばかりの手紙を外へ向けたかと思つた瞬間
バサツ！

手紙が鳥になつていた。いや正確には鳥の形になり羽ばたいて
いつた。だ。体は紙のままだつたし、生きている訳ではなさそうだ。
しかし…

「な、なんと、？」

今日は驚かされてばかりだ。

「これで今日中には届くわ。それよりも私達にはやることがあるの
よ。絶対に外せない大きなイベントが。」

???

一体なんのことだろう。村の方の案内や裏の森の探索ではないの
は明らかだ。

「一体なんのことです？ 大きなイベントって。」

フフフ。先生がまた小さく笑つた。初めて会つた時より優しく感
じる。どこかいたずらっぽさも…

「それはもちろん…」

おお！ここで溜めてきたよ…

「セト。あなたの初めての魔法よ！」

なるほど！…ハツ！

「えつ！」

「えつ！ ジゃないわよ。魔法使いの弟子になつたんだから当然で
しょ。それにその人にあつた魔具はその人の魔法見て決めることも
多いわ。」

確かに弟子である以上当然ではあるが、さすがにちょっと唐突過ぎ
てびっくりした。だが。

（やつとだ！ついに僕も…）

その驚きもすぐ大きなワクワクに流されていった。

これで僕も魔法使いへの道を一步進める！

希望に満ちた僕を先生は包み込むような瞳で見つめていた

「何事も最初が肝心。さあ！行くわよ。」

第十四話 『結晶の魔法』

人間いろいろな場面で緊張つてのをする。

試験を受けるとき。好きな人に告白するとき。小さい子供だつたら注射を打つ時だつて緊張する。

そして今、僕は人生最大の緊張を迎えている。

「さあ、これを持つて。」

後を追つて隣の部屋に行くと、先生は手にきれいな蒼の結晶を持ってまつっていた。

結晶を受け取るとこれがただの石じゃないことが分かつた。

「わかる？ それは簡単な練習用の石だけど、使用者の魔力に反応して自在に形を変えるのよ。」

どういう性質かまでは知らなかつたが、触れた瞬間。何かが石へ流れしていくのを感じた。この▣なにか▣が魔力なんだろう。

使用者の魔力に反応する、か。それで…

「具体的にどうすればいいんですか？ これ。」

確かに魔力の流れは感じたが結晶に変化はない：

「別段なにかするつてわけじゃないんだけど、それを持つたまま好きなものでも思い浮かべてみなさい。その結晶ならその程度でも変化が起きるはずよ。空気は熱い水、自分は圧力、その中で水晶が成長するつて感じよ」

好きなものつて。んな…ちょっとテキトー過ぎやしませんかね？

(好きなもの)

「楽しかった思い出でもいいわよ。要は印象深い出来物事つてことよ。」

「印象深い… ですね。」

(印象深い… 好きなこと。なんだつけ)

結晶の効果もあつてか過去のことが鮮明によみがえつていく…

ずいぶん前だが、家族で旅行に行つた。いつだつたか覚えてないがまだ僕は小さかつた。

「ほら。セト。きれいでしょ。」

「うん！ママ、これなあに？」

「その花はポピーっていうのよ。小さくて、可愛らしい、ほんとにきれい。ねえ、あなた」

「ああ、来てよかつたな」

とびとびの記憶だがそこだけははつきり覚えている。

そういえばあれ以来家族旅行なんて行かなかつたな、

そう、あそこは、どこか、丘のような、アメリカのどこかの花畠での思い出。

最後の父の言葉がなぜかはつきりとよみがえつたきた。

「そういうえば、このポピーの花はヒナゲシとも言つてな、いたわり、思いやり、陽気で優しい、なんて花言葉があるらしいぞ。」

「フフッあなたにしては珍しいわね。そんなこと知つてるなんて。」

「これは心外だな。一体何だと思つてるのやら。」

「けどこの子がそんな風に育つてくれれば、」

『明るく、元気な子に、』

いい子に――

…

ドンっ！

突然！体に衝撃が走った。

それと同時に何かが体の中へと大量に流れ込んでくる、次第に体が沈み込むような感覚に陥つていき。

何が起きたのか考える間もなく、ぼくは記憶の波の中にもまれて行く。そして、

-----*

様子を見ていたエルダは驚きを隠せなかつた。確かに魔法は奇跡だ。だが決して万能ではない。

「まさか、これほどまでとは、」

目の前に立つセトの手にあつたはずの結晶が、どんどん肥大化しているのだ。その上魔法の輝きも増している。

気づけば足元まで結晶が侵食しており、セトに近いところからボピーの形をした結晶が、生えてくる。

こんな異常事態なのにセトは目をつむつたまま一向に気づかない。声も何度もかけているが反応がない。

「このままじゃ。セト！」

エルダは弟子の身の危険を察し、結晶の中心、もといセトのいるところへ慌てて飛び込んだ。

飛び込んだエルダの指先がセトに触れ、彼の体がバランスを崩したその瞬間。

「あつー！」

彼女の手に電気が流れるような痛みが走った、すさまじいスピードで体から何かが流れ出るような、、

すると部屋は暗くなり、セトの魔力もパタンと止まつて感じられなくなつてしまつた。

バタツ

セトの体が崩れ落ちる。急いで駆け寄ると氣絶をしているようだ。

「こんなことになるなんて、、」

(とりあえず片づけは後にして、セトを部屋に)

小柄とはいえもう20にもなる男を女性が運ぶのは重労働だが、魔法を使おうにもさつきの電撃が原因なのか魔力が安定しない。仕方なくエルダはセトを抱えてベッドの部屋まで運ぶのであつた。セトが気絶している間何を見ているのかも知らずに、、、

特別編 「キヤラクター紹介その1」

【名称】（性別）【所属】：説明

【セト・ナンブ】（男）「魔法使いエルダの弟子」：日本生まれアメリカ育ちの19歳。今年で20になる。誕生日は 10月25日でさそり座、血液型はO型。好きなものは猫とイチゴ。嫌いなものは虫。

卑怯なことが嫌いと言ういかにも主人公みたいな性格だが、実際は臆病で気弱な奴。優柔不断で女に弱い。涙もろく情に流れされやすい、こいつ良いとこあるのか？

竜舌蘭の花アガヴエ・エクネという特殊体質であり、とある魔術的体験により魔力を認知することとなつた。

現在は探偵ジャックの紹介で魔法使いエルダの弟子として生活している。自身の性質もあつて非常に練度の高い魔力を持つておりスレイ・ベガのように妖精たちに好まれやすい。しかし、その為か力のコントロールを上手くできていない。数年前に両親を事故で亡くしておらず、家族と呼べる人物はいとこのショウ・シラカワと長い間家に使用人として働いていた爺やしかいない。

【ルーシー】（女）「？」：大昔に大陸へ渡ったセントールの一族の末裔で、活潑的で明るい性格の持ち主。

普段はセントールらしく運び屋をやつているが、ひよんなどからセトと出会う。信仰や呼び名についてはあまり気にしないタイプらしく、セトに「妖精」と呼ばれてもあまり怒つていなかつた。アポなしでセトにジャックを紹介したりなど、職業柄顔は広い。セトの魔力に惹かれぎみだが、はたして魔力にだけなのか？

【ジャック】（女）「なし」：アメリカのマンハッタンで事務所を構えている探偵。表向きの仕事と裏向きの仕事の依頼数は互いに半々だとか。住んでいる事務所は所謂そういう人向けのもので、普通アポなしでは会えない。てか、最近は忙しらしくあまり事務所にいない。探偵らしく洞察力、記憶力、に優れており、まず後先考えないで行動することはない。ただし、アニメが絡むと別である。声優の推しがいるほどめり込んでおり、それ関係の話となると、前が見えなくなる。ラ

リーという取り替え子の片割れと一緒に暮らしている。

魔法使いの嫁金糸編 銀糸編 の両編に登場する人物

【エルダ】（女）「なし、てか所属そのもの」：周囲からはカラーズと呼ばれている魔法使い。見た目は30代前半といったところだが、お約束で顔と年齢は合つておらず、第二次世界大戦中はもう弟子を取るほどだった。

知り合いが多くカレッジや教会から頼みごとを持ち込まれることもしばしば。昔は旅をして回っていたらしいが、今はイギリスの田舎町のはずれに住んでいる。二つ名の通り魔法を使うと周囲に鮮やかな色の糸のようなものが現れる。戦争で弟子を亡くしているためか、新しい弟子を取ることには否定的だった。セトに昔の弟子を重ねて見ている。

魔法使いの嫁銀糸編 の作品「ナチュラルカラーズ」の登場人物

【サイモン・カラム】（男）「教会」：教会上層部からあることを命ぜられている、神父兼牧師。宗教的に考えるとふつうあり得ないのだが兼任している。魔法使いと教会の橋渡し的なことをやつていていることが多い。喘息のような持病を持つており、ある魔法使いから定期的に薬をもらっている。うさんくさい

そういえば、ジャックも言つてたけどセトと同じ日に同じ能力を持つた人がほかに3人いるらしい…

第十五話『夢追い人』

「私は反対よ！そんなもの行くだけ無駄死にするだけだわ！」

女性の声が聞こえる、怒つてる？

「いつまでもそんなこと言つてられないんですよ。魔法使いが参加すれば戦争もすぐ終わります。この重苦しい生活も終わるんです。だから」

もう一人言い争う声が聞こえる。視界がだんだん明るくなつてきた、ここは

(先生の家、？)

そうだ。ここは間違いなく先生の家だ。

しかも玄関、扉の前だ。だけど…

(なんか全部が少し違う…新しいのか？)

「先生これは…」

僕の先生への言葉は伝わつていなかつた。分かる。存在が認知されていない。それに一向にこつちを向かない。

しかも、匂いも変だ。一部のものからは気配も魔力も感じない。まるで…そこに▣無い▣のに▣有る▣かのように。

そうこうしているうちに二人の話は進んでいく。

先生の相手の女性には見覚えがあつた。それと同時に確信した。(ああ、そうか。ここは記憶か。先生の)

眼の前にいる今まさに家から出ようとする女性。

あの写真の女性だ。先生の弟子だつた。

説得は難航してゐるみたいだけど。

「私は人殺しのための魔法は教えた覚えは無いわ！」

「けど…ドイツはすでに魔術師や魔法使いを戦争に投入しています。

「ここまで…！」

「あの司令官の受け売りで、どうにかなるとでも？」

「けど、先生

「もういい！」

アツ…

今なにか。変な感じがする。その先を言つてはいけない。そんな気がする。

「もう。私はあなたの先生じゃない。出ていきなさい。そして、二度とここへは来ないで！」

言つてしまつた。それは止めることのできない。運命だった。弟子である女性はショックと言うよりも、ただただ、悲しい顔をして扉を開けた。

いけない。それ以上進めば…その扉を開けてはいけない！
(きつと戻れない。)

だが届かない。僕の声も思いも。

「今までありがとうございました。」

それだけ言つて、たつたそれだけ言つて女性は扉を開け、進んでいった。外の光が入つて目がくらむ。悲しい背中をしたまま彼女は光の中へ消えていった。

先生の方を見ようとしたが、何故か動けない。外の光はどんどん強くなり、視界がぼやけていく…
「光が…ひろがつて…」

――セー

誰かが呼んでいる。

――セト！

そうか…先生の声だ…

「セト！」

目の前に木の天井が広がつている。
ぼやけた視界に先生の顔も映つていて。
どうやら僕はベッドの上らしい。

先生は心配そうに見ていて…

(そりやあ、あんなことがあれば一度目はやだな…心配もするか。)

「先生…僕は？」

不思議と達観した感じだが、状況が理解できているわけではない。

例の水晶持つてからのこっちの記憶は曖昧なままだし。

「あなたの魔法が暴走をして、それを無理に止めさせてもらつたわ。

そうしなければあなたは今頃水晶の中よ。ごめんなさい。」

やはり…コントロールできたとは思えなかつたし。

「謝らないでくださいよ…僕の力不足の結果ですから！」

ニコニコして返すとやつと先生の表情が明るくなつた。

「そいつでもらえると少し気が楽になるわ。だけど、流石に危険だつた。そこは私のミスよ…」

そこまでヤバいのだろうか？

そんな僕の疑問はやつぱり顔にてたらしく。

「日本では、こう言うのを百聞は一見にしかずっていうんでしょ。立てる？」

そう言つて手を差し伸べてくれた。

「フフッ。」

「ありがとうございます。」

先生の手を借りてベッドから起き上がつた。温かい手からは優しいものが流れ込んでいた。ん？ 流れ込む？

！

「そういう…実は。」

危うく伝え忘れるところだつた。普通忘れるようなものではないんだが…：

起き上がつたまま。脇の椅子に座る先生を見る。

先生は再び心配そうな顔に戻つている。

「どうしたの？」

「眠つていた間のことだと思うんですけど…」

僕はその奇妙な夢の話をした。悲劇の記憶を。人の記憶を追つた夢を。

第十六話『夢。目覚めて。』

「そう。見たのね。」

先生は静かにそう言つた。

すべて話した。夢の中での出来事。見たもの聞いたものすべてを
⋮

先生の反応は思つたよりあつさりしていた。まるでわかつていた
みたいだ。

「あなたが見たのは私の記憶。間違いないわ。そして⋮」

先生は一息おいて僕へ向き直り、続ける。

「そしてそれこそが、あなたの魔力の性質。」

「魔力の性質、ですか？」

新しい用語登場の瞬間である！

「そう。人間の魔力ってね、性格みたいに人それぞれに特徴がある
の。」「ある人は、炎に関係していたり、ある人は水、ある人は風、ある人は
色…ある人は、心」

「心⋮」

それで⋮、匂いを感じるようになつたのはそういうことか。

「魔法使いである以上、性質の出現はごく普通のことだわ。おそらく
初めての魔法で顕著に出たのね。」

まあ、特別心配する必要はないさそうだ。

「ただ、問題ないつてわけでもないわよ。」

心配する必要があるようだ。

「私はこの色が性質だから、問題にはならないけど、あなたの場合は
心、まして記憶や感情に直接リンクしてしまうとくれば、魔法を使う
だけでなく、握手すらも一苦労になりかねないわ。」

確かに、現に自分の記憶に捕まりそうになつていていたわけだし、相
手に触れたりするたびに記憶や感情がわかるのは話しづらくてかな
わない。

「えーっと⋮、何かしら対策はあるんですね？」

先生の顔色はすぐれない…、これはまずいぞ。

「うーん。まあもとからあるものだからね…そういうそう押さえつけて良いわけでもないし。彼女に追加の依頼が必要ね。」

「彼女って誰です？」

「えっ？ ああほら言つたでしょ。魔法機構の」

そういうえば、今回はその人に合うために魔法を使つたのを忘れていた。

「まあ、彼女に言つたからつて確実に解決できるかはわからないけどね。」

結局は行つてみないと始まらないわけか…

「まあ、追加で手紙を送つとくわ。それじやあそろそろ行きましょう！」

???最近どうも忘れっぽい。大きなイベントが重なり過ぎなのかもしないが、疲れてるのかなあ…

「百聞は一見にしかず。つて日本では言うんでしょ。あなたがさつきやつた魔法の結果を見に行くのよ。」

「あつ。そういうばそうでしたね。わかりました。ん？」

起き上がりうとしてるのだが、体に違和感がある。なんか足の上に乗つかつて重い。

「はつ？ なんだよお。」

みやゝ

「… ギヤツ！」

不意打ちにもほどがある…、なんで今まで気づかなかつたんだ：僕の足の上に乗つかつていたのはなぜか▣みやゝ▣と鳴くサンショウウオだつた。いやサンショウウオもどきかな？ ぶつちやけどうでもいいけど。

「ブツ。なんで今まで気づかなかつたのよ。アハハハ。」

これには先生も大笑い、つて先生がこんなに笑うのはじめてみた。とは言つても付き合いめちゃくちゃ短いけど。

先生がひとしきり笑つてる間に、渦中の生物を持ち上げてどかした。

「寝てる人の上に乗つかるなよな。お前。わかってるのか？」

にやあく

あーわかつてないわ、これ。

やつと自由になつた足をベッドから降ろす頃には先生も落ち着いたみたいだ。

「ハハハ、ハハ、はあ…もう、久しぶりに笑わせてもらつたわ。もう大丈夫ね？」

聞きたいのはこつちの氣もするが氣にせず立ち上がることにした。先生も立ち上がり、わざわざドアを開けてくれた。

「あつ。ありがとうございます。」

扉をくぐると何が問題か分かつた。

「あー。そういう」

「わかつたでしょ。百聞は一見にしかずつてね。」

後ろから先生が顔を出した。

例の部屋から蒼い塊が溢れていた。ドアからそのまま廊下に流れ出ている：

はあく派手にやつちまつたなあく

「ホント、派手にやつたわね。けどこれだけじゃないわ。部屋覗いて

みなさい。」

嬉々としてそう言う先生。こつちは、ハラハラドキドキだ。

（一体これ以上何をやらかしらというのだろうか…）

不安にかられながら僕はゆっくりと部屋を覗いた

第十七話『石切蜂』

蒼い

最初の感想は正直それだけだった。

部屋には▣あの▣はなばたけが広がっていた。ひなげしの花でいっぱいの丘。記憶の中の一幕がそのままそこにあつた。部屋のものを押しのけて出来上がつたその光景は息を飲むものつてやつだ。しかもそれだけじゃない。もし花畠だけだつたらそんなに驚かなかつたかもしれない。

「父さん…母さん…」

記憶そのまま。あの中で見た両親の姿がそこにあつた。
正確には結晶のままだつたし、動いてるわけでもない、色も蒼いし。
だけど、そうであつても、今にも動き出しそうなほど記憶のそれを忠実に再現していた。

「どう? 大変なことになつてるでしょ、つて聞いてる?」

目の前の全てに感動して周りに気が向かなかつた。自分がやつたはずなのに：

足元には道も出来上がつてゐる。

一步踏み入れてみると、

ザクツ

土の触感も本物みたいだ! 見た目は結晶なのに、踏んだ感触は間違いくなく土だ。

気づけば先生が後ろから大きな声で話している。

「私があなたの性質が記憶や感情、つまりそれにつながる心だと思ったのはこれが理由よ。私があなたの方へ飛び込んで触れるまでの一瞬ですべてが出来上がつていたわ。」

確かに、その証拠に父さんと母さんがいるところは先生がはじめに立つてた場所だ。流石にこれは自分が恐ろしい…

「あの、やっぱりこれつて普通じゃないんですかね?」

「ええ…普通の魔法の域は超えてるわ。だつてほら、」

そう言いながら先生はひなげしの花へ手を伸ばした。

プツツ

そんな音を立てていとも簡単にひなげしは摘まれた。

「ねつ? この音なんか、本物そのもの。それに見て」

僕の花の真ん前に蒼く透けてるひなげしがやつてくる。

先生の指で支えられたそれは、ほんとに摘まれた花のようだつた。軽い手の振動や風で頭をフラフラさせ、花びらは纖細なまでに薄く、ほのかに香ります。

もはやこれは結晶じやない別のものだ。別のなにかになつてる。「完全に結晶としての性質を失つてゐる。もはや別物ね。」

「すごいですね」

「あなたがやつたのよ、自覚ないでしようけどね。」

そう言われても…さすがにこれは自覚できないよ。

それで…

「それで… これどうします?」

先生はキヨトンとしてこつちを見ながら言つた。

「どうつて、片付けるのよ。」

手にはハンマーと箒

(意外と物理的…)

「ほら、これで碎いて。」

渡されたハンマーは正真正銘ただのハンマー

あー。これは重労働…まあ自分でまいた種なんだけど。

「ほら、ほつとしないで。そんなに硬くないから。」

先生はすでに砕き始めてる。

僕も…つ!

クシャ
ん?

ハンマーを花へ振り下ろすとまるで踏み潰されたようになつた。よく道端でクシャつとしてるあれだ。確かに柔らかいが、柔らかさの方向性が違う。

もしやと思い他の花もやると、同じように潰れただけだ。

(そうか。結晶が形を変えた物とおなじ硬さになつてゐるのか。)

まあ、さつき先生のやつた通りなら確かにそうなのだが…
ということは…

今度は力いっぱい地面にハンマーを打つてみる。

案の定こつちが痛い目を見た…

「先生！これ碎けませんよ。地面は硬いし、花は潰れちゃうし
(あつ、潰れる分にはいいのか)

先生は手を止め顔を上げた。

「砕けるわよ。セト、あなたそれを▣花や地面だと思って▣叩いてる
から砕けないのよ。そうね…あなたの魔力が結晶を勘違いさせたつ
て言えば分かるかしら？」

うーん。いまいちわからない。

「まあ簡単に言えば、それを結晶だと思つて砕けばいいの。変化させ
た当人が勘違いを気づかせなくちゃ。まあ勘違いってのは例えの話
だけどね。」

結晶と思う。か…

先生はすでに▣両親▣の結晶を崩し始めている。

いや、人の形を模した結晶つてのが正しい。のか…

そう思つて再びさつきの地面に取り掛かると

パリソソッ！

事はあつさり進んだ。そこにあるのは砕けた結晶だけだ。

とは言え部屋中いっぱいの結晶。終わつた頃にはお昼はどうに過
ぎていた。

(ふう…)

片付いた部屋を眺めながら達成感に浸つていると。

「お疲れさま。ちょっと遅いけどお昼にしましょう。」

先生が声をかけてくれた。ん？お昼…いつ作つてたんだろう？

僕が遅い昼食を取つてゐる間、先生はさつき摘んだ▣結晶のひなげ
し▣を追加の手紙と一緒に出していた。

これまた不思議なもので、花は形を崩すことなく封筒に入れられ、
また鳥もどきの手紙と飛んでいった。

(アレ、早くできるようになりたいなあ)

「そうね、便利だから今度教えてあげるわ。とりあえずあなたの目下懸案事項は魔力のコントロール。物が揃つたらすぐ練習を始めるわよ。」

あの～この家で心のプライバシーは何処に行つたのでしょうかね…：

「先生！すぐに人の心読んで会話しないでくださいよ。」

「えっ!? そんな高等なことしてないわよ。」

「えっ!?」

「えっ!?」

あれまびっくり。

またしても顔らしい少し気を付けてみよう…

「あつ。それよりこのあとはどうす…」

ドサツ!!!

食べ終わつた僕の目の前に大きな音と共に本の山が登場した。

「そうね。今日はこれ。」

「は、はあ…」

「あげるから、自室へ持つていつて。簡単なまじないの本と、隣人たちの本。図鑑つて言うよりは神話や昔話よりもだけね。あとは、薬草の本。ひとまずはこれでいいでしよう。」

「これまたいっぱいの教材でござります…」

「わ、わかりまひた…」

「別に今実践つて言つてるわけじゃないのよ。下手に、『ちよつと練習。』とか言つて知らないところで魔法を使われたらたまらないもの。」
(ハア…信頼ないな…)

翌朝、起床時間6時20分。なかなかいい感じだ。

支度を済ませてダイニングへ向かうと、ちょうど先生が皿を運ぼうとするところだつた。

「おはようございます。あつそれやります。」

「おはよう。ありがとうございます。じゃあお願ひするわ。」

朝食の話題はもちろん今日行く所の話だ。

「その、アンジェリカさんつて人はどんな人なんですか？」

「日本では███百聞は一見にしかず”つていうんでしょ？」

「なるほど、わかりました。」

納得しきつていらない僕を見ながら先生が笑った。

「別に悪い人ではないからあつてみてのお楽しみつてことよ。」

家を出て、バスに乗り、列車に乗り換え一時間半：

初めて来たときより随分早くロンドンについた。

「やつと着きましたね。」

「そうね。あれ？ セト、それはどうしたの？」

先生は伸びをしている僕の腰のかばんを指差している。

正確にはストラップみたいにぶら下がってるルビーのことだ。

「これは…母の形見です。事故のとき身につけてたらしくて。ネックレスなんすけどね。」

手にとつて先生に見せながら話した。

「お守り代わりみたいなもんです。」

「そつか、ごめんなさいね。」

「いえいえ、大丈夫ですよ。」

ホントに大丈夫だ、むしろ気づいてくれて嬉しいくらいだ…

「ここよ。アンジェリカの店は。」

先生に連れられたり着いたそこは、ぐく普通の建物だった。街なかにあるなんの変哲も無い。ただ1つ気になるのは、どう見てもやつてそうには見えないってことだ。

しかしそんなお構い無しで先生は扉を開けて中へ進んでいった。こつちはキヨロキヨロしつぱなしだ：

すると奥の扉が勢いよく開いて奥から女性が出てきた。

バタン！ つて大きな音にビクツとなつたのは秘密だ…

「あらいらつしやい！ 速かつたわね！」

「久しぶりねアンジェリカ！」

「つてことはその子が？」

先生にアンジェリカと呼ばれた人は、グイツとこつちに顔を寄せて言つた。なんか：美人なんだけどそれ以上にカツコイイ感じの人だ

：雰囲気がガツシリしてる。アンジエリカさんはそのまま僕に手を伸ばした。

「はじめましてセト君。私は魔術機構マギウスクラフトのアンジエリカよ。よろしく！」

「よ、よろしくお願ひします。」

手を握り返し、顔を上げると

彼女の瞳に映る自分がひどく小さく見えた。

第十八話『赤い想い』

通されたアンジエリカさんの作業場は見たことない道具や材料がいくつもあつていかにもつて感じがしていた。

まあいわゆる作業場つてのを見るの初めてだけど…

「見るのはいいけどむやみに触るんじゃないよ。」

「アツ！はい」

キヨロキヨロして僕にアンジエリカさんが声をかけた。

そういうや今日は僕がメインで来たんだったよな。しつかりしなきや

「エルダが寄越した手紙のものはほとんど用意できるわ。問題は…」

彼女の手には例の花があつた：

やつぱり一筋縄では行かないらしい。

「竜舌蘭の花…下手すれば夜の愛し仔より珍しい存在だからね。ここ

までの物をほぼ無意識で完成させてしまうほどの魔力を抑え込むのは難しい。いや、できることにはできるけど、かなり制限が強くなってしまう。とりあえずいくつか用意はしてみたから試してみて」

アンジエリカさんの手元にはいくつかの指輪があつた。

「指輪…ですか？」

「手は体と外界を繋ぐ重要な部分。そこを押さえれば影響を与えやすい。とはいえそれは普通の話。ちゃんと水に入れないと枯れちゃうような結晶花作るようなレベルにどこまで効くか…」

バックを脇において指輪一つ取つた。

きれいな銀色で目立つた装飾のないシンプルな作りだ。

結構こういうの好きだな。

早速右手の小指に付けてみた：

「どう？ちょっと手を貸して」

アンジエリカさんが僕の手を見てみると顔色は良くない。

「うーん…普通ならこれで無駄遣いは抑えられるんだけど。

ほんとに雀の涙くらいしか変化がないわね。どうするか……ん

？

「この子の魔力は相当のものね…エルダがあんな手紙を書くから期待はしてたけど。正直私の予想を遥かに上回っている…」

「アツ…」

「なるほど…これが意志とは別に他人の心を読んでしまうって言うやつね。」

手が触れただけで今アンジエリカさんが何を考えているのか分かつた。彼女の内の声がはつきりと聞こえた。

「ごめんなさい！けど、止め方がわからなくて…」

慌てて手を引いたが結局記憶まで覗いてしまった。

――――――

「私達の…子供。」

「なあアンジー。名前は決めたのかい？」

「もう決めてるの。アルシアつてどうかしら？」

――――――

『アンジー！今度こそ僕と…』

『・・・・・』

『だ、だめかい…？』

『フフッ。そんな弱気じやいいものもだめになるわよ。』

『えつ？』

――――――

幸せな家族だ：

『そう。確かに私は幸せものね。』

『本当に、ごめんなさい。』

『そんなに落ち込まないで。今いいこと思いついたから。』

うつむく僕の手を取りながらアンジエリカさんの目線は僕のバツクへ移っていた。けどわかるとても優しい匂いがする。ちょっと尖つた人かもと疑つたのは間違いだつたようだ。

『何か…得策が？』

先ほどまでの反応では望み薄だが：

「ええ。あなたその石はどこで？」

彼女が指したのは例の母の形見のルビーだった。

「母の形見ですが……それが？」

「お母さんお優しい方だつたのね。」

それを手に取りながら彼女は続けた。

「誰かを守りたい。助けたい。このルビーには想いがこもっている。普通のどこでも手に入るルビーだけど。この想いは手に入らないわ。想いは魔力を持つて宿っている。これだわ……」

「あの……全くわからないんですけど。」

話しにちょっと置いてかれてるな……

「要是このルビーに込められた力があなたを守ってくれる。これこそ今の貴方に、魔力のコントロールにまだ慣れていない今のあなたにピッタリのものってこと。それに余計な加工もいらなそうね。」

死の間際まで母のつけていたあまり飾り気のないネックレス。なんだかんだで手放せず、ずっと持っていた。血を吸った宝石だ。と言われたこともあつたが気にならなかつた。なるほど。これが愛のなせる技と言うやつか……

アンジエリカさんは僕にルビーを渡してくれた。

「ホラッ。これをここじゃなくて、首にかけないさい。心臓の上つていうのは手以上に意味を持つ場所だからね。多分そうしていれば極度に相手の^{ナカ}心を覗くことは無くなるはず。つて聞いてる？」

母さん……

結局アンジエリカさんの説明はあまり入つてこなかつた。僅かな記憶の中で生きる母に想いを馳せることが自分にできる数少ない感謝。なぜだかそう思えてしようがなかつた。手に握るルビーが少し暖かかつた。

第十九話 『準備万端?』

部屋の外で待っていた先生のとこに顔を出した。

先生はいつの間にか小さい女の子と話をしていた。

一緒に椅子に座つてる。

「エルダさんは魔法使い何でしょ? 弟子はいるの?」

「ええ、ちょうど最近できたわ。」

「いいなう先生なんだ!」

無邪気な笑顔を見せる女の子に思わず笑みがこぼれた。アンジエリカさんと同じ雰囲気がする。おそらくさつき観た記憶の娘さんだろう。

「先生つていうのも大変なのよ。あつ! セト。終わつたみたいね。」

僕に気づいた先生は立ち上がりつて女の子と一言三言交わしてからこつちに来た。

女の子はニコニコしながら別の扉に入つていった。

ん? 今僕、地味にスルーされたような…氣のせいかな?

「早かつたわね。それで、どうだつた?」

「それは…えーと。アンジエリカさん。なんて言えばいいんでしたつけ?」

「そうだね、今日は偶然と言うなの必然つてやつだね。つまり――」

専門的なことは全くわからない僕に代わつてアンジエリカさんが説明してくれた。大雑把に言えば強い想いは物体に力をもたせる。とのことだ。

――――――――

「なるほどね。あのルビーがね、良かつたじやないセト。」

「ん? あつハイ。」

いけない。ボーッとしてた!

「大丈夫?」

様子を見ていたアンジエリカさんがニヤニヤしながら言つた。

「そりゃあ、他人の心を意識しそぎてあれだけ神経すり減つてたんだ

から疲れが出てくるのも当然ね。これで落ち着くと思うわ。」
なるほど。そういうものなのか。てか何故ニヤニヤしてるんで
しようかね？

「それにしてもあんたたち親子みたいね。」

ニヤニヤの理由判明

「おつー！ 親子ですか!?」

意外だな…そう見えるものなのか：

「もう。何言い出すかと思つたら。茶化さないでよ。」
ん？ なんだか先生はまんざらでもないご様子…
やつぱりほかあ子供なのかあー？

アンジエリカさんも察したようでやつぱりニヤニヤしたまま。

「セト君。まあほら。頑張りな！」

全くフオローになつてないんですが：

魔法使いってのはそういうの上手いんじゃないのか？ ほら、話術と
か色々さ：

――――――――――――

魔法使いといえば

「そういうえば。アンジエリカさんも魔法使いなんですか？」

「ええ。そうよ。それがどうかしたの？」

ちようど二人もいるし聞いてみたいことがあつた。

「いや。ちょっと気になつたんですけどね。今この世界に魔法使いつ
てどのくらいいるんですか？」

先生は僕がこの質問をするのは意外だつたようで、ちょっと驚いて
いる。一方アンジエリカさんは納得した顔で見ている。

「やつぱり自分のいる立場つてのが気になるんでしょ？」

おお！ アンジエリカさん大正解！

「へー。今の子つてそういうこと気になるのね。」

先生はあんまり気にしないタイプなのか。

「いやいや。エルダ。気にしてないのあなたくらいよ。絶滅寸前の自
覚あるのかね。」

「えつー。」

絶滅…寸前？確かにそこらじゅうに転がってるものじゃないけど。「絶滅ってそんなに少ないんですか？」

二人とも頷いている。マジか：

魔法使いが減少の一途を辿る理由…それを先生が答えてくれた。「世界大戦の話は前にもしたでしょ。」

それはもうよく覚えている。間違いなく先生の人生を狂わせた出来事だ。

「あれでたくさん魔術師や魔法使いが死んで…ただでさえ生まれる数の少ない魔法使いは極端に減ってしまった。」

「さらにいえば、魔法使いつてのは長生きなせいかどうかにも子供を作ろうとしない。これは昔からなんだけど、絶滅への道に拍車かけてるんだよね。」

アンジエリカさんが補足を入れてくれた。

結局どこかしこにも戦争の影がちらついている…

「そつか…絶滅寸前か。」

「ま、そんなに気にするものじゃないわ。そんなの騒ぐのは学者たち位だもの。」

まあ確かに日々の生活には関係ないか。

「確かに。そうですね。ありがとうございます！」

アンジエリカさんはなにか思いついたような顔をしていた。

「それじゃ、ありがとねアンジエリカ。そろそろ行くわ。」

「ええ。追加の分はあとから送るから。ほらッ。セト君！」

そう言つて入口の前でアンジエリカさんは大きな袋を渡してくれた。中にはなんか色々入つてる。

「ほんとは一個一個説明したいんだけど。珍しく仕事がいっぱいですね。簡単な説明書入れといたわ。何でも学院御用達の魔法機構が消えたとかでさ。物騒だよね。」

同業者なわけで、娘さんもいるしでやつぱり心配なんだろうな…：

「その消えた魔術機構を探すために大急ぎであなたのどこに来たのよ」

消えた魔法使いキリド・フェーン。それにはおそらく闇取引が関係してゐる：正直先生が言つたとおり新人の僕が首を突っ込んでいい代物ではない：ただ、興味はある。めちゃくちゃ興味津々だ。闇取引とか興奮するじやんか！（これだから子供扱いなんだろうな…）

アンジェリカさんは驚いた顔して僕を見る。そりやあそだわ

⋮

「まさか、噂の市場にこの子連れてくるの？初めての家族旅行には向かないわよ。」

先生はそんな事は百も承知といつた表情だ。

「けど、弟子なつたばかりの子を置いて行くわけにもいかないでしょ？この子だつてなんだかんだでじき二十歳よ。それに私もいるし。」

なんだかんだ…

「まあ、それなら止めはしないけど…セト君、気をつけてね。」

「はい！今日はありがとうございました！」

店を出ると昼過ぎになつていた。近くのレストランで適当に昼を済ませて、僕らは帰路に就いた。

帰りの列車で袋の中を見ると、見たことない素材で出来たものが色々入つていた。

メモによると

- ・ 海鋼岩のナイフ
- ・ 鳴神鳥の羽の外套
- ・ 火山蜥蜴の皮のベルト
- ・ 蛍石のルーペ

だそうだ。あと下の方にさつきの指輪がいくつか入つてる。

もしもの時の予備だそうだがもしもの時つて一体…

先生に用途を聞きつつ日暮れ前には家についた。

明日からは忙しくなる。あと実質4日で最低限の魔法のコントロールを身に着けなければならぬ。販売会は5日後。失踪者も出るような一件だ：慎重にならなくては。

僕は不安と期待の混沌の中眠りについた：

第三章【疾走編】

第二十話『罪の取引』

通りに市が開かれている。さばかりでいる品はどれも危なそうなものばかりで中には見せかけの偽物もある。

売つてゐる連中も近寄り難いやつばかり。

思わず先生の方へギュッと肩を寄せる。
嫌な匂いがする。嘘と妬みと殺意と：負の感情ばかりが転がつて
いる

ここはイギリスのとっぱずれ。一部ではかのホワイトチャペルからもじつて暗く深い街^{デイープチャペル}なんて言う人もいる。人口は少なくはないが経済的な周りがなく：貧困層の多い街。そんな街の裏で魔術師たちの妖しい取引が行われている。競売場^{オーソクション}ですら取り扱おうとしない物が出回つてゐるとか、

3日間行われるこの販売会は非合法とかそういうレベルではない。魔術師たちの警察的なこともしている学院^{カレッジ}ですら余程のことないと首を突つ込まないらしい。

そんで今日は2日目。初日はなんの収穫もなかつた。

すでに通りの中程まで来たのだが、今日までの出来事は忙しいって言葉で片付けられるようなレヴエルのものじやなかつた。

例のルビーのおかげで他人に触れただけで記憶やら感情を意図せずして拾うことはなくなつたし魔力の方も結晶^{あん}_なに^にの一件なることはなくなつた。

（ルビーけつこう有能だなあ）

おかげでコントロール面ではなんとかなつてきたわけなんだ。鼻はむしろ効くようになつたけど。

先生が言うには余計な魔力の消費がなくなつたからより纖細になつたんだとか

問題は▣お勉強▣の方だ：

最初は簡単な睡眠薬やら傷薬も作れなかつた。というか効きすぎ

てむしろ害になつてしまふ。睡眠薬は少し摑つただけでその場で気絶したように眠っちゃうし。傷薬は傷は治るけどその後が赤く腫れっぱなしでなかなか治らないしで役に立ちそんもないし……

「おつかしいなあ……容量もやり方もあるてるのに……」

例のサンシヨウウオに睡眠薬を嗅がせたらそのまま寝てしまつた。飲んでから三十分して効くはずなのになあ／＼しかももう起きてるし……

「どう? できた?」

先生が様子を見に来てくれた。上手く行つてないのが顔に出てたようでもビミョーな顔してる。

「どうもこうもこのザマですよ。凄まじく速効性だし、凄まじく効果が短命だし……」

「魔力の使いすぎね。まあ何回かやつてコツをつかむしかないわ。他のはどう?」

魔法の方はけつこう自身がある

火を起こすやつは特に上手くできる。（というよりそれ以外は暴走氣味なんだよなあ）

僕は先生に促されて魔法を使おうとした。両手を胸の前で合わせてからゆっくり開く。ちょうど、ハンドボールを持った感じだ。「さて、ちよいと君らの力を借りるぞ。」

目を閉じて、最近知り合つた火の精たちを呼び集める。

『火起こし? フフツ。僕らの愛しい隣人たちは火も起こせなくなつてしまつたのかい?』

「あんまり馬鹿にするなよ。」

『はいはい。まあ良いさ。ほら。』

『ローワンの花 サンザシの葉

恐れを祓え：道を指せ……』

頭の中でイメージする。手元に小さな火の塊が産まれる……それは明るく、自由に動かせて……

ボウツ……

あんまり大きくなはならなかつたが手元に火の塊が出来上がつた。

(実は呪文が中途半端だつたのは秘密だ…)

というか軽口な隣人の多いこと多いこと…)

手のひらに乗せても僕は熱くない。けどちゃんと燃えるし、他の動物は熱そうに避けていく。すでに試してある。

自信満々に先生を見ると。妙なことに、意外そうな顔してる、なにか不味かつただろうか?

「セト…その子たちは?」

「えつ?」

心配する必要はなさそうだ。先生の興味はこの火の精達にあるようだ。

「いや、あなたの魔法は見事なものよ。隣人のおかげもあって随分安定してるし。けどその手伝つた子たちつともともと火山の子じやないの?」

この辺りにいる隣人じやないらしい。

そういえばはじめつて合つたときに…

『僕らは風に乗つてきたんだ。竜舌蘭エアリエルの花の魔力に誘われてね。』

なんて言つてたなあ。

「何でも、風の子と一緒に来たらしいですよ。」

「わざわざこんなところまで? よっぽど好かれてるわね。それなら嘘には気をつけなさい。」

「嘘、ですか?」

まあ確かに嘘つきはナントカの始まりなんて言うし、

「隣人たちは嘘を嫌うわ。他人を嘘で貶める人間との契約に信頼性は生まれないってこと。」

隣人たちの契約への態度を侮辱してはいけないってことか…

「はい!わかりました。それで、このあとは…」

いい加減疲れてきた、と言うより脳みそパンクしそうだ…

一回に入つてくる情報量が凄まじい。

「お昼挟んだら、庭で薬草についてと隣人との魔法についての指導! まだまだやることはたくさんよ!」

こういう時、先生はかなり厳しい…

――――――

そんなこんなでかるくスバルタな数日間を過ごしてきたおかげで、いくらかマシにはなったが…

さつきからすれ違う人間から感じるのは妙な匂いばかり、せっかくついた自信が風前の灯火状態だ…

「セト、離れないで。」

小声で先生が声をかけてくれた。さすが長年魔法使いやつてるだけあって先生は汗1つかいてないし、露店の出している商品に目を光らせながらも周りへの警戒も怠つてない。

しかし。ほんとにドラゴンの天鱗なんて出ているのだろうか？初日はそんなもの無かつたし感じなかつた。

不気味な空気の中で不安が渦巻く

第二十一話『天鱗』

「なあ、あんた。そうあんただよ。ちょっと見てかねえかい？」

薄汚れた身なりの男が突然脇から手を伸ばしてきた。

ちらつと目をやると、こりやまあみごとに呪いの品々が揃つていやがる。

「ん？ 私？ 悪いけど先急いでるから。」

そう言つて振り払おうとしたら、むりやり腕を掴もうとしてきた！ しかも見かけのわりに素早い。しかも馬鹿力だ。

（なつー！ いつ！）

「なんだ、ずいぶんたけえ声の兄ちゃんだな。なあに大したもんじやないけどさ。見てつてくれよ。後悔はさせねえぜ。」

こういう場で声を出して目立つのは自殺行為だ。

だが男はなんとしても僕の手を商品に触れさせようとしてる。（まずい！ なんの呪いだか知んねえが。触るのはまずい！ 振り払わなくては！）

バシッ！
「のわつ！」

あわやといったところで

何故か弾かれたように男が吹っ飛んで行つた。

いや、自分から後ろへ飛んだのか？ ただふつとばされたなら腕を離すとは限らない。なんで自分から…って

その理由は自分の手を見れば一目瞭然だつた。

シユーツ シユーツ

僕の手が蛇になつてる…いや、蛇に見える。

感覚は普通の手だが、見た目は腕の太さはある大蛇が袖からのぞいているという感じになつてる。

さつすが先生の魔法だ。なあに別に確認するまでもない。この感覺は先生の魔法だ。

腕を外套の下に隠すと元通りになつていた。

そのまま脇の先生の方へスッと寄つてまた歩き始めた。

「セト。離れないって約束でしょ。気をつけて。」

小声で先生が忠告する。

「すいません。迂闊でした…」

「今日は上手く行けば手に入るかもしないんだから。」

そう、先生がピリピリしてるのも当然だ。

さつきから結構道を進んでいるが、昨日に比べて客の反応がおかしい：小さな声でドラゴン。とか鱗つて喋つてるし焦つてている匂いもする。これは当たりかもしない。

騒いでる連中は1つの露店に集まっている。見た目はほかと変わりないものだ。

離れているせいで肝心のモノは見えないが、商品を置く布には字が書き込んである。ルーン文字か？

「なるほど。セト。あなたが見つけられないのも無理ないわ。あの布は魔力を遮断する魔術が組み込まれている。これで包んで運べば誰にも気づかれないと魂胆ね。」

なるほど。頭を使われたわけだ。だが！

「けど、あの布の匂いは覚えましたよ。」

「えっ！」

「中身の魔力を覚えるのは大変ですけど、外見の布なら…魔術がかかつてますからよけいに。」

ちよつとだけ偉そうに行つてしまつた。まあいつか。先生はびっくりして目を見開いてるし、すこーし自慢気のまでもバチは当たんないだろう。

「布の方か：確かにアリね。持ち主はここにいる？」

「あたりを探つてゐるんですけど、同じ匂いのやつはいません。おそらく今売つてる男は雇われか、仲間か…まあまだどつかに別のやつがいるのは確実です。」

話しながら露店に近づいてみると、間違いない。虹色に輝く1枚の鱗。魔力封じの透明なケースに入つていてもわかるこの感覚。

「これね…」

「これですね…」

ドラゴンの天鱗…どういったところから取れるかは知らないが、
とつても貴重らしい。自身の魔力のみが頼りの魔術師たちにとつて
は喉から手が出るほど欲しい代物だとか。

「なあ…君たちも他のと一緒で見てるだけかい？ そんなら買うやつの
ためにどいてほしいんだが…」

売つてる男は比較的若い感じの痩せ氣味で小綺麗な感じのやつだ。
闇商売では多少浮く部類だ。

「いくらで売つてくれるんだ？」

「えっ！ ちよとセト！」

見つけてからのことは先生とあんまり話していなかつた。最初は
出ないだろうって思つてたんだからまあしようがないね。まあそれ
もあつて勝手に事を進めようとする僕にさすがの先生もけつこう慌
ててる。

「ん？ 買う気があるのかい？」

「こういう商売で御託はいらんだろう。値段を聞きたい。」

「フツ…面白いね！ 値段は560, 300ポンドだ。あんたに買える
ようなもんじやないとお」

日本円にして八千万…まあ必要経費だ。

「よし買つた。支払いは小切手でいいな。」

「そうそう。大人しく諦めなさ…はつ？」

「えっ！ セト？ いま買うつて？」

「もつかい言おつか？ 買うよ五十六万三百ポンド。小切手でいいかい
？」

周りも売りても先生もみんなこれには驚いている。そりやあそ
だらう。まだ二十になるかならないかの子供があつきり五十万ポン
ド以上を出したんだから。こればつかしは両親とショウ兄さんのお
かげだ。

「あのガキ…買いやがった！ 本物かもわからぬえのに！」

「いや、ほんものだよ

「どうすんだ？ それ以上出すか？」

「やめとけ破産するぜ

「けどあの余裕の顔見ろよ…いくらまで出せるんだ?」

まだ倍は行けるな

「どつかの金持ちの御曹司かなんかかよ!」

まあ間違っちゃいないかも

これだけ注目を浴びれば…目的の連中もそのうち。

店主に向き直る。まだ少し腰を抜かし気味だが

「よ、よし!男は言つた事は必ず守るもんだ。売つてやる。小切手は確かに受け取つた。いいか?もし騙したらそれなりの報復があるだろうつってのだけは覚悟しとけよ。」

男は静かに、だが鋭く忠告をした。

「無論だ。しかしわかっているな?小切手を偽装したりしてみろ。私は君たちを地の果てまで追い回す。そして…」

「わかつた、わかつた、それも約束しよう。ほら。これが【ドラゴンの天鱗】だ。」

例の箱ごと横してきた。まあ、中身が中身なだけあつて重くはない
がけつこう持ちにくい…

「ああ、ありがとう。それじゃ行きましょう。」

唖然としてる先生を少し無理矢理連れて店を離れた。

見物客も僕に寄ろうとするものはいなかつた。みんな一步二歩と
後ずさつていく。

「あなた…そんなにお金あつたのね。」

先生そこ感心しちゃ駄目なところです。その言い方だとなんか僕が
金づるっぽいです…

「まあ、いつもあんなバカみたいに使うことは無いんですけどね。先
生の役に立つならどうつてことないですよ。」

だが先生の顔は曇つたままだ…

「けど状況は悪くなつたかもしれない。」

「いや。逆に進展したと思いますよ。明日もう一回ここに来れば、お
そらく奴らが出てくるでしよう。」

向こうから来てくれるつてんなら万々歳だ。

「まあそうだけどね…はじめは売れ残つたところを付けようと思つた

んだけど…逃げられる可能性も大きかったからよしとしましよう。
僕らはいつもよりは緊張した面持ちで宿へ戻つていった。

第二十二話『吟夜弄夢』

宿についた僕らは戸締まりを確認してから安つい薄つといべツドの上に座った。

「はあくくく。」

先生がこんなため息つくの初めて見た：

「そりや、セトが突然あんなことするから。つてアツ！ ちよつと！ 何出してるの！」

僕は買つたばかりの鱗を箱から取り出していた。

こいつはすごい！ 触れた途端に体に流れてくるこの力。普通に隣人たちから借りるものとはレベルが違う。

全身の神経を撫でられるような、なんかこう、ゾクゾクする感じの一種の性的な快感ある。

ああ…これはけつこう…

「ダメツ！」

「あつ…」

バシツと先生に取られてしまつた。名残惜しそな僕の顔に気づいたのか先生は多少怒つた口調だ。

「そういうものには一種の依存性があるの。ましてあの場で買つたものを素手で触るなんて。それに今持つてる間、ずいぶん恍惚な顔してたわね。その髪の長さと中性的な顔立ちのせいでほぼ女の子だつたわよ。しつかも小さいからよけいにね。」

おうおう、後半けつこう好き勝手言われた気がするぞ…

「先生、それもう悪ぐ…いや、いいです。」

「これは預かっておくわ。」

そういつて先生は胸もとにかけてあつた小さな布袋に鱗を入れてしまつた。袋にはルーン文字が書き込んである。

「けど、先生。それ僕が買つたんですよお」

「さつき、私の為になるなら別に良いつていてたじやない。」

「まあ、それはそうですけどもね…ズルイですよ。」

先生は呆れ顔だ。

「あのねセト、私が自分が快楽に酔いしれるためにあなたから取った
と思つてるの？」

「いや。そういうわけじゃ……」

ある気もする。言われると反論できない、疲れているんだろうか…
自身の先生をそんな目で見るなんて。

「もう寝なさい。疲れてるのよ。」

先生に言われるままに僕は眠りについた：

「つ……んっ。」

眠りに…

「くつ…あ、！ハアハア…んあつ……！」

寝れない！てか寝れるわけ無いでしょ！

宿の部屋は狭く二人のベッドは、ほぼくつついでいる。
さすがにこの状況で寝返りを打つ勇気は僕にはないのでスルーして
たいんだが。まつたく、誰だよ。『快楽に酔いしれるために取り上げ
たんじゃない』なんて言つた人は！

僕は俗にそういう事を知る時期に周りに女性がいなかつたけど、さ
すがに背中の向こう側で何やつてるか位はわかる。こころなしか先
生のベッドのシーツも動いてる音がする。もう布団を被つてやり過
ごすしかない…

少々呆れ氣味ながらも顔を真っ赤にしていると、先生の口から漏れ
る声が変わってきた。

「くつ…ハアハア…うつ…うう」

ん？なんだか苦しんでるような…

そうこうしてるうちに先生の呼吸はどんどん乱れていった。なに
かおかしいぞ！

バサツ

慌てて飛び起きて横になつている先生を見る。よく見れば先生は
大汗をかいてびつしよりだし息も絶え絶え…
胸もとでは鱗の入つた袋が光つてゐる。

眠つていながらも表情も険しいもので、手は胸を抑えていて苦しそ
うだ。……？光つてゐる？

そう、光つてゐるのだ鱗が。十中八九原因はこいつだろう。
大急ぎで先生の首に掛けられた紐をほどいて袋をとつた。

そもそも僕が触らないための措置、今となつては僕のカバンの中に放り込んでも大丈夫のはずだ。この小さなカバンは先生のおかげで僕にしか開けられないようになつてある。失くす心配はないだろう。

「先生！先生！」

肩を揺らして無理矢理起こす。このまま寝たままでいるのはまずい気がする。

「うつ…ううん……ハツ！あ…あれ？私…？」

「先生！大丈夫ですか？」

糸が切れたように緊張が解けてゆく…顔色はとんでもなく悪いが無事なようだ。

「セ、セト？えつ…あ、ええ。大丈夫よ…はあはあ…それにしても…」「先生、うなされてたんですよ。それも尋常じやなくてそれで…・・・ドラゴンの鱗が光つてええつと…」

慌てて言葉に詰まる僕を制する。

「そう…それじゃあれは鱗に見せられたのね…心配かけたわね。もう大丈夫よ。」

「ハアー。良かつた。」

そつと胸をなでおろすと先生が手を顔の前に出した。

「ねえ。ちよつと近くない？」

「へつ!？」

状況を見ると僕は仰向けに寝てる先生に覆いかぶさるような姿勢でいる。しかも顔同士が10センチもあいてない。

なんだか、急に恥ずかしくなつてきた…

「あつ！は、はい…ご、ご、ご、ごめんなさい！今どきますから！」

「待つて！」

突然先生は離れようと僕を呼び止めた

「は、ハイ！なんでしょう…」

??????
ユツ

???

頬にあたたかく柔らかいものが触れた

「ありが…とうね…」

バサツ

先生は倒れるように寝てしまつた。よほど体力を鱗に持つていかれたのだろう…………

つて今のは何？えつ？寝ぼけてたの？キスだよねコレ。僕人生でキスされるの初めてだよ。頬であつても初めてだよ！

うん！疲れてるんだ！寝よう！

何が起きたかよくわからなかつたけどどりあえず僕は寝ることにした。

――――――

翌朝

まだ5時前だというのに左足に違和感を覚えて僕は眠りから覚めた。何かが左足の太ももから先にかけて巻き付いている…朝つぱらからなんなんだよ！

布団をめくると：

「ニヤアア！」

猫の顔した蛇がいた

第二十三話『優しいやつは大体が動物に好かれる』

ニヤアアン！

こういう事ばっかり続くと感覚にぶるなあ……あんまりびっくりしてない自分がいる。

しかし、頭はねこだが胴体は蛇……どつかで見たような……

そうだ！先生から貰った隣人たちの本に、こんなのがいたぞ！
確か名前は……【アイトワラス】いや【サー・ポ・パード】だったかな？
サー・ポ・パードなら毒持ちの凶暴な性格で何でもすぐ噛む危険な奴つて書いてあつたはずだけど……

件の猫蛇は喉をごろごろ鳴らしていつこうに襲つてくる様子はない。

なんだ、けつこう大丈夫そうだ。

「ちよつとお前、どいてくれよ。これじゃベッドから下りれないからさ。」

先生を起こさないように小声で言いながら足をすこし左右に揺らすとサー・ポ・パードはスルスルと足から離れて行つて、部屋の隅にとぐろを巻きはじめた。

ゆつくりベッドから起きてのそばによつてみて見るとのんきなもので、アクビしながらまだ喉を鳴らしている。
「お前、どこから入つて來たんだ？」

なんか餌になるものはないかとバッグを漁りながら聞いてみる。
猫は喋れるらしいし、こいつも行けるんじやないだろうか。

ニヤア！

駄目そうだ……

猫と蛇なら肉食べるのかな？

バッグの中には非常食で入れてた干し肉があつた、けど干し肉つて凄くしょっぱいんだけど大丈夫かな？

肉を持ちながら迷つているとサー・ポ・パードがジーッとこつちを見ているのに気づいた。

「これ、喰えるか？」

鼻先に出してやるとしばらく匂いを嗅いで確認してから
パクつ

手のひらサイズくらいの肉は一口で消え去った：

なんか口の中でモゴモゴやってるよ。

別に一口で食べなくてもいいでしょに…

だが口をパンパンにさせながらも満足そうな顔で食べてるからこ
れはこれでよしとするか。

それにも関わらずかわいいなあ。

「なあ、お前に名前つけていい? サーポバードじや呼びづらいから
さ。」

種族の名前のまんまつてのもなんだし。

そう言つて手を近づけるとなんかもうウナウナ言つて頬ずりして
くれた。もうOKでいいよね。

さて名前どうすつかなく

そんなこと考えていたら

「う、うーん。」

先生が起きた。ってまだ5時30分前なんですけど。どうりでい
つも僕が起きると朝食ができるわけだ…

「あっ、お、おはようございます…」

あつ…起きたつてことはこれ見られるんじゃ…

「おはよう。珍しくずいぶん早起き…

「ど、どどうしました?」

振り向くのが怖い…十中八九コイツのこと言われるぞ。

ニヤア!

(やめろおおー鳴くなあー!)

「セト。そこにいるサーポバードはどういうことかしら?」

「うん。まあそなりますよね。

「え、あ、いや…なんか起きたら足に巻き付いたもんで。け、けど全
然凶暴じやなかつたんで…」

ああ…なんて言えばいいんだこういうとき

「それで思つたより懐くうえに可愛く思つてきちゃつて餌付けがはじ

まつたと。」

「はい…」

まつたくもつてそのとおりでござります。

「はあ…まあここまで懐いちや仕方ないわね。いい? 餌付けした以上責任持つてあなたが育てるのよ。絶対捨てたりしない!」

「は、はい!えつ!」

意外だ。てっきりこっぴどく叱られるかと思つたのに。

振り向くと先生は夜ほどじやないがやつぱり顔色が悪かつた。

「昨晩は迷惑かけたみたいだからね、全然覚えてないんだけど…なんか私言つてた?」

言つてた、やつてた、キスされた、うーんこれ言うべきなのか?

とりあえず、自前のバツグとは別の鞄からゆずの蜂蜜漬けを入れた瓶とお湯の入ったヤカンとコップを引っ張り出す。この鞄つてのは先生がこの一件に合わせてくれたトランクケースだハンドバツグタイプのやつで車輪とかはついてない方だ。お湯が出てくる時点でわかるとおりこれただのトランクじやなくて、とんでもなく中が広い空間になつていて代物なんだ。やろうと思えば家2つ分以上の広さが確保できる。まあそんなに広いと使いにくいから今は宿の1部屋もないくらいだけね。

今回は中にガスコンロを入れてきた。おかげでお湯が簡単に沸いたつてわけだ。

「先生、その前に。これ飲んでください。少しはよくなるはずです。ほんとは夜のときに飲んでもらおうと思ったんですけど、すぐ寝ちゃつたんで…」

蜂蜜漬けを白湯に溶かして先生に渡す。

「この香り…蜂蜜と柚子ね。ありがとう。」

けつこう僕はこういうのを作るのが好きで、練習の合間を見ては作っていた。

「うん。美味しい!」

それは良かつた。人に振る舞うことはめつたにない。こういうのは素直に嬉しいもんだ。だが

「あつと…それでさつきの話なんだけど。昨日の夜の…」

ああ…話題帰つてきたあ。なんでブーメラン式なんだよ！行つた
きりになつてくれよ！

「私なにか変なことしてた？ねえ、その渋い顔の理由を聞いておきた
いんだけど…」

「えつと…例の鱗のせいで自慰したりうなされたり…」

「えつ？じ…」

「鱗を取つて起こしたら、大丈夫だつて言つたあと僕の頬にキスをしてそのままバタンと倒れるように眠っちゃいましたね」

「…………うん。詳しく説明して。」

先生：顔赤いです…

――――――――――

「セト。本当にごめんなさいね…なんか、迷惑しかかけてなかつたの
ね…」

「あつ…いえ。僕は別に…」

キスされたの正直ちよつと嬉しかつたし…

「鱗の魔力が私の記憶と結びついて夢つていう一種のモニターに映し
出した。これがうなされてた原因よ。おかげで大戦中の嫌な夢を見
たわ…しかも体力まで持つてかかるし……とはいえてからは…」
なんか重い話とただただ氣まずいだけの話がごちゃまぜになつて
きたぞ…

「先生…」この件はもうお終いにしましよう！サー・ポパードの件で
チャラつてことに。ね？」

「ありがとう。それじゃお言葉に甘えてそうさせてもらうわ。」

氣を取り直して身支度を済ませる。今日は取引の3日目。昨日と
んでもなく目立つた僕らを問題の連中が見逃すはずがない。

「いい？セト。今日は昨日のようなことは無し。絶対離れないで。」

真剣な面持ちで先生が忠告する。

僕だつてさすがにここでドジ踏むわけにはいかない

「はい！」

ニヤア！

「??」

二人揃つて頭に疑問符が…見える。見えるぞ！

僕の腕にサー・ポ・パードが巻き付いている。しかも楽しそう…

「その子。来るみたいよ。」

「もうこれで宿は引き払いますから、トランクの中に入れときます。」

「そうね。そうした方がいいわね、それにしても私まだちゃんと見てないわ。少し見せてよ。」

そう言つて先生が顔を近づけるとサー・ポ・パードは別に起こるでもなく鼻を先生の鼻にこすりつけてきた。

「まあ…この子、天然のサー・ポ・パードじやない！キメラかと思つたら…本物なんて初めて見るわ…」

「貴重なんですか？」

「大昔はいっぽいいたけど、こういう類の隣人たちは一般人にも見えてしまうことが多くてね…けつこう狩られてしまつたて聞くわ。」

腕で喉を鳴らすコイツはレアモノ幻獣らしい。まあ、そんなこと関係ないけどね。命に値段つけるなんておかしい話だからね。

――――――――――――――――――――――――――――――――――

「コイツ…名前はピュティアつてのはどうです？」

トランクの中に“彼女”を誘導しながら先生に聞く。肉投げ入れたらあっさり入ってくれた。

「古代ギリシャ、デルフォイの女司祭。なんか結局予備やすさの面では変わつてない気もするけど…いいんじやない？そのうちピュティーつて呼ばれそうだけどね。」

「アハハハ、そうなつたらそくなつたまでですよ。よし！お前は今日から【ピュティア】だ！よろしくな。」

ピュティアはトランクに入りながらこつちに振り向いて大きく「ニヤア！」と鳴いた。

第二十四話『ハメルーンの笛吹き』

やはり嫌なところだ：

3日目。あの通りを先生とともに歩く。陰湿な雰囲気なのは変わらないが、人の視線は違っている。みんながこつちを見る、噂をする。別にそれはいいのだが：

「おい！なんであいつら生きてるんだよ！サー・ポーパードはどうした？！確かに部屋は合ってたんだろうな？」

「部屋はあつてました！あんな獰猛な奴が殺せないなんて…」

おまえらか

端で小声で話す男たちを見やる。フードの下の顔は見えないが、そんなどうも年が行つた感じではない。とりあえずマークはしておこう。

「セト、例の布の匂いはする？」

先生はこういうのは得意じゃないらしい。こんなに頼つてもらえるなんてちょっと感動なのだが

「いませんね：しかも視線やら敵意を向けられすぎてどれが本命かも見当もつかないです。ただピュティアを放したやつは見つけました。」

「彼らへは最低限のマークでいいわ。あんまり見るとまずいからね。」

「ええ。それで今日はどうし…」

不意に目の前に人が飛び出してきた。

「なあ、あんたよお！竜の鱗買つたんだろう？そこでさく見せてくんねえか？それをよくちょっとでいいから。」

前置き全部省いて吐いたセリフがコレ。

よく見ると昨日の呪具を売りつけようとした男：

呆れたやつだ：

昨日の出来事で誰もあえて近づいていなかつたのに。これでわりの奴らの「僕がボロを出すまで待つ」作戦は頓挫しちまつたわけだ。

「断る。消えろ。」

こんなやつに構つてゐる暇はない。男の後ろには「殺処分行き」と

書いてある紙が貼つたてある檻がいくつか見える。中には牙の生えた鳥やら羽の生えたうさぎやら普通なら見かけることのない珍獣が揃つてる。

こんな命を侮辱するような下衆野郎と話す舌は持ち合わせていない。避けていこうとすると先を通せんぼする。今回は先生も対象らしい。相変わらず身なりの割にけつこう軽快だ。

「なあよお！ 聞いてんのか?!」

またしても腕を掴んできた。さすがに二回目は蛇のあれば聞かないだろうし……ん？ 蛇？

「セト、下がつて。私が…」

「鱗が見たいんだな？じいさん。こん中だよ。開けてみ。」

バンツ！と地面にトランクを置く。先生も察してくれたらしい。下手に魔法使つて大騒ぎにするよりも、知り合つたばかりの番猫（蛇かも）の力を借りたほうが良いだろう。

「おお！いいね。話がわかるじやないか！それじゃ」

ガチャヤツ…トランクの金具が外れ蓋が空していく。

シャーーツ!!

細長い影が飛び出してきた。

「うああ！何だコイツ！」

ピュティアはこの男が嫌いらしい。出てきて早々噛み付いてきた。あつ…毒あつたの忘れてた。まいつか

男は影の正体を理解すると途端に顔を真っ青にして

「コレはサー・ポ・パードじやねえか！なんともんけしかけるんだ！」

大騒ぎだ…これじやあんまり意味無かつたか…

「じゃあ取引と行こう。解毒はしてやるから、二度と私たちに近寄るな。鱗も諦めろ。」

「わかつた！わかつたから助けてくれ！サー・ポ・パードの毒は十分もないで死んじまうんだよ！」

男は泣きそうな顔で懇願する

「解毒薬はこれだ。ほら」

ポイッと茶色の小瓶を投げてよこすと男は大急ぎで薬を摂つた。

これを見て驚いていたのは、ピュティアを放った奴らだ。自分たちのけしかけたサーソーパードが手懐けられてた挙句、解毒薬も盗まれ、踏んだり蹴つたりだろう。

薬は若い方の男のローブのポケットに入っていたのでちよつと拝借した。

「はあ、はあ、はあ…ビビらせやがつて」

解毒も済んで再び男は立ち上がった。

「約束は約束だぞ。」

「ああ！わかつてるよ！寄らなきやいんだ・ろ！」

バシツ！

不機嫌そうな男は八つ当たりで自分の売り物の牛のようなやつの背中を叩いた…あつ、この牛つて…シャイアだ…

「おいお前！そいつは【ズラトロク】だぞ！背中なんか叩いたら！」

ブモ、オオオ！

遅かつた。ズラトロクは普段は大人しく友好的なのが、背をたかれるとシャイアのもともとの力の何十倍もの怪力で暴れだすのだ。流石の先生も色を失っている。

男も大慌てでなだめようとしてるがあとの祭り。蹴り飛ばされてしまつっていた。

ズラトロクは他の生物の檻に体当たりをかまして破壊してから通りに土煙を上げて走つていった。おかげで中にいた“殺処分”たちがの後を追うように逃げ出してしまつた…

「チクショ！なんなんだ今日は！つたくとんだ厄日だ！ああ…どうすんだよこれ。」

ブツブツ言いながら男が起き上がる。顔は真っ青だが無事なようだ。

なんで無事なんだ？バカみたいに頑丈だな…：

「おわりだ…おわった…殺される…」

随分と悲壮なこといつてるが…

「先生？あいつ流石に落ち込みすぎですよね～ハハハ！」

笑い飛ばそうとした僕とは対象的に先生の顔色はすぐれない。

「いい？セト。こういう商売には元締めがいるのよ。販売するのはその下つ端。もし下つ端が騒ぎを起こしたら元締めはどう思うでしょうか？つてところよ。」

ああ。そう言う…ボスに目つけられたら明日には海の底。イギリスにだつてヤクザ見たいのはいる。

「なあ、あいつら捕まえて、」ようか？」

やつぱり我ながら甘い。まあちよつと氣の毒には思う。自業自得

だけどね…それに彼らを手に入れられるチャンスだ。

「ああ…？できるわけねえ！あいつらはどうやっても言うこと聞かない凶暴なのだ。それをお前みたいなひょろい奴が捕まえるわけない！」

ひどい言われようだな…

「んじゃ、いいか？もしもだぞ。私が捕まえたら、彼らを譲ってくれ。どうせ殺処分なら費用も浮くだろ？」

「…………だが、結局おれがやらかしたことは変わんねえ。飲めないな。」

「ん？そりやあおかしいな。彼らは購入者の私の手元から逃げてしまつたはずだが。ねえ？先生。そうですよね？」

「はあ…あなたつてほんとに…ええ、そうよ。まさか受け取つてすぐに…馬鹿なことしたわねセト。」

なんか僕ただの馬鹿になつてませんかー！先生ー！

「ほ、ほんとにあの面倒なの引き取つてくれんのか?!」

男は疑いながらも賭けに出ている。

ここで僕のミスのせいにして、処分品も押し付けられれば自分は助かる。だけど僕がしくじれば終わり。

「ああ！やつてやるぜ。いいよな？」

「ああ。任せる。捕まえたらあとは好きにしてくれ。もう店じまいだ！」

そう言つて男はとんでもない速さで店を畳んで逃げるよう路地へ消えた。

じやあ、僕も

「先生。約束破つてごめんなさい…でも僕彼らを助けてやりたいんです。」

「十五分で無理だつたら帰つてきなさい。いいわね?」

「はい!それじゃいつてきます!」

まだ土煙は舞つてゐる。魔力を辿ればすぐだろう。僕は急いであとを追いかけた。

――――――――――

セトは勢いよく走つて土煙の中に消えた。最近自分の甘さが身にしみるようと思える。エルダは苦笑しながら。見送つていた。

気づいたら後ろに老人の姿をした男が立つてゐる。

「昨日のあれがあつたのに行かせてしまつてよかつたのかい?」

一応年寄り口調だが、エルダからすればマヌケなものだ。

「いいのよ。私の弟子だもの。」

「随分と信頼しているようだが?」

「今回の依頼は教会からのものと思つていたけど学院のものだつたのね。アドルフ。」

「えつ!どうしてわかつたんですか?今日はちゃんとした変装だつたのに…」

老人の変装をした男アドルフ・ストラウドは驚きを隠せなかつた。「わかりやすいのよ。ただそれだけ。それより学院のあなたが何故そつち？」

アドルフは取り直してエルダの方を見る。

「今回の一件は特殊なものとして…教会経由にしてもらつたんです。」「おおかた、レンフレッドの辺り」魔法使いだけじや信用ならない」とか言つてあなた達も駆り出されたわけね。」

「御名答…私達は少し魔術師のグループを雇つて裏で調査と監視を任せていきました。それで、なんとか首謀者もわかつたんですが、コレです」

そう言つてアドルフは1枚のA4ほどの紙をエルダ渡した。

「いいの?」

「ここまで来たら協力しましよう。我々は裏からお手伝い致します。」

：それにしても彼大丈夫ですかね？」

「協力ありがとう。ついでにセトの心配もね。けど…ホラ！帰つてきたわ。」

見た目はまだ少年といった感じのセトは一輪のアネモネの花を手に歩いてきた。後ろには先程逃げた動物達が隊をなしている。あれだけ怒っていたズラトロクものんきに歩いている。

「先生～！おまたせしました～！」

「まるでハーメルンの笛吹き…」

「そんな物騒なものには見えないわよ。あの笛吹男と一緒にされちゃ困るわ。それで、他にある？」

アドルフは苦笑いしながら向き直り

「余計なお世話でしたね。ご迷惑おかけしました。それじゃ、お互に頑張りましょう。」

変装を整えてアドルフはいそいそと路地へ消えた。

――――――――――

「先生～今の誰です？」

先生は見知らぬ老人のフリをした男と一緒にいた。

「古い知り合いよ。それより、わかつたわよ。首謀者の顔。」

「こつちも居場所がわかりました。追っかけてる途中でやつと匂いを見つけたんです。街の外れの森の方です」

トランクにさつきの商人の男の落としていつたものと動物たちを詰めながら、話す。どうやら先生はあの老人風の男に情報を受け取ったようだ。

「わかつたわ！準備できた？行くわよ。」「は、はい！」

街の外れの黒い森。向かう先は光をも飲み込む暗い森。

第二十五話『遭遇』

「あれか？」

草木を搔き分けて進むと、小さな小屋が見えた。しばらく使われていない感じだが：

やりばのない怨嗟が舞つてゐるこの森では鼻が全然効かない。中がどうなつてゐるのか全くわからない。

暗い森の中で先生もいないし、正直言えば帰りたい…
(やつぱり無理言つて一緒に行けばよかつたかなあ…)

――――――――
「やつと場所を聞き出せましたよ！こんなふうに記憶の中を見るのは初めてでしたけど。」

「その人の印象に残つているものは引っ張り出しやすいけど、それ以外の記憶は神経を使うものになるわ。体は大丈夫？」

僕らの足元にはロープで縛られ氣絶した今回の主犯格がいた。

やつはマヌケだった。いや、正確にはこの手の仕事が初めてだった。先生が受け取った情報にはコイツが魔術関連の出来事に絡んだことは一度も無かつた、とあつた。

はじめての仕事がこんな大それたことつてのは驚きだが、

先生の分析では知らなかつたからこそ菩提樹リンデンバウムの恐ろしさに臆することなく実行できたのだろう、とのこと。

まあ初めてだつたからこそ闇雲に僕らが森に入つて早々に襲い掛かつて捕まつたワケだが…

氣絶させてるうちに記憶を見たが、キリドさんを運んでいる記憶もしつかりあつた。だが…

「体は大丈夫ですけど…それより謎が一つ。コイツ、誰かの指示を受けていたんですよ。」

「他に首謀者がいるつてことね？」

先生の情報ではコイツが主犯とあつた。

しかし…

「ええ間違いくなく。けど解決した謎も一つ。キリドさんの居場所もわ

かりましたよ。」

「弱々しいキリドの魔力ならこの森の奥から感じていたけど、具体的な位置は？」

「（こ）真っすぐに行つた奥にある小屋です。」

指差す方は真っ暗な先の見えないわかれ道だ。

「そんなに時間はないわ。したくなかったんだけど、二手に分かれましよう。いい？ 連中に気づかれないためにも魔法は原則禁止。無理は絶対しない！」

「わかってますよ。大丈夫ですって。」

僕は右。先生は左の道へと向かつた。

――――――

これが數十 分前のことだ：

しかし見つけてしまつた以上入るしかあるまい…

いざとなつたらトランクの中の彼らの力を借りよう。拳を握り直し僕は小屋へ向かつた。辺りに気配はない。大丈夫…かな？

ガチャヤツ…ギギギギ！

長らく使われていなかつた扉は氣味の悪い音をたてながら開いた。

「だ、誰かいますか？」

我ながらバカっぽい質問をした氣がする…だが

「誰だ！ 見張りじゃないな？」

部屋の隅、その影の中から声が返つてきた。

「キリド・フエーンさんですね？ 助けに来ました。」

手元に持つた懐中電灯を向けると、眩しそうに目を細くしながら鎖に縛られている若い男がいた。写真で見たキリドさんに間違いなかつた。ちょっとやつれ気味だけど…

「助けに来た？ まだ子供じゃないか！ 見張りが戻つてくる前に逃げるんだ。鱗の情報もまだ掴めていないんだ。私は帰るわけには…」
「鱗なら手に入れました。犯人も捕まりつつあります。もうここにいる必要はないんです。」

キリドさんは驚きながらも、ホツとした表情で立ち上がつた…縛られたように見えたがその鎖も解いている。

僕らくる必要なかつたんじやないか？

しかもさつきさらつと子供扱い…

「なるほど、それならいつまでも捕まつたフリの必要はないな。ウツ

…！」

「キリドさん！」

ふらつく彼を慌てて支える。捕まつたふりといえど食事や体の制限はあつたのだろう。立つていいだけ精一杯という状態だ。

「肩を。行きましょう。」

「済まない…」

よたつきながらも小屋を出る。そういうえば小屋の中にあつたアルミのプレート皿にはパンのかけらと少量の水があつた。もしこの数日間そんな食事を続けていたとしたら…無事でいるのが奇跡みたいなもんだ。

「よく『無事で。』

「彼らは私と他の組織の関連を調べるために始末しなかつたようだ。うまく行けば人質としても…とでも思つてたんだろう。ん？」

キリドさんの目線が僕の腰のナイフに向く。

「金属のナイフかい？護身用ならもつと手入れをしたほうが良いよ。」

隣人たちは金属を嫌う。僕は隣人に好まれる。

彼らが集まると目立つてしようがないのであえて金属のナイフを持ち歩くことにしたのだが、さすが魔法機構マギウスマクロフトこの状況でそこに目をつけるとは…

「アドバイスどうも。ここをしのいだらそうさせていただきます。」

「君…どうでもいいとか思つてるだろう…」

「べつにそんなわ…」

ガサツ！

「キサマらそこで何してる?!」

背後にフードをかぶつた男が立つてゐる。

迂闊だつた！鼻が効かないせいで藪から出てきたコイツに気づけなかつた。

「ん？アツ！テメエ！捕まえといた魔法使いじゃないか！」

さらによろしくことにこの暗い森で一発で見抜きやがった…

「アハハどうも、」

キリドさん冗談言つてる場合じゃない！

男は銃を持つてゐる。肩を貸しながら歩いている僕らにどうこうできる状況じやない。てかよく見るとまだ小屋の前からそんなに進んでないぞ！

「脱走は殺すかもしないって話はしたよな？ 魔法使い」

「そ、そんな話したつけな？ あ！ ああそいうや言つてたね……ありや冗談だろ？」

「ふん！ 死ねつ！」

このままじややられる！ 銃口はキリドさんをまっすぐ見つめている。集中しすぎたせいか、すべてがゆっくり見える。引き金が…指に…

ドガツ！

「ウツ！」

思わず目を閉じた僕の耳に銃声より低い鈍い音と男の呻きが聞こえた。

目を開けると何故か男が倒れている。背中に何かをぶつけられた跡があるが…

「た…助かつたみたいだ…なつ？ 君。」

「ええ！ 間に合つてよかつたわ。」

女性の声が先程男が立っていた少し後ろの暗闇から聞こえる。 「だつ…誰だ！」

「ひどーい！ もう忘れちやつたの？」

木々の隙間から木漏れ日がさす。僕らに歩み近づくその影は少しだけ懐かしく思えた。

第二十六話 『再開と契約』

「久しぶりね、セト。まさか忘れたなんて言わせないわよ！」

影から現れたのは、丸い栗色の瞳。つややかなブロンド髪、バランスの取れた上半身。筋肉美すら感じる馬の下半身。そう、セントール・ルーシイだつた。

「ル、ルーシイ！君かい？でもなんで?!」

「話はあとにしましょ！さあ早く乗つて！追つてはまだいるわよ。」

急いでキリドさんを乗せ、僕もまたがる。

「セ、セントール？君の知りあいか？」

「ええ。ニューヨークで知り合つた友人です！」

「さあ！掴まつてて！」

僕らが胴体にしがみつくやいなや景色は走り出した。

一瞬の間の後ぐいんと体が後ろに引っ張られる。

グツ：相変わらずひでえ乗り心地じやないか！

「これは…初体験だ…うつ」

キリドさんの顔色がさらに悪くなつて…顔面蒼白だぞ…：

残像で繋がつたように見えた木が再びその手を離した。

すでに森の入口だ。目の前には先生や見知らぬ人たちが数名いる。

にこやかな先生に対して他の人たちは揃つて腰を抜かしている。

「はあ…はあ…せ、先生…ふう…はあ。キリ、キリドさんを、おちゆれしました。」

後ろでキリドさんはぐつたりしてゐる…
いき…てるな

「フツフツフ。うん。お疲れさま、セト。」

囁んだの笑われたぞ…

「ん！ゲフンゲフン！」

「そうね、ルーシイもありがとう。」

なんともわざとらしい…

「それじゃあキリドさんは私たちが…」

「わかつたわ。あとは…」

先生に話しかけてきたのはメガネをかけたら学者っぽい男だ。

「セト、大丈夫？顔色悪いよ」

ひょこつとルーシイが僕の顔を覗き込む。

そういえば彼女が一番の謎だ。パンパンに詰め込まれた出来事にまだ混乱しているが、それだつてニューヨークにいた彼女がここにいるなんておかしいのくらいわかる。

「ルーシイ…きみは…どうしてここに？」

「そうね…………愛。かしらね？」

愛、、、熟考して出した言葉は愛。それ誰に向けたものだい？まさか…いや

先生がこっちに向かつてきた。どうやら話は決着がついたらしい。キリドさんも一緒だ、二人に支えられてるけど「とりあえず、帰るわよ。鱗はあなたがまだ持つてることになつたから。」

「キリドさんは？」

「僕は学院のほうでしばらくやっかいになることになつた……そいえばまだ君の名前を聞いていなかつたね。」

「セトです。セト・ナンブ」

「セトくん、助けてくれてありがとう。」

そう言ってキリドさんは手を差し出した。

「いえいえ、僕はなんにも…」

僕もしつかりと手を握り返した。

「まさか、エルダさんが弟子をとるとは…ちょっと意外でしたよ。」

彼は脇に立つ先生に声をかける。

「自分でも驚いているわ。セトに泣き落し喰らつただけな気もするけど…」

あははは…思い返すと情けない話だ…

「積もる話はありますがそれは後日に。それじゃあまた！」

二人の魔術師に支えられながらキリドさんは学院の人たちのもとへ向かつていった。

「私達も学院がごまかしてくれてるうちに帰るわよ。」

「「はい！」」

えっとー…

「ルーシイ。君も来るのか？」

「言つたでしょ。愛の為に来たつて。セトと一緒に行かなくてどうするのよ。」

やつぱりその愛の対象は僕ですか…隠さないぶんストレートに来てけつこう恥ずかしい。

「まさかそのなりで列車に乗るのか…」

シユツとルーシイが縮んだ、いや…足が。人と同じの二足に。けつこうスタイルいいな…美人だし…

「これやると一般の人にも見えちゃうんだけど、これでセトと同じ目線ね！」

あつそうつか。どうぞご自由になさつてください…

うーん…美人だけどなんかそう言う▣好き▣じゃないんだよなあ

「何してるの？早く行くわよ。」

さつきの魔術師達のおかげか僕らは面倒事には何一つ巻き込まれることなく帰路に着けた。

――――――――――

「はああ～～～」

やつと家だ！この三日の諸々で疲れてたのに、列車の中の出来事で追加攻撃を受けてヘトヘトだ…

ルーシイのやつ…ベッタベタにくつつくし、胸とかあからさまだし、質問攻めだし…なんかこれだけで三日分の密度だつたぞ…

「お疲れさま。まあ…大変だつたわね。トランクの中身の整理は庭のなんにもないところでやつてね。」

「セト！私も手伝うよ！ お・ね・が・い もあるし。」

はあ…何だこりや…

庭に出ると結局先生もついてきた。危険なものがあるといけないからつてことらしい。ルーシイは自分が見張つてるから大丈夫だと自信満々だったが、先生は僕に色々な意味で危険が増えるから一緒に行く、とのこと…

まず開けると蛇の胴体に猫頭【サーパポート】のピュテイアが飛び出してきた。そこからは生き物優先で引っ張り出す。

金の角を持つた白いシャモア、【ズラトロク】伝説通り雄のみしかズラトロクにならないらしい。

他には翼の生えたうさぎ、【ヴォルパー・ティンガー】女性にしか見つけられないという伝説だがなんてことない、ただの女好きだ。

他には角の生えたこれまたうさぎ【ジャッカロープ】デマじやなかつたのか：

他には牙を持つ鳥？ サイズは九官鳥ほどだが：先生に聞くと見つかっている個体数が少なく名前がまだない鳥らしい。学者たちでは【ファングドバード】の名で通っているとのこと。一応魔力に由来する毒牙を持っている。

そんでもって最後の一匹は最初は気づかなかつたが中国神話に聞く【青蛙神（セイアジン）】だ！ 前足が2本、後足が1本の二本足で、後足はお玉杓子の尾のように中央に付いている。見かけこそ三本足のヒキガエルだが、家に幸運をもたらすと言われる靈獸だ。

あの男二日目と三日目で全然売り物違うじゃないか：

とりあえず動物を出したところで日が暮れかけていた。

他のは明日にしよう：

「けつこう珍しいものも多いわね。けど…これ全部飼うわけにはいかないわね。」

流石に先生もこの量には引き気味。

「とはいえ、そのへんで逃がすわけにも…危険なのもいますし。」

ルーシイは楽しそうだ。さつきから青蛙神の背中をツンツンして
る：

「このカエルなんか東洋の生き物よ。どうする、セト？」

「やめなさいって、仮にも聖獸と呼ばれる生き物だぞ…」

「はい。けどさ。実際問題、どうするの？」

うーん…こいつは…

「とりあえずはここで飼う。明日以降考えましょ。それでいいわね？ セト。その疲れ顔じやろくな意見も出ないだろうし。日も暮れる

し。」

「そうですね。なんか面倒なの増やしちゃいましたね…」

「あなたが弟子になつた時点で面倒事が増えるのは覚悟してたわよ。」
ほんとゞ迷惑おかげいたします……

家に戻ろうとすると突然ルーシイが大切なことを思い出したとか
言つて庭の広い草地に引っ張ってきた。

「セト。わ、私ね、セトと一緒にいたくてニューヨークからここまで來
たの。ジャックに無理言つて手伝つてもらつてさ。それでね…」
もごもご言い始めた。なるほど読めたぞ！

世には自分から契約を求める隣人もいると言うが…

「契約を求めてはるばると…」

「そう！セトと契約を結びたくて…」

なんか突然もじもじした感じだなあ。どんだけ恥ずかしいんだよ
！

「だ、だめかなあ？」

あくもく！こう言うのはズルい…そんなきれいな顔でさ、目潤ませ
てさ、顔を少し赤くして…か、かわいい。

あつ、負けた…もう断れないぞこれ。

「う、うーん…」

チラッと先生の方を見る。呆れてそっぽ向いてる…

しかし、契約についてはあんまり知らない。流石にそこまで手が回
らなかつた。

「けど、僕は契約はやり方とかよくわからないし…」
ルーシイ。この返しは予想通りのご様子…
にこやかに

「大丈夫！私のあとを追つて呪文を言えばいいだけだから！」

これは腹を括るしかあるまい…

「わかつた…いいよ。君を僕の使い魔ファミリアとして。迎えよう。」

ルーシイは大喜びで舞い上がつてゐる。

「やつたあ！それじゃあ行くわよ。私の全部をあなたに…」

「全部？」

契約とは慎重に行うものだ、鬱陶しく思われたとしても確認を怠るわけには行かない。

「隣人たちは本来死の概念や時間の概念が希薄なの…すべてを結ぶつていうのは、あなたが死んだときに彼女も死ぬつてことよ。契約でも最も深い結びだわ。向こうから寄つてくるなんてまず無いわね。けつこう好かれてるんじやない？」

先生が教えてくれた。ルーシイ的には余計なことをつてところ見たいだが：

命か：僕のせいで彼女が死ぬ…時間の共有。それは違うんじやないだろうか

「そんなのダメだ！僕のとんでもなく短い寿命のせいで半ば悠久の君の時を左右したくない。」

「そんなの気になんかならないわよ！私はあなたを愛してるのよ！時間ごとき、寿命ごとき大したことないわ！それにより深い結びつきはそれだけより強い力を持つわ。メリットは沢山のはずよ！」

必死で頼むルーシイだが、こればっかりは譲れない。人間の脆さはよく知っているつもりだ。

「さつき君は僕のこと愛してるって言つたよね？」

ルーシイは勢いよくうなづく。なんか鼻息荒い……

「そんなら1つくらいは愛してる人の『お願い』つてのを聞いてくれないかい？」

「そりや…聞きたいけども…」

そのまま受け入れるのはダメらしい…

しようがない、ちょっと騙すみたいだが

「いやね…僕つてさ自己顕示欲つてのが高いんだよ。だから死んだあとでも誰かに僕を知つてもらいたいんだ。それでね、君にその語り部をやってほしいのさ。愛した人のことなら見事に美しく語ってくれるだろうし。その為には君に死なれちゃ困るわけだ。わかるだろ？」

なんとも卑怯な…我ながら卑怯この上ない。まあ自己顕示欲高めなのは事実だし。結果的にそうなれば別に嘘つてわけでもない。

これを聞いたルーシイはとんでもなく悩んだ末に口を開いた。

「いいわ！ そんなに頼りにしてくれるつてなら。貴方を後の世でも伝えてあげる。けどそれなら、私が語れるくらい立派な人になつてもらわなきやね！」

「努力はするよ…」

きつつーーいハードルがおまけで來たがしようがない。

「それじゃあ、ほら手を…」

ルーシイはそう言つて両手を出した。手が回らなかつたとはいえ基礎は理解してる。

膝をつく彼女の前で僕も同じように膝を地につけ、額をつけて両手のひらを軽く切つてから合わせた。氣づけば、僕らの周りを月明かりのような光が包んでいる。

ルーシイがそつと口を開いた：

『いざや結べ 断たれた縉 欠けた月を満たすように モミを結べ
ローワンに火を灯せ 互いの道を忘れぬように 時が二人をわ
かつまで』

「セト…私に新しい名前をつけて。契約の最後の工程よ。」

新しい名前：彼女に……

「ルキア…」

「光…まあ、悪くないわね。」

なにかが流れていく流れてくる。これが契約なのだろう。
額を離しルキアと目を合わせる。

「これからよろしくね。セト」

「ああ、これからもよろしくな。ルキア」

結びの儀式は終わつた。僕ら二人を包んでいた光は消え辺りは夏の夕暮れ空に戻つていた。

第二十七話『学院からの魔術師』

朝日が窓からさす。鳥はさえずり、外は夏終りの気持ちの良い風が吹いている。とても気分のいい朝だ。目覚めが顔を蹴られたなんて理由じやなきや…

「ルキア！いい加減人のベッドに上がり込むのはやめろ！今日で何回目だ！」

ベッドの中から気持ちよさそうな表情でルキアの顔が出てきた。

「ん…んにや…おはようくセト。」

「聞いてるのか!?人の話を。」

そう言つて彼女をベッドから蹴り出す…これもなんだかルーインになつてきたな

あれから数日たち比較的落ち着いた生活をしている。比較的だが

⋮

結局トランクの残り物や動物たちや鱗とかの後処理は学院から人が来てからつてことになった。

帰ってきた翌日には来た教会のサイモンさんは違つて、担当のアドルフって人はけつこう呑気なようだ。

1週間以上たつた今日、やつと来るらしい。こつちは鱗の誘惑と対決させられっぱなしだったのだから取るものは取らないと気が済まない。

そういえばサイモンさんが来たときの第一声はボソツと「また増えた」だつた。これにはルキアも怒つてた。ただでさえ教会と隣人は仲が悪い。それに追い打ちかけちゃまあしようがないな…そういうや先生も怒つてたな。教会からの仕事だつて言つて持つてきたのに実は学院からでした。つてのがどうも気に入らなかつたらしい。ぶつちやけ僕はどうつちでもいいんだけど…先生的には学院にいいように使われたのが納得いかんと。

まあそんなこんなでサイモンさんはけつこう絞られてから帰つていつた。ちよつと…いやかなり可哀想だつたので、柚子の蜂蜜漬けを少し譲つておいた。

さて、ルキアを引っ張つて部屋の外に放つてから着替える。そうしないともう大騒ぎだ：僕の上裸でもうなんかすごいんだもん。人の形になつてるのは体力を使うとか、ぶつくさ言つ割にはルキアはなぜかセントールの姿をあまりしない。まあ、おおよその検討はついてるが…

「セト！ なんでいつも外に出すの！ 私寒い！」

「なんで外に出されるのか自分の胸に聞いてみろ！ 君は帰つてきた翌日の朝に何をやつた？」

「…………セトが着替えの途中にベッドに押し倒そうとしました。」

「そうだな、それで何か言うことは？」

「ごめんなさい。」

実はその後二人仲良く先生にこっぴどく叱られたのだが…：

「先生にも言われたろ？ ダメだつて。なのに人のベッドに入つてるし。私は床でも大丈夫！ なんて言つたのはどこの誰だつた？」

ちなみにその時、先生がどうして人と妖精が一線を越えちゃいけないのかつてのを教えてくれた。

なんでも、その行為自体呪いの対象になり一人の命が危険に陥つたりすることがあつたり、仮に子ができたとしてもほぼ確実に忌み子になつたりとまあろくなことが無いだけでなく周りにも迷惑をかけてしまうらしい。

着替えも終わり部屋の扉を開けると、泣き出す寸前みたいな顔のルキアがいた：僕がそういうの弱いの知つててやるんだからずるい子だよ…：

「…つたく。反省つてのをしてくれよ。」「はーい！」

反省する気ゼロ…：

ダイニングに行くと先生がいつものように朝食を出してくれていた。

「セト、おはよう。」「おはようございます！」

「ねえ、エルダ。私は無視！？」

「朝からお楽しみだつたわね。ルキア？おはよう」

「うつ……お、おはようございます…」

もうこのやり取りも普通に感じられるようになつた。

爺やとはいつも朝の挨拶くらいはしてたのに、なんでこんなに新鮮に感じるんだろう？

そんなことを考えながら席につく。

テーブルの皿は3枚。ルキアも一緒だ。こういう生活をしてると、使い魔と言うよりは家族つて感じがする。

「一人ともちやんとコミュニケーションとれてるなら別にいいけど、前も言つたけど節度つてのを考えなさいね。ああそれと、今日は昼前にはアドルフたちが来るわ。セットはあのトランクを降ろしておいてね。」

やつとだ：やつと拾つた諸々を整理できる。正直言つてあの男の売り物つて時点で不気味だし怖いし：なんで持つてきちゃたんだろう。はあ：

食器を片付けながらルキアに頼み事をしておく。

ピュティアのエサの準備だ。サーパポートは雑食で何でも食べるらしいが、鰯でいいんだから楽なもんだ。イギリスでも安い部類だし、下処理もしやすいし（切り身のも多いんだが、いかんせん鮮度が低くてかなわない。）

ルキアつてけつこう纖細な子で手先も器用。こう言うのは得意らしい。

食器洗いやらは僕の仕事。先生は庭のハーブたちの世話を朝一番でやつてている。ここに来てやつと日常つてのを謳歌してる気がする。さて、一段落ついて

庭で先生を手伝つていると二人の人間が来た。

例のウサギの人形も走り回つている。

「ごめんください。先日ご連絡させていただいた、学院の者ですが。」

若い声が聞こえる。この間の森でも聞いた声だ。

匂いも覚えてる

「はーい！今行きます。」

仮にも学院の代表。どんなのがくると思つて扉を開けると、

「どうも。学院のアドルフ・ストラウドと言います。よろしくおねがいします。」

すつごいバカ真面目なメガネの人が一人。（この人は森にいた人だ。）と

「わああ！見てよアドルフ！彼が噂の魔法使い君だろ？本物だ！いや、本物のアガヴェエクネの魔法使いなんて始めてみたよ！感動だなあ～！」

すつごいバカっぽいメガネの人が一人だ。

この人たちとうまくやつてけるだろうか：不安になつてきた

第二十八話『拾い物』

学院からの魔術師二人を部屋に通すと、部屋には先生がお茶を用意して待っていた。

はやくね？ルキアもいる：

すでに机の上にはトランクを置いてあり、中には販売会あの一件で僕に呪い道具を売りつけようとしたり、鱗を奪おうとしたあの男が落としていつた道具があのとき放り込んだまま入っている。

動物たちに被害が出なかつたところを見るにおそらくは大丈夫だろうけども、用途のわからないものを持つていてもしようがない。

発明された時期が新しい魔具では先生もわからないかも知れないし、そういう意味でも学院の人は役に立つはずだ。

「初めて会う方もいらっしゃるので、あらためて、私は学院のアドルフ・ストラウドです。よろしく。」

彼は僕に手を伸ばしてくれた。魔術師の話を隣人から聞くと毎回ボロクソだつたので、これだけ礼儀正しく接する人がいるつてのは意外だ。

一方もう一人は我慢できずアドルフさんとの握手を終えた僕に飛びついてこようとした：

「セトに近づかないで！ヘンタイ！」

ドガツ

案の定ルキアのどぎついケリを食らつて一声も発することなく伸びてしまつた。

彼女、人型でも関係なく蹴りが光つてる…

「…………同胞が失礼しました。彼はトーリー・イニス。あんなんですが、根はいいやつなんです。魔法使いが大好きで…まあ…悪気はないんです。すみません」

とりあえずアドルフさんが苦労人なのはなんとなくわかつたし魔術師にも色々いるのもよくわかつた。

実際彼の言うとおりトーリーさんは悪意の匂いはしない。純粹な興味から來てる行動なのだろう

。だとしたら激しすぎだが：

そのうち▣□の中の粘膜の細胞を採取させてくれ▣とか言い出しそうだ：

「はあ…私はセト・ナンブと言います。よろしくおねがいします。」「お互い挨拶は済んだわね。それじゃあさつそく鱗の話からはじめましょう。それで…」

――――――

先生が取り仕切る感じで話は進み鱗についての長い協議も結論が出てた。

ドラゴンの生息地にいる管理人に返すらしいのだが、なんと僕らが行くことになってしまった。

しばらく遠出することもないと思つてたらまたこれだ。

先生はアドルフさんを（鱗を渡しに行く人物として）一番ふさわしいと言つていたがどういう意味なんだろうか：

交通費は出すと言つていたが、鱗の代金は半分しか出せないと言われた…まあこっちが勝手に買つたといえ全額負担してほしいものだ：

動物達については引き取り手が付きそうにもないとのことで、餌代を無理やり学院にもたせてこつちで飼うことになった。先生はすごく嫌そうだったが、主に僕がおねがいしたのもあってしぶしぶ了解してくれた。

ちなみに、僕以上に話の内容がわからないルキアはずくずくと黙つて椅子に座つてた。

さて：

「それじゃあ、話も一段落したところで、こいつを見てもらつてもいいですか？」

トランクの蓋を軽く叩く。魔法で内部の広さが自由自在だが、今は普通のトランクと同じ状態になつてる。つまりその程度しか入つてないはずだ。

カチヤ：

トランクを開ける。アンジエリカさんからの追加便で届いた呪い

封じの手袋をして1つ目の小瓶を取り出す。あの男の物だ、どんな呪がかかるてるかわかつたもんじやない。

小瓶は透明で中には白い小さな魚が空を泳いでいる。

「これって生きてるんですか？」

僕の質問にいつの間にかおきていたトーリーさんが答えた。

「最近飼育方法が発見された幻獣だよ。すぐ強い幻覚を見せる力があつて、相手に食べられたことすら感じさせないまま捕食をする強暴な肉食魚だ。今は狭いここにいるから小さいけど彼らは住む環境の広さに合わせてサイズを変えるんだ。この部屋で放つたら……」

「サメくらいですか？」

「いや、そこまでは大きくなれないらしい。おそらく君が両手を広げたくらいはあるだろうね。」

ちなみに僕の身長は164cm。19才の日本人男性の身長が170なのでちびな方だ。しかも顔が女っぽいのや、声が高めだつたり、先生に髪を切るのを禁止されたのもありよく女扱いされる。

それにしたつて160って大きい。そんなんじや：

「そんなんじや、そこらじゅうにもつと居てもおかしくないんじやないんですか？ 強暴なら人が襲われる話だつて多いはずですよね？」

「そう！ そこなんだよ！」

その質問を待つてた。つて感じだ

「こいつらが【インドアファイツシュ】と呼ばれるゆえんはそこにある。」

「インドア…日にでも弱いのだろうか…？」

「こいつらは強い空気の流れの中では生きていけないんだ。風に吹かれると液状になつて溶けちまう。これがわかつたのが最近なんだ。」

もつと重篤な問題だつた。逆にコイツラが絶滅しなかつたほうが奇跡だ。

「まつたく、よく今まで絶滅しなかつたもんだよ。まさに奇跡だね。」

「この人と同じ意見つてのはあんまり嬉しくないな…」

次に取り出したのはなんか文字が刻んである拳ほどの石の板。

「ああ…こいつはただの簡易魔法陣だよ。こいつは…火起こし用だね。陣の上に火が出るんだ。ホラ」

ボツと石の上に火がついた。ライターでいいと思うが言わないでおこう。

トランクの残りは瓶の中に入つたいくつかの指輪と二つの革袋だけだつた。

銀、金、白金…普通に高級な指輪だが、アメジストやルビーがついたものもある。普通のものと唯一違うのはリングの裏にびつちりとルーン文字が書き込まれていてところだ。

「こいつは…アドルフ。これって確か…」

「えつ？あ…これは！」

ん？なんだなんだ…瓶から出してみると確かにやな匂いがする。おそらく呪い付きの物があるのだろう。しかし二人の反応はそれだけではないといつた感じだ。

「この指輪…こつちで回収させてもらえないか？」

一気に真面目な空気になつたトーリーさんがいくつかの指輪を指す。見た目は他と変わらない、匂いは…多少危険な氣もするが、対処できる範囲だ。

「別に構いませんけど…ねえ先生？」

先生の表情は一人と同じく固めになつてた。

「これが、魔術師同士でのやり取りなら大したことはないでしょ
うね。」

???

「さすがエルダさん。問題はそこなんですよ。」

アドルフさんも同意している。

まったくわからん。

先生が僕に何が問題なのか教えてくれた。

「この指輪の呪いに気づけない人たちが、これを手に入れたらどうなるか？よく考えてみなさい。この指輪と同じタイプのものが一般流通品に混ざり込んでるってことよ。イタズラで済まされる問題じやないわ。」

ようやく理解できた。それでアドルフさんたちはこの指輪を回収したいのか。

「……」最近になつてこれと同じ形の指輪が出回つてまして、被害報告もちろんほらと…魔術師のしたことの責任は魔術師が…

「わかりました。どうぞ持つていつてください。」

結局どれも呪いがかかつてることもあり指輪は瓶ごと全部持つていつてもらうことにした。持つていてもしょうがないし…

さて次はこの拳よりちよつと大きいくらいでずつしり重い革袋だ

⋮

袋の口を開けると…なんか粉が大量に入つてゐる。

少し取り出してみるとこの正体がわかつた。そのまま粉をすつと袋に戻し、アドルフさんに渡した。

「これはこうしたほうがいいですかね？アドルフさん。」

「魔術師のブローカーは厄介ですからね…責任持つて処分します。」

中身は麻薬だ。こうするのが一番だろう。

最後の袋には^{るう}蝶が入つていた。

「魔術や魔法で蝶は欠かせないからね。けどこいつは…ああ、大丈夫。ほんとにただの蝶だよ。市販のものだ。死蝶じやないね。^{ハンズオブグローリー}榮光の手とかだつたら面白かったのに…」

死蝶はミイラの親戚みたいなもんだ。魔術ではおなじみの儀式アイテムではあるが、そんな不気味なもの絶対使いたくない。

「こんなところか…問題になりそうなのは指輪とこの粉だけだね。」

トーリーさんはちよつと残念そう。まあそんな面白そうなものはあの男も落とさないだろう。

「それじゃあ、私達はこれらの処理もありますから、そろそろ失礼したいと思います。」

アドルフさんは少し忙しそうに席を立つた。

「ええ、お疲れさま。」

あつさりした先生と不満そうなトーリーさん

「なんだよ、アドルフ、もう行くのかい？まだ魔法見せてもらつてないのに…」

「それは、あなた個人の問題でしようが。仕事を優先してください。」

まあ、もう日も傾いてるから帰つたほうがいいのは事実だ。てか

トーリーさんに関する話題はもう帰つて……この人は一緒にいるなどどうも疲れる。

「今日はありがとうございました。これどうぞ。」

柚子のはちみつ漬け最後の一瓶を押し付けて帰つてもらつた。

――――――――――――――――――――――

「はあ～～。やつと終わつたのね。」

「悪いことしたなルキア。」

終始座りっぱで黙つてたルキアは限界だつただろう。

別に無理せず外歩いていても良かつたんだが……

「ううん、いいの。セトと一緒にほうがいいもん。」

まゝた密着してきたルキアをスルーしつつ、机の上を片付ける。けつこう面白そうなものもある。特にインドアファイツシュとか言うのは骨っぽい外見でかつこいい。

「片付けたら……悪いけどまた出かける準備よ。明々後日にはドラゴンの巣へ行くわ。」

疲れ気味の先生だが、ドラゴンの巣に行くのは別に嫌つてわけではなさそうだ。ただ疲れてるだけ、そんな感じがする。

「ドラゴンの巣ですか……どんなんどこなんですか？」

「ん……まあそのまんまドラゴンがいるところなんだけど、イングランドのハズレで空氣も景色も綺麗なところよ。」

「ドラゴンか～！私見たことはあるけど、巣の方は行つたことないなあ。アメリカから出たのはこれが初めてだもん。」

僕の腕に抱きつくルキアは随分楽しそうだ。

ドラゴンの巣……そこはきっとこことは別世界だろう。

僕はまだ見ぬ世界に想いを馳せていた……

第四章【翔龍編】

第二十九話『ドラゴンの楽園』

空気が綺麗だなあ…

ドラゴンの住むというこの土地は普段の生活圏とはまるで違った空気を持つていた。

「これならドラゴンが住んでるって言われても納得です。」

「ここまで辺境なら人も寄らないからね。セト、寒くない?」

「大丈夫ですよ!この外套すつごく暖かいんですよ。」

学院の二人が帰つてから、実は1ヶ月も経つてしまつてもう10月。

出発が遅れた理由は泥棒だ。

ドラゴンの卵を盗もうとした連中が学院によつて捕まつたのだ。その結果、事実確認のためにドラゴンの管理者と学院の間で諸々あつたらしく、しばらく外から人を入れられなくなつてしまつた。

まあおかげで僕は魔法の技術を結構手に入れられたのだが。

最初はろくな薬も作れなかつたが、ルキアが来てから魔力のバランスがとれるようになり二週間前にやつと風邪の薬が完成した。これに関してはルキア様々だ。

まあそんなこんなで、前回のお出かけよりは魔法使いとしてレベルアップしてここに来たのだが…

さつきから後ろから来ているルキアの匂いがどんどん遠ざかっている。

「ルキア!君はだいじよ…」

「全然大丈夫じゃなーい!セトの影に入れてよー!」

岩場を歩いてはや一時間。セントールのルキアにはやはりキツかつたか…なんとか来てるがヘトヘトな様子。

「最初君が自分で歩くつて言つたんだろ?」

「だつてこんな険しいとは思つてなかつたんだもん。いくら人をよせたくないつたて限度があるでしょ!こんなとこに住むなんて管理

者つてのも好きモンね。」

アハハハ……確か……!?

「ワシがなんだつて?」

「だくかくらく! とんだ好きモンだつて言つて…………!?

「大陸から来た隣人は辛辣よの。」

気がつくと僕の後ろに嗅ぎ知らない匂いの人間がいる!

「なつ!どこから現れた!」

慌てて地面を蹴つて距離を取ろうとしたが、バトル漫画のように行くわけもなく、岩場の着地をミスつて足を滑らせて…

「あつ!」

ズツツという不快な音とともに眼の前にはいっぱいの空が広がつていく。

ガシツ

岩場への後頭部直撃は回避したようだ…

ぶつけかけた頭はなにか柔らかものに支えられている。

「セ、セト! 大丈夫?」

どうやらルキアがすっ飛んできて僕を助けてくれたようだ。彼女の瞬発力には時折驚かされる。

「ああ。ありがとう。」

彼女は両手を僕の胸に当てて支えてくれている。その間に僕は足を地面につけ直してバランスをとり、頭を上げようとした。その時…やつと自分の後頭部を支えていたモノがナニかわかつた…「もうちょっとだけ倒れててもいいかな、なーんて…」

ルキアの顔が赤くなつた。

匂いも恥ずかしがつた匂いから怒りに…

「バカ! セトのバカア!」

げいーんと背中を両手で押されて僕の体は起こされた。

「アハハ。ごめんごめん。まあそんなに怒るなつて。」

ムスーっとした彼女をあしらいながら事の原因でもある人の方へ向き直つた。

掴みどころのない魔力を漂わせ、その全てを匂いだけで知ることは

できないが、それこそが彼の実力の高さをうかがわせている。

「あんた。誰だ？」

いきなり背後を取られた以上強気で行く。まあおそらくはこここの管理人だろうが、偏屈なやつだと困る。

「なかなか良い目つきをしているな。すまなかつた。わしの名はリンクル。」

バサツ、バサツ

どこからか空を切る音がする。不思議な匂いも近づいてくる。

「ココの管理人をしている。」

バサツ バサアツ！

ふと見るとルキアが僕の袖をギュッと掴んでいる。

不安なのか？

「ようこそ。ドラゴンの最後の楽園へ」

バサツア！ザツ！

一瞬男の姿が消えたようにみえた。

あたりを埋め尽くす大きな影はそんな勘違いをさせるには十分な大きさだった。

岩場の際に立つ男の背に現れたソレはあまりのも雄大であつた。
これが：ドラゴン！

特別編 「キヤラクター紹介2」

【名称】（性別）【所属】：説明

【セト・ナンブ】（男）「エルダの弟子」：日本生まれアメリカ育ちの19歳。今年で20になる。誕生日は 10月25日でさそり座、血液型はO型。好きなものは猫とイチゴ。嫌いなものは虫。竜舌蘭の花という特殊体質であり現在は魔法使いエルダの下で魔法を学んでいる。

能力のためか非常に練度の高い魔力を有しており、隣人や動物たちに好かれやすい。

セントールのルーシイをルキアという新しい名で使い魔に迎えている。数年前に両親を事故で亡くしており、親族はいとこのショウ・シラカワしかいない。

【エルダ】（女）「なし」：周囲からはカラーズと呼ばれている魔法使い。見た目は30代前半といったところだが、お約束で顔と年齢は合つておらず、第二次世界大戦中はもう弟子を取るほどだった。セトを弟子に迎えて以降気苦労が絶えない。

多方面に知り合いがおり何かと仕事を持ち込まれる。多少厳しいところはあるが、優しくおおらかな性格の持ち主

魔法使いの嫁銀糸編の作品の「ナチュラルカラーズ」の登場人物

【ルキア】（女）「セトの使い魔」：もとはルーシイという名だつたがセトとの契約において新たな名を得た。大昔に大陸へ渡つたセントールの一族の末裔で、活発的で明るい性格の持ち主。セトの魔力に惹かれていたが次第にセトのことを想うようになり、自ら使い魔になることを望んだ。火に関係する力が多少強い

【キリド・フェーン】（男）「魔法機構」：魔法使いの弟子。かつては功名心からか体を壊してまでの開発、研究を続けていたがエルダのおかげで世界の色を取り戻した。現在は学院や教会などに協力しながら

魔力量の測定装置の研究にいそしんでいる。

魔法使いの嫁銀糸編の作品の「ナチュラルカラーズ」の登場人物
【アドルフ・ストラウド】（男）【学院】^{カレッジ}：隣人が見えるものの魔術は使
えないらしく現在は学院の事務方らしい。

かつてはリンデルの弟子だつたらしいが詳しいことは不明。かつて渡した鏡を大切に持つて置くぐらいには親交があつたようだ。またその関係か学院のドラゴン関係の窓口になつてている。

トーリーやレンフレッドとは仲が良いほう。

【ジャック】（女）「なし」：マンハッタンで探偵をしているチエンジリング。片割れと共同生活をしている。セットをエルダに紹介した張本人。職業柄顔は広め。アニメなどのサブカルチャーにドはまりしておりそれ関連の出来事には目がない。リンデルとの交流もあるらしい。

魔法使いの嫁金糸編 銀糸編 の両編に登場するキャラクターであり、彼女が主人公の漫画『魔法使いの嫁 詩篇・75 稲妻ジャックと妖精事件』がiOS・Androidのアプリ版マンガドアにて限定で連載スタートしたこと。（詳しくは公式サイトをチェックだ!!）

【サイモン・カラム】（男）【教会】：教会上層部からあることを命ぜられている、神父兼牧師。宗教的に考えるとふつうあり得ないのだが兼任している。魔法使いと教会の橋渡し的なことをやつていていることが多い。喘息のような持病を持つており、ある魔法使いから定期的に薬をもらっている。実は特殊なジンクスゆえに暗く重い人生を歩んでいる。“吸血鬼のようなナニカ”として暮らしており、その“ナニカ”と彼の心の暗いものによつてセトにすら分からなかつた嘘をついている。

【トーリー・イニス】（男）【学院】^{カレッジ}：魔法使いオタクな変な魔術師、、つぽさを演じていてがカレッジ内での確執の一端を担つており、何を考えているいまいちわからない男。一応弟子もおりその弟子は彼のために魔法を学ぼうとしている。

第三十話 『菩提樹』

「いやあ、驚かせてすまなかつたの。ハハハハ！」

「ハハハハハじやないわよ、リンデル！うちの弟子で遊ばないで！」

まつたくその通り、笑い事ではない。人生で初めて腰を抜かした、なんとかルキアの背に乗りながら谷までやつてきたが、かなりこつぱずかしい思いをしてしまつた。まさかドラゴンの迎えが来るのは、

「まあそう怒るな。この間の事件以来来訪者には警戒気味なのじや。私から出向きでもしないとカレッジの連中もうるさくてな。」

ドラゴンが盗まれかけたとかいう一件のことだろう。あれのせいで10月まで待たされたんだ。寒くなつてきたしほんとに参つちまう。

「災難だつたわね。犯人は結局何だつたの？」

会話に置いてけぼりでつまんなくなつてきたなあ、

そろそろ痛みも引いて立てるからなおさら手持ち無沙汰つてやつだ。

「セト。なんかつまんないね。」

傍に立つていたルキアも同意見。大人の世間話というのはえてして長いものなのだ、

「先生、少しあたりを見てきますね。」

「えつ？あ、うん。こっちの用が終わつたら声かけるわ。」

あつ、これほんとに長いやつだ。

二人から離れてあたりを見物してみる。どこを見ても見事なまでに大自然だ。空気もきれいだし、都会とは大違ひだ。

「ルキア見ろよ！この花見たことない種類だ。」

あちらこちらに図鑑では見たことない植物がある。これだけでも來た甲斐があつたもんだ。

「セトつてそういうのが好きなんだね。」

好き、確かにそうかも。動植物は結構好きなほうだ。

「うん、まあそうかもね。昔は、」

話しながらあたりを見まわしていると、突然ぎゅっとコートの端を引つ張られた。

ルキアは視界の中にいるから今引つ張ったのは彼女じゃない。足元へ目をやると、そこには小さいドラゴンたちがいた。

おそらく子供か。トカゲにしちゃデカいもんな。

「お兄ちゃんたち魔法使いなの？・リンデルの仲間？」

「ドラゴンって喋るのかああ！」

「ドラゴンってみんな喋るのよ。知らなかつた？」

僕の驚きの表情に気付いたようでルキアがクスクス笑いながら言つた。

「知るわけなかろうが！」

改めて子供ドラゴンに向き直ると目をキラキラさせて回答を待つていた。

「あ、ああ。私の名前はセト。リンデルさんと同じく魔法使いだよ。それどこいつは使い魔のルキア。よろしく」

「うん！ よろしくねセト！」

いきなり呼び捨て……まあいつか。

それにしてもこのドラゴンは何をしに来たんだ？ わざわざ挨拶だけつてわけでもないだろう。

「ねえねえセト。ルキア。なんか遊んでよ！」

答えはすぐ出た。やつぱり子供らしい。

「セト。どうする？ 遊んであげる？ どうする？」

ルキアは遊ぶ気満々だ。まあ大人二人のほうはまだ終わりそうにないし、少しくらいはいいだろう。

「よし！ いいぞ！ 何して遊ぶ？」

僕の返事を聞いて小さいドラゴンは小躍りをしている。ルキアも嬉しそうだ。

気づけば辺りには小さいドラゴンたちが集まつてきていた。

そしてみんなが一斉に遊びたいことを言つた。

「かけっこ!!」

なんか少しやな予感がした……

第三十一話『跳んで、飛んで』

悪い予感というものは的中する。

ハアハアハアハアヽヽ

さすがドラゴン。小さくてもやることはオーバーだ（人間から見ればだけども）。少し走り回つただけのはずなのにもう足が棒になつてしまつた。

結局僕なしで彼らは遊んでいる。ドラゴンでもやつぱり子供か。遠目に見ていると脇にルキアが戻つてきた。

「ハアハアヽヽすごい元気なのね。ドラゴンつて。私もうヘトヘトヽ」
そういうながらも彼女の表情は明るい。そういえば最近こんなに広いところで走り回ることもなかつたな。少しストレスになつたのかなあヽヽ

そう考えるとそれだけでここに来た甲斐があつた。

「たしかにすごいな。彼らのとんでもない体力が大空を羽ばたくあの雄大な姿を形作つているんだろうな。」

二人して休んでいたらまた子供たちが集まつてきた。

「セト！ 楽しかつたよ～！ 次は何する？」

「えつ!? あれだけ走り回つてまだたんないのかよ！」

これにはルキアも唖然としていた。なんたつて僕らが無駄話をし
て休んでる間も彼らは人間が混ざつたらひとたまりもないような
じやれ合いをしてたんだから。ほんとに体力有り余つてゐるなヽヽ

「あ、いや。すまないが私たちは少し休ませてもらうよ。君らだけで遊んでおいで。」

子供たちは多少不満そうではあつたが、何か思いついたらしく谷底
に沿つてある川の少し上流の滝のあるがけへと昇つて行つた。

「あんまり危ないことはするなよ～」

といつたそばだつた。

「ねえセトみてよ～！」

滝の上一匹の子供が小さな翼を大きく広げて今にも飛び降りよう
としていた。

小さめな滝とはいえ高さは1、20mはある。落ちたらひとたまりもないし、あの小さなバランスの悪い体では到底飛べるとは思えない。

「あっ！よせ…」

スッとまだ幼いドラゴンの体が宙に舞つた。

その先を直視できるほどの勇気は無く。僕は目をぎゅっと閉じた・・・・・・・・・・

あれ？

何も落ちた音が聞こえない。

急いで目を開けて確認すると、ちょうど落ちたはずのドラゴンが翼を広げたままゆっくりと降りてきた。

翼がパラシユートの働きをしたのだろう。が、あの体のバランスでそれができるとは思えない…

ドラゴンたちも隣人たちと同じく現代の常識が通じる相手じゃな
いつてことか。

まあ心臓に悪かつたが無事で何より。

「あははは！セト、すぐかつたでしょ？僕らはそれを飛べるんだよ！
人間にはできないんでしょ？」

さつきのドラゴンは楽しそうに、そして自慢げに話した。
こうもされるとちょっと対抗したくなつてきた。

「ああ、凄かつたよ。おかげでこつちは心臓がちぢこまつたかと思つたけどね。んだが、人間だつて空は飛べるぜ。」

（飛行機でな）

「えつ！ウソだ！リンデルは飛べないって言つてたよ。」

周りで遊んでた子供たちも集まつてきて目を丸くしてこちらを見
ている。当然だ初耳だろうし。

「ところが今の人間は飛べるんだよ。ちょっと特殊な準備がいるけど
ね。」

自信満々にいいう僕にルキアが耳打ちをした

（セト。そんなこと言つていいの？実際に翼が生えてくるわけでもな

いのに。)

(いいのいいの。飛行機は人間の発明だ。科学も人の力つてことですか、嘘言つてるわけじゃない。それに)

(それに?)

(ちょっと悔しいからね。なんか騙された感が否めない。)

(フフフ。結構セトつてかわいいとこあるわね。まあ程々にしてあげてね。)

「ねえねえ！人間が飛べるつてホント？ルキア」

ドラゴンたちはどうにも僕が信用できないらしく、今度は質問の先を変えてきた。

だが残念！その子は僕の使い魔だ。しかも今悪だくみの計画をすり合わせたところだからね。

「ええ。私もびっくりしたけど、飛べるのは事実ね。」

(飛行機だけど)

二人に言われてやつと事実と認知したようで

子供たちはほかのみんなに伝えようと僕らに何も言わず駆けて行つてしまつた。

「あの単純さは。可愛らしいかもしれないが、ちょっと危険じゃないの？」

「隣人も贊同したから信用したんじゃないの？」

「いや、そこまで考えてないね。とりあえず無邪気な好奇心の香りはしたけど。それだけだつたよ。」

子供たちはいなくなり再び静かな谷に戻つてきた。まあ川の中になるとでもなくデカい何かがいる点を除けば非常に心休まる場所だ。先生たちはまだ終わらないみたいだし、少し横になるか。

「ルキア、少し休もう。ぼかあ疲れた。」

「そうね。さすがにあれだけ動くとね。」

やわらかい草の絨毯の上で横になる。頭の上を吹き抜ける風は心を抜けていくような爽やかな、心地のいい優しい風だった。

第三十二話『龍の夢』

それは、遠い昔のこと、、、

私はそこで目を覚ました。美しい自然の中で、先祖たちが還つたここで。

一緒にころに目を覚ました友達は大きな翼があつた。私にはない雄大な翼が。

飛ぶとはどういうことなのだろうか？

一生叶うことのない夢を抱きながら私は大地から彼らを見つめていた。

月日は流れた。それはそれは恐ろしいほど多くの時が過ぎていった。

あの友達は、還つてしまつた。

けど、悲しくはない。いざれ私も還る。

けれど、、、

僕の真正面にいる。
隣ではルキアも目をこすりながら起き上がるうとしていた。

遊んでいたはずのドラゴンの子供たちはみんなで集まつて滝の傍でお昼寝タイムのようだ。

スースーと寝息を立てている。

日が射して自分のいるところが明るくなつたせいか辺りが暗く見える。

その暗がりがさつきの夢を呼び覚ます。

『恐ろしく奇妙で孤独な夢』だつた。それと同時に『美しい』ものでもあつた。

また誰かの記憶を覗き見てしまつたのだろうか？今日はちゃんとネックレスつけてきたのに、、、

最近はあまり魔法が上達していない。それが関係しているのだろうか、、、？

そういうふうしていると、目をこすりながらルキアがこちらにやつてきた

「ふあああよく寝た。セト、おはよう」

「ん？あ、ああおはよう、ルキア」

あからさまな僕の異変にさすがのルキアも気づいたようだ。

心配そうに顔を覗き込んでいる。

「あ、いや……妙な夢を見たんだ。それでちょっと頭の中が混乱してるんだよ。ハハハ……」

そういうつてふらつきながらそばの岩に手を置きながら立ち上がった。

『妙な夢とは、空を舞うドラゴンを見つめる夢のことかな？』

!!

声は直接僕に届けられたかのように感じた。実際はそのひとはその言葉を口にしていたのだ。

だがその声は心に直接響く、獨特な魔力を帯びていた。だがその主はどこだ？

ここは特殊な空気の流れを持つていて、鼻は役に立ちにくい。

ルキアも聞こえたようでキヨロキヨロしていたが、すぐに僕の方を見てぎょっとした表情を見せた。

「？どうかしたのかルキア。俺の顔に何か……」

「違うわ！自分の手を置いたところ見てよ！」

ん？手を置いたところ？

そこには大きな岩が……岩が……岩じゃない……

『やつと気づいてくれたかな？』

私は、ネヴィイン…………もう500年は生きているドラゴンだ。』

鼠色のずつしりとしたドラゴン。

500年という果てしない時を生きた結果か、その節々に老いが見えていている。

しかし、その眼は死んでいない。

相手の心を見据えているような鋭く、しかし優しさに満ちた、

「し、失礼しました！岩かと思つて…」

アツ：

『君ははつきりとものを言うんだね。』

どう考へても失言だ。

「す、すみません…」

慌てて謝ったがネヴィンは聞いていないようだった。僕のほうを向いているが、実際はもつと遠くを見つめている。それはルキアが僕のわききても変わらなかつた。

『私は別に氣にしていないさ。それよりも、君の背後の、、』

背後？僕の後ろには誰もいない。サッと振り向いたが間違いかつた。

「僕の後ろに何かありますか？」

ネヴィンはしばらく無言でいたがハツとしたように僕の胸元を見つめた。

『そうか、そうか。あなたはこの子を、、』

誰に向けたでもない独り言、、しかしまるで会話の相手がいるような、、

ルキアもこの年老いたドラゴンの奇行に首をかしげている。

「ねえ、このヒト歳食いすぎておかしくなつたんじやないの？」

「こらッ！失礼なこと言うんじゃない！」

小声で繰り広げられる僕らの会話もネヴィンには興味のないものなのだろう。

それらを指摘するでもなく、また僕の目を見つめだした。

『君は、まだタマゴなのだね。ああ、魔法使いの。だ』

この言葉は間違いなく僕へ向けられたものだ

「はい。先生のもとで勉強をしていますが、まだまだ経験も浅く、ちゃんと躊躇するかもわからないタマゴです、、」

そう。能力がどうのこうの言われても、結局のところ成長の実感は簡単には得られない。特に最近は全くと言つていいほど自分に成長を感じられない。

『そんなに自分を貶めなくてもいいさ。君には確かに他の人間にはな

いものがある、、そうだ。』

彼はやさしく僕へ語りかけた。嘘のない言葉。鼻など使わざともわかるさ、彼の言葉に嘘はない。

『君はここで杖の素材を探すといい。魔法使いにとつて杖は必要なものとなるだろうからね。』

杖、、、そういえば前に先生が言つていた

「魔法をより安定させて使うには杖があるといいわ。あれは一種の力ギなの。自分の求める結果への道筋を打ち立てるカギ。いずれ作りましょうね。』

杖があればまた成長できるだろうか、、

『ここには多くのドラゴンたちが眠っている。木となつて。』

木？確かにこのあたりには大き目の木が多い。これが全部ドラゴンだつていうのか？！

『我々ドラゴンはその命が終わるとき、大地へと還るんだ。そして一本の木となる。彼らから生まれれる木はなかなか質の良い素材となるはずだ。リングルも快諾してくれるだろう。』

「ありがとうございます。先生にも話してみますね！」

まだ僕には殻を破るチャンスがあるーーここに来た甲斐があつたものだ。早く先生に杖の作り方を教えてもらおう！

自分の中に感じていた不安は消し飛んでいた。そして夢に見た光景も、、、

ルキアも僕の顔をみてほほを緩ませた。

「ネヴィインさん。ありがとうございます。』

ぼくは深くお辞儀をした。 ルキアも頭を下げていた

『いや、私は何もしていなさい。まあ君の役に立てたならうれしいよ。こちらこそ楽しいひと時だつた。ありがとうございます。』

ネヴィインの感謝は僕たちの心に直に届いた。

彼の深いやさしさに背を押され僕たちはその場を後にした。自分の杖を思い浮かべながら、、、

第三十三話『スランプ』

「えつ！杖を作りたい？」

「おやおや、随分と元気のよい卵よの。」

ネヴィンのもとを去つた僕らは大急ぎで先生たちのもとへ走つていた。

「そうんですよ！杖さえあれば魔法も安定するんですよね？」

杖さえ。その言葉を聞いた途端先生は不満そうな表情をした。

なにかマズイことを言つただろうか？

「まるで、杖がないと魔法が安定しないといわんばかりね。確かに杖はより高等な魔法を使うとあれば必需品となつていくわ。けど今セトに教えているものはそんなハイレベルな魔法ではない。問題はあなた自身にある。ルキアと契約して以降しばらくは調子が良かつたけど、突然伸び悩んだ。自分は才ある身であるはずなのに。大方そんなところでしよう？」

うつ、：

見事に看破されていた。

「ハハハ！相変わらず自他に厳しいやつよの。若い『芽』をいじめてやるな。」

リンデルさんはにこやかに僕らを眺めている。口ではああいつてるが、仲介する気は毛頭ないようだ。匂いから察するに、他人のことには干渉しないタイプのようだ。

「リンデル。少し黙つてて。」

さすがわが師匠、躊躇ねえ、：

先生は僕に向き直ると再び話し出した。ルキアもビビツてて棒立ち状態。あきらめて話を聞くかあ

「誰にでも軽いスランプはある、それは魔法使いも例外じゃないわ。まだ若い子に起こりがちなんだけど、魔法をたくさん学んで、今までの何倍も魔力を使うようになると、コントロールの感覚が狂いだすことがあるの。ものすごい緻密な徹底管理でもされてない限り、大なり

「小なり起きることよ。」

「それじゃあ、今僕はそのスランプなんですか？」

「ええ、その中でも比較的浅めのね。」

得意な分野以外ほぼ安定しない今の状態で浅めなのか、
「ひと月。おおまかなスランプの時期は一ヶ月よ。そこを超えたたらま
た安定してくるわ。」

なんだ。それだけのことだつたのか。それなら初めからそうだつ
て言つてくれれば、：

「それならなんでセトにそのこと言つてあげなかつたのよ。」

ここぞとばかりにルキアが口を開いた。パートナーの僕のスラン
プには人一倍心配してくれていた。彼女の気持ちももつともだ。
「簡単よ。スランプという状況に甘んじて抜け出す努力をしなくなる
からよ。私は無理をさせるのは嫌いだけど、努力もせずできないでき
ないつていうのはもつと嫌いなの。」

ごもつとも。やはり僕のことを思つての行動だつたのか、：

「先生。目が覚めました。努力なくして結果は得られない。危うく逃
げてばかりの人間へと落ちて行くところでした。」

厳しい目つきが緩み、優しいを帶び始めた。

「そこまで、自分を責めなくともいいわよ。あなたの努力は私、いや
ルキアが一番知つてるもの。」

エッヘンと言わんばかりに胸をそらせまくつてる彼女のほうを見
ながら先生は言つた。

「まあ、あなたの言う通り必要になつたら杖をもらいに行きましょう。
スランプを乗り切つたら。ね？」

「はい！」

話をすつと無言で聞いていたリンデルが口を開いた

「そうかそうか。また来るか。それではその間にめぼしいものを見
繕つておこう。」

「ありがとうございます。リンデルさん。」

三十代前半のように見えるこのフードの男性。本当のところどう

思っているのかはわからないが、このやさしさには甘んじてもいいのだろう。

杖は少し遠ざかつたが、この出会いは素晴らしいものを生み出すに違いない。

肌を刺す寒さが少し和らいだように感じた。

第三十四話『休息の終わり』

「さて、それではそろそろ鱗をかえしてもらおうかの」

杖の話もひと段落し、会話の話題は本来の目的へと戻っていた。鱗は僕のカバンの中に小箱に入つた状態で入つている。

直接触れることがどういうことかは先生が身をもつて証明してくれたし、ここ数か月の間自室に置いていた僕もよく実感していた。

「はい、この中にドラゴンの天鱗が入つています。」

ガサゴソとカバンを漁り小箱を引き出しリングデルさんへ手渡した。

「うむ、たしかにうけとつたぞ。ところで、」

リングデルさんは不思議そうに箱を見つめている。

「どうしてまたこのような魔力封じの小箱なぞにいってきたのだ？」

「それは、：：触るとどうにも危険なもので。ねえ？」

ちらつと先生のほうを見やると先生はオホン！と咳払いをした。顔も少し赤い

「え、ええ。強い魔力を持つものっていうのは多少の危険をはらんでもるわね。」

あからさまにおまぬけな反応をする僕らを見てリングデルさんは大笑い。

「ハハハハハッ！ そうかそうか。【記憶と欲求】か。おぬしらには悪いことをしたな。そうかそうか、エルダ。おぬしもか。ハハハ！」

「そ、そこまで笑うことはないでしょに！」

先生が顔を真っ赤にすることなんてそういう見られない気もする。あついや鱗の一件で見たか、：

「まあまあ。しかし、鱗自体には傷もなく何かに利用された形跡もない。主らが大切に保管してくれたが故だ。礼を言わねばな。」

そういつてリングデルさんは小さな巾着を先生に手渡した

「お金については学院カレッジがどうにかしてくれるだろうから、私からはこれをおな。」

巾着の中にはなにか石のようなものが入つているようだが、：：中を見た先生が少し驚いた表情でリングデルを見た。

「あら、ずいぶん珍しいものをくれるのね。ベゾアールなんて。」

ベゾアール、、、たしか山羊や牛の胃から見つかる石だ。

「解毒に使う石でしたつけ？」

「ほう。よく学んでおるな。やはり優秀な師を持つとはこういうことかの。」

リンデルさんは顎に手を当て感心した様子だ。

褒められた先生はまんざらでもない。

「まあ、何かと役にたつものじや。持つていくといい。」

「ありがたくもらつておくわ。それじやあそろそろ、、、」

まだ日が昇りかけのころにここについたが、もう暮れる一歩手前だつた。

「そうか、もうそんなに経つたか。やはり若い者たちといると時の流れが速く感じるものよなあ。二人とも、いや三人とも、また来るといい」

言葉からは寂しさと期待が香つていた。

「はい！今日はありがとうございました。」

僕らはリンデルさんにお礼を言い谷を出た。

その道中の話題はやはりドラゴンたちのことが大部分をしめることがになつた。

「それで、すごいんですよ！崖から飛んだと思つたらスースと滑空していくんですね。」

先生はにこやかに僕とルキアの話を聞いていた。

僕の話が面白いっていうのはわかるが、あんなにこにこするもんかな？

そう思つているとルキアが僕に耳打ちした。

（セト。エルダはね、最近スランプ気味で暗かつたあなたがこんなに明るく喋つているのがうれしいのよ。べつにあなたの話がうまいわけじやないのよ）

なんかさらつと嫌味言われた気がしたが、

「ん？そうしたの二人とも。」

小声で話す僕らを先生が不思議そうに見つめている

「いや、何でもないですよ。」

「そうそう。何でもない何でもない！大丈夫よエルダ。」

こうも隠し事へたくそな二人組がいるだろうか、我ながら滑稽だ
それに追い打ちをかけるようにルキアは露骨に話題を変えた

「あつー！ そういうえば！ 帰るときりにリンデルからもらつたあの石はなん
なの？ 私知らないわ？」

「ああ、これね」

先生は上着のポケットから巾着を引っ張り出した。

「そうね、せつかくだし、ここは 勤勉なセトに教えてもらおう
かしらね？」

隠し事したかるーい腹いせは見事に僕へクリーンヒットした。

「え、えつと、たしかベゾアール石でしたよね。これは山羊などの動
物の胃からとれる石で解毒の作用があります。」

ぎこちないがとりあえずあつて いるはず。

「うーん70点ね。」

「えつ!?」

「解毒っていうけどこの石をどうやつて使えば解毒できるのかしら
？」

「ん？ そういうえば、どうするんだっけ？」

「エルダも意地悪ね。知らないことわかつてたんでしょ？」

いつのまにか敵が増えてる、

「フフフ、まあね。でも中途半端な知識が危険なことは事実よ。杖が
欲しいとか言つていたけど、まだまだセトは勉強が必要ね。」

家に着いたらお勉強祭りだなこりやあ、

やれやれと思いながらも久しぶりに戻つてくる日常を前に安堵の
ため息が漏れた。

ほほをなでる風ははやくも冬の香りを運び始めていた。

第五章【暗夜編】

第三十五話『四人の卵』

ドラゴンの巣から帰った僕らを玄関の前で待っていたのは手紙を咥えた小鳥、、の死骸だった。

生きているかのようにふるまうそれからは生の匂いがしない。

「先生、、あれは！」

しばらくぶりの開放感の中で気が抜けまくつていた僕にとつて異質でしかないそれは恐怖の対象になりつつあった。

ルキアもセントールの姿で影から飛び出してきた。

一方で先生は怪訝な顔こそしていたが、警戒感は匂つてこなかつた。

「二人ともそんなに警戒しなくても大丈夫よ。あれは学院からの遣いよ。魔術師は死骸を使って連絡を取るつて前に話したでしょ？」

警戒心マックスの僕らを諫めた先生だが、怪訝な表情をしているのもまた事実。

学院からの頼み事などろくなものじゃないのは、鱗の一件で実感したばかりだ。

死骸は手を出した先生に手紙を渡すとどこかへと飛んで行つた。家に入つて窓からバサバサと飛ぶあれを見送つていると

「よくできてるね。あれで死体だつていうんでしょ？」

興味津々なルキアが言つた。

「僕からすりやあれは命への冒涜だと思うんだよね、死靈術つてやつだろ？あれは薄気味悪いよ。」

僕らが駄弁つてる間も先生は届いた手紙とにらめっこだつた。

その間僕らがることは、動物たちの様子を見ること。

青蛙神とピュティアは僕の部屋で飼つてある。狭いところに閉じ込めるのは気が進まない話だが、仕方あるまい。特に青蛙神に関しては神獣と呼ばれているし、下手に外で町の子供にいたずらでもされたらどんなリバウンドがあるかわからん。ピュティアは利口なので僕の

意をくんで部屋でのんびり過ごしてくれている。

問題は外で飼つてるやつらだ。ズラトロクは色以外は比較的普通のシャモアなので困つておけばいいが、毒牙を持つファングドバードや脱走癖のあるウサギ二匹は餌やり一つにだつて手を焼いている。

厚手の手袋で鳥小屋へ、片付いたら今度は細心の注意を払つてウサギ小屋へ

エサ代は出るとはいえ大変だ、、

まあ今回も何も問題なく済んでくれたので良しとしよう。

一通り終わつてルキアとダイニングで荷解きをしていると手紙を読み終えた先生がやつてきた。

それもとびつきり真剣な顔で

「かえつて早々悪いんだけど、明後日ロンドンに行くわよ。」「ええええ!!」

さすがに僕らの体力の限界が目前に、、、

「気持ちはわかるけど、今回のことあなたにとーーーーーつてもかかわりのあることなの。おそらく人生でも一位二位を争うくらいの。」

はて?人生にかかること、、?

話を聞いてみると手紙は学院からの協力願いらしい

ただのお願いであれば断ればいい話。先生が出発を決めた理由はほかにあつた

「これを頼んできた魔術師こそ、あなたとルキアが出会つたあの日にほかの卵たちを引き取つた人物なの!」

!!

あの日ジャックのもとへ連れて行つてもらつたとき彼女は言つた
「これで四人目だ」と

あの時はほかの三人については深く聞かなかつたが、よく考えれば僕が魔法に目覚めた理由を知る手がかりそのものじやないか。

結局、最後までごねたルキアを何とか説き伏せて、僕らはロンドンへ向かつた。

約束の路地へたどり着くと、そこには5人ほどの男女が集まつてい

た。

見覚えのある顔は一人だけ、アドルフさんだ。

連絡役だと言っていた彼だが、今回の主役はその隣に立つ老紳士のようだ。

外見は65過ぎくらいの白髪の男性。だが体はしゃきっとしており杖の世話にはなつていなそうだ。

しつかりと手入れの行き届いた茶色のスーツに中折れ帽子。いかにも英國紳士を気取った服装だ。

この老紳士は僕らの前へ一步出て挨拶をした。

「突然のお呼びたて申し訳ありません。あまり時間のないことだつたもので。私はフランク・バーダー。学院の魔術師です。」

先生は僕らを背後にやつて返した。

「ご挨拶ありがとうございます。私はエルダ。知つての通り魔法使いよ。それでこの子が、、」

「存じ上げております。ナンブさんですな。」

バーダーさんは先生の後ろから顔を出した僕をまじまじと見つめていた。

「どうも、セット・ナンブです。」

挨拶もそこそこ、アドルフさんがバーダーさんに時間がないつて顔して咳ばらいをすると

僕への目線を自身の背後へ向けた。

「さて、早速だが彼らを紹介しよう。アガヴェ・エクネ龍舌蘭の花という謎を共有する者たち。あの日、ニューヨークで魔力の目覚めを起こした三人だ。」

バーダーさんの後ろに立っていた三人の少年少女が前に出てきた。すぐに、彼らが普通と違うことに気が付く、彼らの香りは僕と似ているから、、、

第三十六話『面倒なこと』

バークーさんの紹介で僕の前に出てきた少年少女3人組。お互いに少し見やつた後

一番左端に立つ、おそらく日本人と思われる少年が口を開いた。

「俺は、マサト・カキザキ（雅人 柿崎）あなたの見てる通り日本人だ、おつと！なんでそんなこと考えてるのかって顔してるな。えへへ、俺ってさ”視える”んだよ。いろいろと」

！ 彼は僕のように他人の心が感じ取れるのか？

だが、まだ慌てる時間じゃない。心を隠す術は先生から早々に学んだ。

心の香りを感じてかぎ分けられるならそれを防ぐ策も知つておくべきだということだつたが、まさかこんな所で出番になろうとは、フーッと小さく息を吐き、心を自分の少しだけ内側に隠す。

最初のころは感覚がわからず、先生に性癖まで暴露されるという拷問のような目にも遭つた、

今となつては懐かしい思い出。まだ数か月しか経つていないはずなのに、時間の流れは不思議なものだ

「よろしく。柿崎君！」

そういう“思い”ながら手を出し、彼の顔を窺うと、突然”見え”なくなつてしまつたことに少し困惑気味なようだ。眉間にしわが寄つてている。

「はいはい！次はあたし！」

怪訝な顔のままの柿崎をぎゅぎゅっと押して僕の前に現れたのはおそらくこの中で一番年下であろう少女だつた。

金髪で白い肌。雰囲気も明るく、活発な雰囲気の子だ。

「私はアエラ・ホーキンス。15歳よ。あなた小さいけどいくつなの？」

「小さいとは失敬な、、19だよ。これでも」

ムスッとして返すとアエラは驚いた顔をやたらとオーバにして見せた。

「へえー！私より4つもお兄ちゃんなわけだ！あとね、私甘いものときれいなものが好きなの。うーんと、：自己紹介つてこんなだよね。うん。よし！えーっと。まあ、うん。よろしく！」

「んん、：？ああ。よろしく」

妙に締まりのない会話だった、、、

アエラの番が終わり最後に来たのは、ずっとフードを深くかぶつてバーダーさんの後ろに隠れていた少女だ。

「ほら。エニル！君も自己紹介なさい。」

バーダーさんに背を無理やり押されていやいや前に現れた少女は、ゆっくりとフードをとつた。

!!!

艶のある長い黒髪。深い蒼い目。すっとした顔立ち。白い肌。

細く目を開け横目に僕を見る彼女は筆舌に尽くし難いほど美しい。だがこの言葉だけでは言い表せないなにか、内から湧き上がる何かがある！

僕より背も小さいし、おそらく年下だろう。だがそんなことは関係ない。

この感覚は、ルキアと会ったときに感じたのとは違う。確かに美しい。だがこの言葉だけでは言い表せないなにか、内から湧き上がる何かがある！

「エニル、： エニル・マーシエン。」

彼女はそれだけ言つてまたフードを被つてしまつた。

「エ、エニルさん。よろしく！」

そういつて手を出したがプレイとそっぽを向いたと思つたらサツとバーダーさんの後ろにまた隠れてしまつた。

「すまんね。セト君。エニルは少々人見知りが強くてね、：」

バーダーさんは申し訳なさそうにして言つた。

「ああ、： いや。かまいませんよ。」

めっちゃかまうんですけどね!!

初手から嫌われちゃかなわない。きっとこの感情は、、、

「さあ、挨拶はすんだわね。そろそろいかしら？」

後ろで僕の醜態をみていた先生がたまらずこの微妙な空気に入つ

てきた。

まあ確かに、自己紹介だけのために僕らを呼びつけたわけじやあるまいし。

バーダーさんがピシッとした表情になつた

「ああ。 そうだな。 では簡潔に話そう。 セト君。 君は鱗騒動の時に闇市で幻獣の脱走騒ぎに関わつていたろ。」

あー そういえばそんなこともあつたなあ。あのめんどくさい男の商売道具が山のようにはげ出した一件か。

結局僕が全部買い叩いて脱走した彼らをまとめて連れて行つたことでけりがついたはずだつたが、、

「あの販売の元締めがそれを知つてな、、セト君、君を^ご指名だ。 騒ぎについて『話し合おう』つてさ。」

ああ、、誕生日間近だつてのに何てついてないんだ、、

どう考へても厄介^ごことだ。 僕は過去の自分をとりあえずぶん殴りたくなつた、、

第三十七話『忘れてた因縁』

ロンドンでバーダーさんに連れられてたどり着いたのは雑居ビル。見た目も入った印象もいたつて普通のものだ。

狭い建物なのでルキアは影に入つてもらうことにしよう。

そんなことを考えながらバーダーさんの後をついていく。エルベーターで二階に上がり入つてすぐの鍛の目立つ扉。彼はそこで立ち止まつた。

「ここがそうだ。一応説得はしてみるがおそらくセト君しか入れてもらえないと思うよ。エルダさんは無理でしょ、」

「いいわ。何かが起きようものならこの扉程度どうとでもなるもの。」先生は僕がヤクザのような連中に目をつけられたのが気に入らないようだ。

当然といえば当然だが、怒りでこのビル氷漬けとかにしなぎりやいけど、

さて、件の部屋だが僕の鼻がおかしくなければ何の変哲もない部屋だ。

珍獣、靈獸を売りさばく連中の本拠点とは思えない。

疑問が多いが今質問したところで納得のいく返事は得られないだろう。

バーダーさんが扉をノックするとすぐに不愉快な鉄のきしむ音とともに扉があき人が一人、顔を出してきた。二人が小さな声で何かやり取りをしている、おそらく合言葉か紹介状的なものか、会話が終わると扉から出てきた男は部屋に引っ込み扉を閉めてしまつた。

様子をずっと注視していた僕らのほうに振り返りバーダーさんが口を開いた。

「やはり、入れるのは私とセト君だけのようだ。すまないがエルダさん、うちの弟子連中を見てやつてくれませんかな?」

申し訳なさそうにするこの男の動作はいちいちワザとっぽい。思えば教会のあの人もそんな動作だつたなあ。

だから胡散臭いとか言われていたのだろう。確かにこの人と同じく心の匂いを思い出せない人だつた。

「はあ。まあいいわ。ただし、セトに何かあつたら、」

バーダーさんの対応にあきれながらも先生はしつかりと脅しをかけていた。

「も、もちろんわかっていますよ。お、お任せくださいな。」

ああ、人はいいがこの人に何か任せるの不安だ。自分の身は自分でつてことか。

「では、行こうかセト君。」

そういつてバーダーさんは扉を手前にあけた。先ほどの不快な音とともに僕の目に映つたものはおおよそこの雑居ビルには似合わない高級な装飾がほどこされた先の見えないほど長い廊下だつた。

もちろんこのビルのサイズに合つているとは到底思えない。

魔術で作つたのだろう。おそらく決まつた手順を踏まなければこの廊下には繋がらないのだろう。後ろで見ていた三人組も目を丸くしている。

僕だつてこの発想には驚いた。それと同時にこう言つた連中が世間に見つからない理由もわかつた。

廊下に一步踏み入れると空気の匂いも一変する。

床は赤地金の刺繡の施されたカーペットが敷かれ、壁も纖細な細工が施されている。

キヨロキヨロとあたりを眺めていると

「セト様とバーダー様ですね。お待ちしておりました。」

女性の声が背後から聞こえた。さすがにこの廊下は相手に気づかれないように横をすり抜けられるほど広くない。よくてホテルの廊下程度だ。だから僕の後ろに人がいるという異常な事態は警戒に十分に値するものだつた。

てかバーダーさんも驚いている、ダメだこりや。

「驚かせてしまい失礼しました。」

そういつて女性は先生たちに会釈をしながらビルと廊下をつなぐ扉を閉じた。

うまく閉じ込められたわけだ。

「私お二方の、ご案内を仰せつかりましたレイラ・ミラーと申します。早速ですが、社長室へご案内します。」

（社長ね、：ハツ！）

スタスターと僕らの前を歩くミラーという人は金髪ショートに白い肌、スタイルがよく、いかにもな感じだ。

廊下は結構長かったがその間何もなくただ小綺麗な壁と床を見ただけに終わつた。

気づけば扉の前、ドアノブは趣味の悪い金ぴかの竜の装飾が施されている。

ミラーさんが扉をたたくと、いかにも堅気じや無いスーツにサングラスの男が顔を出し僕らを通した。

「それではこれで、：」

ミラーさんはそのまま外側から部屋の戸を閉めた。

さて、四角い部屋の中にはスーツのサングラス男が数名部屋の真ん中にやたらと高そうな机が一つ、そこには高そうな安物の椅子に座つた小太りの男。

こいつが頭か、：

「よう、バーダー。久しぶりだな。お前の話はあとだ。さて、君がセトくんだな。闇市ではコレが世話になつたようだな。」

男はそう言つて脇に立つ男に前に出るよう顎で指した。

キヨドキヨドしながら出てきた男には見覚えがあつた、：

「こいつは俺があの市に売りに行かせてた男だ。覚えてるよな？」

ああ、：　おもいだしたよ。はつきりと。面倒ごとの塊のような男。僕に呪われた品を売りつけようとして失敗し、鱗を盗もうとして失敗し、商品だった幻獣に八つ当たりしたがためにみんな逃げだして、その後片付けを僕がやつた。

「ええ、はつきりと。」

「それじゃあ話が早い。簡潔に言おう。お前のせいで闇市での取引が

できなくなつた。責任をとれ。」
自分の蒔いた種なのか何だか、理不尽な攻めにあつて いるような
気がする。

第三十八話『怒りと罰』

「責任をとれ」

いきなり初対面の男に言われたのはこの言葉。迷惑甚だしい：「取引ができなくなつた？どうしてまた。」

バーダーさんがわきから突っ込む。

「簡単な話だ、騒ぎを起こしてあそこを仕切つてる連中から嫌われちまつたつて話だ。あいつらは無駄なかかわりを嫌うからな。商品の管理もちゃんとできねえようなやつを縄張りに置いておきたくないんだろうな。まあわからんでもない。俺だつてこいつネズミが言い訳しぬけりやとつとと追い出してたな。」

ネズミと呼ばれていたのは件の男。わなわなど震えている。

そうだ！問題を起こしたのはこの男ネズミのはず

「私に責任を取れというのはお門違いなのでは？あれにはあくまで客としてかかわったのですから。」

僕の言葉を聞いた途端社長はあきれた表情をした

「☒ツー！これだからジャップは…チビなだけじゃなくてオツムもいかれてるらしいな、どんくさそうな見た目だしまあやむなしか。」

なつ！こいつ！いわせておけば人をどこまでも…：

思わずこぶしを握り締めた僕を見てバーダーさんはあわてて制止した。

（よせセト君。気持ちはわかるがこの部屋にいるのは私たちとあの男だけではないんだ）

小声で言うバーダーさん。彼の言いたいことはわかる。部屋は黒服の男が壁のふちに沿うように4人いる。しかもご丁寧に腰に拳銃をぶらさげている。

考えもなしに動けば二人ともお釈迦というわけだ。どうにも物騒な連中だ…：

「あの時確かに前は客で幻獣どもを買った。それはいい、だがその直前の出来事が問題だ。ズラトロクにのかつて、注目を浴びて…、あの段階ではまだあれらはお前のものじやなかつた。つまり俺らの商

品でお前が目立つたことになる。十分問題だ。」

まあ一理ある。だがまさかこんなにも絡まれる羽目になるとは

分が悪い言い合いの中顔色が悪くなり始めた僕をにやつきながら
社長男が口を開いた

「まあ責任といつても、死ねとかいうわけじゃない。俺も慈悲深いからな。」

よく言うぜ。

「ほう…それで？」

「やつと聞く気になつたな。お前にやつてもらうのは今度二ユーヨー
クである競売での俺たちの護衛だ。」

はっ？なんか世界観ズレでない？どこの現代人に見習い魔法使い
に護衛任務させるやつがいるんだ？

「この世界ではよくある話だ。脅迫があつてな。それで護衛を増やそ
うと思つてな。なくに毎回死人は1人出るかどうかだ。」

この男！さすがにこの要求には隣にいるバーダーさんも黙つてい
られないようだ。

「ちよ、ちよつと。待つてくれ。その競売つてのはまさか裏の連中の
⋮」

何か思い当たるものがあるようだ

「ああ、そうさ。魔術関連の品をそろえた競売。その中でも金持ちど
もがこそつて集まる隠れた競売」

ツコツコツ

？今何か聞こえたような

「危険だ！マフィアどもの闇取引と何ら変わらん世界だぞ…それを」

コツコツコツコツ

足音だ！扉の外から聞こえる。もうすぐ扉の前につく。

「危険だあ？このジャップが顔出した闇市の100倍は安全だぜ。」

コツコツ！

匂いも嗅ぎ取れるくらいまでになつた。あれ？この匂い、

「だから…！」

バンツ！

会話を遮るように僕らの背後の扉が勢いよく開いた。

「な、なんだ!?」

バーダーさんが驚きの声を上げる。

この匂いは間違いない！けどなんで？ここには僕ら二人しか入れないって最初…

「さつきから聞いてれば。セト君は置いてけぼりだし、理不尽な要求だし。ふざけているとしか思えないわ。ねえ？グラハム・フリンント。」

「エ、エルダ、？』

そこに立っているのは先生だった。

驚くバーダーさんと社長グラハム・フリンントをよそに先生はそのままズカズカと勢いよく部屋に入ってきて僕の腕をつかんだ。

ん？なにか…

「さあ、こんなふざけた連中とはおさらばよ。行きましょう！」

「ま、待て！」

驚きの硬直から戻ってきたと思われるフリンントが声を出す。

だがその声からは嘘が匂つてくる。何か変だ…

「待つ道理がある？え？あんたに言われて止まると思うかい？」

……匂いだ。先生からする『先生の匂い』がおかしいんだ。しゃ

べり方にも違和感がある。もつとよく近づいて、匂いを、

「な、どうしたのセト！』

腕をつかまれたとき。僕と先生との間にはぎりぎり1人くらいは入れるスペースがあいていた。

だが今その距離は鼻がくつつきそうなくらいになつていて。スースと一息吸う。

先生の匂い。けどこれは…血？そうだ血の匂いがうつすら混じつてゐる。そしてその奥に隠れている匂い…こいつは先生のじやない…

刹那に感じたこのことだけで状況の理解には十分だつた。

「あんた…誰だ？」

瞬間女はロープの中に手を突っ込んだ。

何か出す！

そう思つた時には体が動いていた。

僕の右手は女の顔をがつちりと掴みそのまま壁まで押し付けた。

一瞬の出来事に混乱し続けのバーダーが口を開く。

「セ、セト君！何してんのだ！自分の先生だろう」

「あ？何言つてんだよ。こいつは先生じゃねえ。先生の血の匂いまとつて俺を騙そうとしたクズだ。」

吐き捨てるように言う俺と啞然とするバーダー、ことの流れに渋い顔をするフリンントと偽物の顔で苦しむ女、何が起きたか把握できない護衛の男ども。立場は大きく変わりそうだ。

いま俺の手の力は自分で考へているもの以上らしい。女は苦しそうにして壁に顔を押し当てられ続けている。

「質問に答える。先生に何をした。嘘つこうなつて考へるなよ。」

苦しむ女に尋問をする。血の匂いがするということはよい状況とは思えない。前に先生は血があればより精巧に相手をまねれるといつていた。手段は分かつたらしくて問題はその血はどこで手に入れたのか：

「し、してない！何もしてない！」

一瞬で考へている間に女の返答があつた。

だがそれは嘘。

「嘘だな。お前はこのフリンントマヌケから魔法使いに嘘つくとどうなるか教わんなかつたらしいな！」

：馬鹿にするのも大概にしろ！」

頭の中が沸騰してゐる。感情が全部を置いてつて前に出てる。

このイメージは…俺にとつての怒りは…まるで炎のように気が付けば女をつかんでいた手が炎上して いた。真つ赤な炎。見ているだけで火傷をしそうなほどに。メラメラと俺の右手を覆つて いる。

「ア、アアアツ！ガアアーツ！」

果たして人が出す類の声なのだろうか？燃えさかる炎の轟音に負

けず劣らずの叫び声が部屋いっぱいに響き渡たる。

女の頭は火に包まれ皮膚が少しづつ焼けただれ始めている。

ずっとこの状況に驚きビビっていたフリンントがやつとこさ声を振り絞つて部下へ指示を出した。

「てめうーーこのガキを撃て。このクソジャップを撃ち殺せ！」

これで確信犯だ。フリンントとこの女は目的こそ不明だが結託して俺をだまそうとした。

だがその指示を出すのなら女が悲鳴を上げる前にすべきだつたな。叫び声は大きかつた。そのすきに自分の陰に隠れている彼ルキア女に部下全員を気絶させるよう仕組ませるのは簡単だつた。

俺の影から延びる魔力の腕は地を這い、いとも簡単に男たちの背後をとつた。あとは一時的に失神する薬を吹っ掛ければいい。ルキア自身はあまり乗り気ではないようだつたが、状況が状況だ。やらざる負えんさ。

しかもフリンントは氣づいていない。恐怖で焦点が定まらず。燃える炎と叫ぶ女くらいしか目に入つていないのである。

一瞬の間をおいて俺が倒れず部下の返答もないことに気づくと、恐怖で顔を染め上げ椅子の背もたれにしがみつきガタガタと震えだした。

「お、お前。い、今すぐその手をはな、はな、放せ」

ビビつていながらもまだ命令をしてくる。こいつも心底嫌いになつた。

要求通り抑えていた手を放す。だがそれでは終わらない

女の顔と俺の手をまとつていた炎はみるみる女の顔の中に吸い込まれていつた。まるで顔じゅうの毛穴がストローになつて炎を吸つてるかのように。

気づけば焼けただれた先生の顔は崩れ落ち、別の人間の顔が見える。こいつは僕らをここまで案内した女だ。

火が消え呆然とへたり込む女をよそに僕はフリンントの机にゆつくりと近づく。一步進むたびにひい！ひい！と小さな悲鳴を上げる、なんとも滑稽だ。僕を見下した男が一瞬でこのザマだ。

「お前は…」

####

『おい、ジャップ。今日はどんなミラクルを見せてくれるんだ？昨日もすごがつたよなあのどんくささ、まだ豚のほうが動けるぜ。ギャハハハハハハ！』

###

「さつきはずいぶんと言つてくれたなあ。ジャップだんくせえだ、ハイスクールんときの奴らみてえなこといいやがつてよ！てめえも俺を侮辱するんだな!!」

ずかずかと進み奴の胸ぐらをつかむ。

男のひいいという情けない声と同時に背後から再び悲鳴が上がつてきた。

「あづい、あつい、あついあついあああああああ…いやあ。ああっ！」

頭を搔きむしり苦しみもだえる女。

「あいつに何をしたんだセト君！」

混乱のさなか状況をやつと理解し始めたバーダーさんは再び混乱に飲み込まれかけているようだ

「なあに簡単なこと。火を頭の中に移しただけです。でもご安心を、本当に燃えてるんじゃないですから。彼女が頭の内側が燃えているようを感じているだけ、一種の幻覚にすぎない。まあこのままいけば精神が擦り切れて自我が残るかどうか。」

頭の中が燃える感覚、あの女にとつては表面で燃えているほうが幸せだったかもしれない。

「さてと、やつとあなたの番だ。先生に何をした？」

女にしたものと同様の質問を投げかけるとフリンントは意外な反応を見せた。

「そ、その前に。彼女の火を消してやつてくれ。あの変装は俺の命令だ。頼む！あのままじや死んじまう。」

!!!

クソッ！こいつがただの悪党なら、女を捨てて命乞いをしたのならばここで躊躇なく顔面にでも火をつけていただろう。だが arousこ

とか部下の女を助けてくれと頼みやがった。

恐怖でべそかいてるこいつに部下にかけるやさしさがある…

「そんな感情を持つてるんだな。 そうか…だつたら、なんで、なんでその気持ちをお前らが傷つけた先生に分けてやれねえんだよ！」

僕の怒りが最頂点に達しフリンントに殴りかかるうとしたとき
バタンッ！

背後から勢いよく響く扉の音

今度は違和感なく香る美しい色の香り

振り返るとそこには先生がいた。僕の先生が

第三十九話『取引と脅迫』

意外な展開

僕の頭の中で先生が無事であるという選択肢は存在してなかつた。だが、よく考えればわかること。キレた僕ごとに手も足も出ない連中が先生をどうこうできるはずがない。

だが今はそんなことを考えるより、先生の無事に安堵するばかりだ

「先生！」「無事で、」

パチーンツ！

部屋に響き渡るほどの音

駆け寄った僕の頬を先生が勢い良く叩いた。

先生の目は怒っている。てか見なくとも、にじみ出るその雰囲気からわかる

「先生！な、何を、」

かなり痛かつた。涙目の僕に先生はグイっと顔を近づけた

「自分が何したかわかつてゐる？」

「だつて僕は先生が！」

「確証は？妄想でしかなかつたわけでしょ。」

ウツ：

そういわれるとぐうの音も出ない

「魔法が感情に左右されやすいこと、そういった時の魔法がいかに危険か、魔法で他人を傷つけてはいけないこと、今までずっと話してきたことよね。」

「ハイ…」

「ま、とはいえ、」

そういつて先生はいまだ苦しみ悶えている女のもとによりスツとその顔を撫でた。

すると今までのこの世のものとは思えないめき声が嘘のように止まり、女は氣絶してしまつた。

むしろ眠つてゐるに近いかな。どこか安らぎが香つてくる。

「ここまでやれば勘違いもするか。」

そうしてやつと先生はフリンントのほうを見た。僕に殴られる寸前にまでなったこの男は哀れにもまだ震えは止まらず、なんとまあ高そうな椅子の上で今にもチビッテしまいそうだ。そういえばすっかり忘れていたがネズミはどこにいった？たしかフリンントのわきに縮こまつてたようだ。

「久しぶりね。フリンント。」

「や、やあ、エエエルダ。げ、元気そうじやないか。」

どうやら二人は面識があるらしい

「一体絶対どうやってこの部屋に？許可を与えるないと開かないはずじゃ、、、」

「あんな中途半端な魔術で隔たりを作っている氣でいるなら新しい魔術師を雇つたほうがいいわね。」

先生圧倒的優位。なんでか知らないがフリンントは先生にいい思い出がないようだ。あからさまにビビつてている。

「それにしても、ずいぶんとろくでもないことを企んでいたようね。私のふりをした女を近づかせ、薬なりなんなりで人質としてセトをとり、護衛の一件の協力をさせようっていうんだからね。ま、今回はあなたがセトを甘く見すぎたようだけどね。」

「ぐ、」

やつと会話の切れ目が見えた。

完全に置いてけぼりなバーダーさんがやつと口を開いた

「エルダくん、来てくれて助かつた。私はフリンントに余計な借りがあるもんだからね。お弟子さんを危ない目に合わせるところだつた。」

「まあ、こうなることは薄々、ね。」

「さ、帰りましょう！」

先生は僕らを連れて部屋に背を向けた。

「ま、待つてくれ！わ、悪かつた。俺が悪かつた。バーダーの件もチヤラにする。君たちに危害を加えたりはしない。約束する。だから話だけでも聞いてくれ。頼む！」

どうしてか、この男から伝わるのはすさまじい必死さだった。それこそ命を懸けてでもといった具合だ。人間そうコロコロ感情を切り

替えるほど便利にできとはいえない。

今までとは違つて嘘のにおいもしない。

先生も異様なまでに必死なフリントに思わず振り向いた。

「あんたがこんなに必死になるのなんて、私に命乞いした時以来からね。少なくとも必死さは伝わった。まあ確かにセトがあの時はしゃぎすぎたのも事実。いいわ。聞くだけ聞いたげる。そもそも話にあつたオークションで死人が出るのはもう60年以上前の話。あんたたちみたいな連中も世代交代して今じやいざござすら珍しいくらいじゃない。それが何でまた魔法使い二人と魔術師一人つていうコストに見合わない護衛を欲しているのか…」

結構そういう世界にも先生は詳しいのか…

しょせんおぼっちゃま君だつた僕はそういう世界には縁などなかつたし、興味もなかつた。だが今は違う、落ち着いてこの部屋を見てみれば、面白いものが飾つてある。魔力を秘めた代物がごろごろと。もしフリントたちの言つているオークションとやらでそれらが手に入るのであればぜひ見てみたい。何か僕を引き付けるものがそれにはあつた。

先生が話をしながらこつちを見てくる。なんだろうつて思ついたら耳元でささやき声が聞こえた。

「今セトが考へてることエルダはお見通しみたいよ。フフフ…あんないに怒つてたはずなのにもう別のこと熱中してる。私何でも興味をもつあなたのそういうところ好きよ」

姿は見せずとも僕の影から僕だけに届く言葉。キルアが真実を伝えてくれた。

「なんだかんだでセトは興味持つと突つ込むタイプだからね。エルダも止めるのはあきらめ気味。だけど効能のわからぬ薬をいきなり指ですくつて舐めちやうような弟子をほつとくほど、放任主義じやないわ。実質決定よ。行くこと自体は。ただ、エルダ自身もこの一件は不自然に感じてる。どう考へても回りくどいしね。」

そうこうしてるうちにフリントは重い口を開けた。

「あんたとは、正直言つて仲良しこよしでできるとは思つてなかつた。

だからこそその人質のはずだつた。バーダーには貸しがあつたし、それを使うべきを使えばいいつて。」

「だから、私が聞きたいのはなぜそこまでして私たちを呼びたかったのかつてことよ。」

「うう、、それは。あまり外で話すなよ。いいな、、よし。実は先日このオークションに参加することが決まつた数日後のことだ。私のもとに手紙が来た。文通やるような仲のやつはいないし。かといって俺は仕事の連絡に手紙は使わん。不信ではあるが開けてみたら封の中から紫色の煙が出てきてその煙が顔のような形になつてこっちを見て言つてくるんだ。『貴様の幸福を競りの夜更けに取りにいこう』つて。それだけ言つたら消えちまつてさ。もつかい封の中確認したら写真が入つてたんだよ。」

そういうつてフリンントは少し震える手で懐から写真を出した。

三人一緒に覗き込んだそれには、さつき僕をだました女が子供を抱いて笑つている姿が映つていた。

「俺の妻と子供だ。」

「えつ!?」

先生とバーダーさんは信じられない！みたいな目でフリンントを見つめている。

「い、いいだろ。俺だつて人並みの幸せだつて欲しい。」

まあその幸せを密輸で得てるんだからなんとも、、

「な、わかつたろ。競りは当然オークションのことだろうな。それでこの写真。狙われてるんだよ、二人の命が」

第四十話『嫌な匂い』

結局僕らはそこにいた。フリンントの護衛？として件のオークションに。

当日までわずか3日と短かつたために準備にはそこそこ苦労した。まあ主にバーダーさんが自分の弟子たちとの折り合いをつけるのに苦労していた感じだったが、結局三人とも一緒に来ることになった。まあ、マーシエンさんと一緒にいれるつてのはラッキーだ。

思えばもうすぐ20の誕生日、、なんだか波乱の誕生月だ。

護衛とは言えオークションが始まらなきやそれまでは自室に籠るフリンントとその家族を見守るだけ。

一応招待客全員にホテルの一室が与えられている。VIP待遇つてほどじゃないが”いい客”の枠内ではあるようだ。

「どうかしたのか？」

隣に立つ男、レンフレッドさんが僕に声をかける。彼はバーダーさんが連れてきた学院の友人らしい。

当日になつて顔を合わせたが、先生とも知り合いのようだ。

オークションと悪徳商売。そんなものが絡む一件に友人を巻き込むとはバーダーさんも大概だな、、

「いや、何でもないです。ま、嫌な匂いばかりだなあつて。」

「ああ、そういうえば君はバーダーの弟子たちと同じ竜舌蘭の花だつたな。魔力や感情を匂いで感じれるつて」

わざわざなぜそんなことを確認したのか。その理由はおそらく、、「私は、あなたの匂い嫌いじゃないですよ。ちょっと嘘くさいけど根はしつかりしてるし、大切な人もいるみたいだし。そういうの好きですよ私。」

レンフレッドさんは自分の思つていた以上に心を読まれたようで少し驚いた顔をしたがすぐに興味が無いかのように平静を装つた。「しかし、君のようなまだ若い魔法使いをこのような場所に行かせることは、、エルダのやつも随分大胆なことをするな。」

本人がいなければ何言つてもいいわけじゃないと思うが、先生は今外でバークレーさんと今後の動きについて別室で話し合っている。

バークレーさんの弟子3人は僕らと一緒に部屋で駄弁つてゐる。

どうもレンフレッドさんは自分の意見というか我が強いタイプでそれを他人に押し付けやすいようだ。

「もしも、君が今的生活に、、」

その先は予想できる。僕はさつと手を挙げ遮つた

「僕は今の生活が幸せです。素晴らしい先生のもとで魔法を学び、志を共にする友人もいる。あなたの手を借りるつもりはないですよ。」

「、、フツ そうか。すまなかつた。余計なことだつたな。だがもし何か困つたことがあれば、私も頼つてくれて構わない。ここに来てくれば話し相手くらいにはなる。」

そう言つてレンフレッドさんは名刺くらいの紙をくれた。そこにはロンドンのどつかの住所が書いてあつた。

「ありがとうございます。いずれお邪魔しますね。」

こんな駄弁りを続けていたら先生たちが戻つてきた。

「レンフレッド、すまないわね。うちの弟子が迷惑かけてないかしら？」

「いや、素晴らしい弟子を持つたなエルダ。ところで話のほうはまとまつたのか？」

二人の会話に割り込むようにバークレーさんが入ってきた

「そこからは私が話そう。今の時刻だが午後の7時半。オーラクションは9時に始まる。実際オーラクション自身は代理人を立てて参加するので無視でいい。それより問題なのは、、」

みんなの視線が部屋にいるフ林ントの『家族』に行つた。

母親はともかく問題は娘。名はエリザ、15にしてすさまじいわがままな上に乱暴者。なのにフ林ントは親ばかで何でも与えてしまう。それで余計わがままに拍車をかけている。見た目こそ青い髪に白い肌と美人なのが、、、

「彼女がオーラクション見学をご所望なのだ、、、フ林ント自身はほかの客と話があるらしくてこの部屋にはいられない。当然付き人として

母親の彼女もついていく。すると当然エリザ嬢は別行動になる。んで、フリンントは極力彼女の要求をかなえてくれとのことだ。」

勘弁してくれ、、、部屋にいる全員がどよーんとした空気を匂わせる。

先生が続ける

「だけど、そうなれば危険は倍増。フリンントの護衛もしなきゃいけないわけだし。それで、まとまつたのはオークション開始前の出品物の鑑賞にお嬢さんを連れて行つて、実際始まつたらこの部屋に缶詰めつて作戦。というよりこれが妥協点ね。女の子つてのもあるからお嬢さんにつけるのは、アエラさんとマーシュエンさん。そしてそれを遠巻きにセトと柿崎君と、、、レンフレッド。頼むわよ」

「当然だ。任せておけ。」

「フリンントと奥さんの護衛は私とバーダーでするわ。」

「各々質問はあるかな?とりあえず予告通りならオークション前後が一番危険な時間だくれぐれも気を抜かないように。特に子供たちは正直つてこんなことの巻き添えにはさせたくないなかつたほどだ。何かあればすぐ我々大人を頼つてくれ。」

バーダーさんのお願いは非常に重かつた。それは当然だろう、自分の弟子になつたばかりにこんな危険なところに連れ込んでしまつた。彼なりに罪悪感は感じているはずだ。

「それと、薄々感じてはいるだろうが、会場内では魔法や魔術の類が一切使えないようになつてゐる。くれぐれも注意してくれ。では!」

逆に言えば犯行は物理的なものになるということだ。銃か、ナイフか、はたまた毒か、、、幸い魔法が使えないとはいえ鼻は効く。しつかり見張つていればまず危険はないだろう。しいて言うならば参加している客の半分近くがろくでもない嫌な匂いを発してゐるため。危険人物を絞りにくいつて事ぐらいだろう。

解散して自分の持ち場につく、悪夢が始まるようで気分は重苦しめた

第四十一話 「接敵」

ニューヨークの某ホテル

全部一日丸つと借り切つて行われるこのオークションは、普通じやない。

参加者は有名企業の社長補佐から密売の大手まで。キナ臭い連中が多い。

オジヨウサマの護衛でもなきやこんな連中見ることはないだろう。護衛といつても僕と柿崎は遠巻きに眺めているだけ。オークション会場のホール部屋の前で今回出品される品々が並んでいる。我儘お嬢様の『お願い』をかなえるべくここまで来たのだが

「な、見ろよあのメガネの男。あいつが渡した名刺。シラカワカンパニーの人間だぜ。」

「えっ!?

何気なく柿崎が耳打ちした言葉は驚くべき内容だった。

さつきからずつとあれは何やつてる人だあれは犯罪者だつて駄弁つてたのだがこれは意外だ…

シラカワカンパニーのは従兄のショウ兄さんの会社だ。父親から受け継いだ家具貿易会社をわずか一代で世界的な貿易会社にまで育て上げたものなのだが、その裏には魔術とかがあつたのか…まあ本人は自覚してなさそうだし、魔術なしでもきっと大きな会社にしだろう。

だが、今はそれよりその男に顔を見られたら今の僕の生活がショウ兄に知られる方が問題だ。だが彼は名刺交換と雑談に夢中でエリザベスはもちろん私にはまったく気づいていないようだ。

「何かあつたのか? 顔色悪いけど…」

さすがに柿崎も心配してくれた。

「あ、ああ。大丈夫だ。ところでレンフレッドさんは?」

「あ、なんか用があるつて。すぐ駆け付けるところにいるからつて

言つてたけど少しもある人の頼りないかもな。目元怖いけど。」

「たしかに……匂いはすごいいい人だけど、あのぶつきらぼうな態度と目つきで損してる。」

さて、と腕時計に目をやるとオークションがもうすぐ始まる。エリザお嬢さんにそろそろ帰るよう言わなければな。

僕らが駄弁つてる最中お嬢様はずつとアエラとマーシエンさんの監視のもと展示品を見てはしゃいでいた。

柿崎がアエラに目をやる。

さすがに何か月も一緒に生活してるだけあつてアイコンタクトだけでやり取りができるらしい。

「お嬢様。そろそろ時間ですよ。部屋に戻りましょ！」

アエラがそう告げるとエリザは不機嫌そうに

「えー！ オークションも見たい！！」

と我儘を言い出した。だがすぐに

「いいから戻る。口答えなし」

押し強いアエラによつて引っ張られていくことになつた。マーシエンさんは……引っ込み思案なのだろう。

さてこのまま部屋へ何事もなく……とはいかなかった。

ぶつくさ文句を言うエリザとその周りをそれとなく囲む僕らとフレントの部下

（彼らは誰の部下かわかるようにそれぞれ固有のバッヂをつけている）。

スツと部下の一人がエリザの脇をすり抜けた。

その瞬間！

バタツ！

!?

エリザが床に倒れてしまった。

混乱する護衛たち。アエラもマーシエンさんも……あたりは騒然とした。

だが、僕と柿崎は何が起きたか理解できていた。少し遠巻きであつたことと、持ち前の才能のおかげで

「セト。『見えた』か？」

「ああ、匂つた よ。」

僕ら一人の目線の先には先ほどの近寄った部下の男

「お嬢様！お嬢様！」

心配そうにエリザを抱えているが、彼からは余裕と嘲りしか匂つてこない。

そもそも距離をとつて監視するはずなのに近づいていくことがおかしい。

さらに一瞬の出来事を僕ら一人だけは見ていた。

男がエリザの脇を通る瞬間、奴の陰からエリザの首元にほんとに一瞬だけ魔力を帯びた手のようなものが伸びていた。さしづめ魔術の手刀といったところだろうか。

気づいたら、制限されていたはずの魔法が使える。僕の影の中に潜ませていたルキアも空気が変わったのを感じているようだ。

ということは魔力を抑制していたものが壊れたのだろうか？

そうだとしたら共犯がいる……

「しらじらしい奴だな。だけどどうする？ある意味人質とられてるぜ。」

「よし、気づいていない体でひとまず部屋まで連れて行こう。てか早く引き離さないと。」

柿崎は僕の提案にこくりと頷き一緒にエリザのもとへ向かっていった。

「どうしたんですか？」

「ああ！セト！お嬢さんが突然倒れたの！ね、ね？どうしよ！」

アエラがすぐに気づいて声をかけてきた。マーシエンさんは見ているだけでおどおど。だが無理もない。

「とりあえず部屋も近いしまーシエンさんとアエラの二人で彼女を部屋へ。」

「君、あの時いた奴だね。すまないが彼女たちに手を貸してやつてくれ。」

そばにいたガタイのいいフリントの部下に声をかける。（彼は僕がフリントに呼びつけられたときにその取り巻きにいた）こいつはとり

あえず（フリントへの忠実さでは）信用できる。とりあえず彼女を、怪しい男から引き離すことが重要だ。

それもできるだけ自然に…

「あ、ああ。おいすぐ連れてくからあんた代わってくれ。」

「は、はい！そ、それじゃあ自分は持ち場に戻ります」

そういうつて部下の男はエリザを受け取つて抱きかかえるようにしてアエラ達とともに部屋向かつた。

ほかの部下たちもぞろぞろと後を追う。

肝心の奴はその場からすつと離れようとしている。幸い匂いは辿れそうだ。

（いや、現場に何人か残つて調査したりとかはいいのか？）

「柿崎。君は彼らに同行した後すぐにレンフレッドさんと先生たちを呼んできてくれ。早急にだ。私の使い魔もつけさせよう。人探しはばつちりだ」

「だがあんたはどうするんだ？」

柿崎の疑問は当然だ。

「私はあれを追いかける！」

「な！馬鹿言うなよ。一人でどうこう出来るわけが…!!」

僕の目を見た柿崎の顔色が変わった。

「僕は本気だ、なあに人殺しをしに行くわけじゃない。それに奴は匂いだけ残して逃げてる。終えるのは僕だけだ。」

「で、でも」

「今は彼女たちの安全の確保が重要だ！それにはお前の目が必要なんだよ。レンフレッドさんと合流したら僕の後を来てくれ。」見える

“ような痕跡を置いていく。”

「…わかった。でも無茶はするなよ。その影の中の相方さんの話も聞いてやれ」

ルキアを指してようだ。彼女の意見も聞いて動け…か。

僕は無言で頷きそのまま件の男の後を追いかけた…

第四十二話『渦巻く謎』

匂う……これは奴の魔力の道しるべ……

脅迫犯を追っていた僕の前に現れたのはホテルのカーペットの上にこぼれている魔力。

まるでお風呂から上がつてちゃんと髪を乾かさないでいたまま歩き回ったみたいに……

「セト。向こうは気づいてるわ。追いかけているのがあなた一人だつて。そしてこの先の部屋で待ち構えてる。あんなことした奴だよ絶対戻だよ。だいたいセトはあいつを追い詰めてどうするのさ。魔法で戦うなんて漫画の話だよ」

そんなことわかってる。僕だつて別に機敏なわけじやないし。匂いでわかつてもさつきみたいな攻撃はよけれない。

だけど

「今このタイミングで引き返すわけにもいかないし相手は僕が目当てみたいだし、先生に迷惑かける前にけりをつけられれば全部丸く收まるだろ。そのためには多少のムチャはするさ。ま、危険なのはわかつてる以上対策はするけどね。いいかよく聞け……」

そうこう話しながら進んでいくともう目的の部屋の前だつた。

ホテルの扉ってのは防犯のためか微妙に軋んだりする。ここ扉もそういうやつでキイーツという不愉快な音とともに電気のついてないベッドも何もないだだつ広い部屋が目の前に現れた。

とりあえず目に付くのは入り口のちょうど真正面の一面窓。壁一面丸つとガラス窓だ。そして部屋の真ん中に置かれたイスとそれに座る等身大の人型マネキン。この部屋にはそれしかなかつた。部屋の広さは家具がほとんどないうえに高級ホテルのスイートルームなだけあつてなかなかに広い。だが暗闇の部屋に窓の向こうの街の明かりが入り込む何もない空間は高級感など忘れてしまうほどに不気味さを漂わせている。

恐る恐る、震える足を踏み出して部屋へはいると

「安心しろよ。何も君を殺しに来たわけじやない。少し話がしたいん

だよ」

ああ……なんで僕は無駄なムチャをしたんだろう。思い返せばエリザを気絶させたときの魔術だつて見たことも聞いたこともないものだった。僕はあまりにも彼への対策において無知なのだ。

どこからともなく聞こえる男の声を聴いた瞬間、僕は後悔した。その声はまるで冬の朝の水道のように冷たくて、痛みを伴つて凍みる……嫌な声だ。

ハアハアハア……自分の呼吸が乱れていくのがわかる。だけどどうしようもない。こんなのどうしろつてんだよ。僕に……（セト！しつかりしなさい。いい？よくこの香りをかいで。）

頭に小さく響くるキアの声。同時にミモザのような優しい香りが漂ってきた。

そういえばルキアには前にミモザの花を見せてあげたつけな。彼女なりに僕を手伝つてくれているのか……

（私は影を縫つてセトの作戦通りにやるから、セトも……ね？大丈夫。私がついてるから。）

（ありがとう。）

冷汗は止まらなかつた。でも気持ちはほんのちよつとだけ落ち着いた。それで十分。レンフレッドさんや先生たちがここにつくまで足止めしていればいいだけ。簡単な……ことだ

「私に話？申し訳ないですけどね。私はあなたみたいな人知りませんよ。」

「だが私はよく知つてゐる。セト君君のことはほんとによく……ね。」不気味な雰囲気はそのままに部屋中央に置かれたマネキンの裏からフードを被つた人間が出てきた。

顔は見えないが声からしておそらく男。だがそんなことはどうでもよかつた。外の明かりが差し込み男の黒いローブに反射する。照らされたそのローブ。そして漂う香り

「お前は……!?まさか」

「あの扉は身を乗り出すほど美しかつたかい？」

!!この男は僕が魔法を使えるようになつたあの扉を開いた男だ！

間違いない。当時はおいなんてわからなかつたけど今思い返すとあの時感じていた不思議な感覚と今奴が放つ不気味な何かは一緒だ。魔力への嗅覚がより敏感になつたからこの感覚を恐ろしいものと認識できるようになつたのだろう。

思われぬ遭遇にせめて顔を見ようと僕はもう数歩部屋の奥へと進んでみたが男はフードを深くかぶついてなんとか口元が見える程度だつた。

「う～む。その顔…どうやら思い出してくれたようだね。う～ん。そうでなきや！せつかく私のお気に入りにしてあげようと思つてるんだから…」

お気に入り？まるで舞台役者かのように大げさに両腕をめいっぱい広げるその様子は胡散臭さたっぷりだ。

果たしてそんな奴のお気に入りが安全な意味になるだろうか？なるわけがない。

「お気に入り？なんです？首に鎖でもつけて犬の代わりに飼おうとも？」

「ご名答！」

えつ…？

そう言つて男が笑みを浮かべた瞬間。部屋の隅から黒い滑らかな動きをしたロープのようなものが飛び出してきて僕の両腕両足に縛りついてきた。そのまま紐たちはピンと張り。僕は立つたまま両腕を真横に引っ張られ足も大股開きになり所謂大の字になつていた。

「う～ん。やはり君はあ私が見込んだだけはあるバカだよお」

完全にやられた。あいつは僕の動きを読んでたんだ

「だつてちょっと過去のこと仄めかしただけで、ちようどぴつたり私の予想していた罠の位置に立つてくれるんだもん。いやあ。かわいいね～君は本当にすばらしいよ。私の思い通りに動いてくれるなんて最高だよ。」

捕まつたとたんこの男の言動や行動がどんどん怪しくなつてきた。動きもやたらクネクネしてるしちよつと悪寒が…でも状況はまずい。いまならまさに煮るなり焼くなりご自由につて感じだ。

「アハハハハ！怖がつてる。まあでも安心しなよ。殺したりはしないから。少しヤバめなお薬と魔術でしばらくいうこと聞いてもらつて私の実験に使うだけだから。」

そう言つて男はどこからともなく注射針を取り出した。どんな薬物が入つていようが関係ない。刺されたら終わりだ。

「ホントにこんな好みの子を手に入れられるなんてなあ。鱗盜ませたり魔術師さらつたりした甲斐があつたよ。」

あの一件の首謀者だつたのか…

「なんで…なんで私をとらえるためにここまで回りくどいことを？なんなら扉の時にできただろう」

「なあに実験にちゃんと使えるものかどうか試しただけだよ。そして合格した。いつまでもあの魔法使いの手元に置いておくわけにはいかないし。僕が君を管理することになつたんだ。」

そういうながら男はぐつと距離を詰めてきて、その顔は鼻先がついてしまうほど近かつた。

気づいたら背後の扉は締まつており当然助けを呼べる状況でもない。

ここまで近づいていればいやでも男の吐息もかかる。冬の深夜の風のように冷たい息…まるで生気がない。

「それじゃ…お楽しみタゞイム」

そう言いながら男は注射針を近づけてきた。中には銀色に光る液体。それに当たりの景色が反射している。

… !!!

そこには写つていた！合図を待ち暗闇に潜んでいた僕のパートナーの姿が

「つと…そのまえに。せつかく僕が任されたんだ少し楽しんでもいいだろ？ねえ？」

無視だ。タイミングを見計らえ。ルキアには目で十分伝えられる。奴が注射針を僕に刺そうとしてその視点が注射針に集まつた瞬間。そこを狙つて不意打ちをする。というかそれくらいしかチャンスが…!?

「んぐ・： ん!!」

それは突然の出来事だった。

僕は動けず考えを巡らせていた。だからこそそれに反応できなかつた

「ん…： はあ。なかなかいけるじゃん。その顔も最高だよ。何が起きたかわかつてないけどどろどろな感じ。人間だれしもキスされたら意識しちゃうよね、ああかわいい。もう一回ぐらいいいよね？」

信じられなかつた。しかも舌も入れられた。されたことも嫌だつたが、一瞬でもこいつが望んだような惚けた顔になつてしまつたほうが何倍も悔しかつたし。自分が嫌いになりそつた。

この男は自分の欲望のためにここにいる。しかもそれはすば抜けで危険な… 身動きが取れないうえにまだ男の唇は離れないもはや猶予はなかつた

（ルキア！ いまだ！）

目くばせをしルキアは手にもつ瓶のふたを開けた。あの瓶は闇市でどつかのネズミからかつぱらつた「インドアファイツシユ」の入つた瓶。よし。計画通りだ。

ホントは恨み晴らすようなことに魔法や彼ら隣人の手を借りるのはNGなんだけどどのみちこの状況から逃げないといけない。

ポン！

「んはあ、んあ？ 何の音だ？」

もう遅いインドアファイツシユは僕の魔力の影響を受けて動いてもらつてる。これも一種の契約なのだがまあ今は詳しく考える必要はない。男が音のしたほうを振り向く。それを想定して部屋の上部を移動して死角に回る。そして…

コトン

… 部屋のカーペットの上に注射器が転がり落ちた。それを抑えていた指と一緒に

「な、なんだ？ これは！ ぼ、僕の手があああ！ ああー！ あ！ なんなんだ

よこれは。痛くもかゆくもない。で、でも手が、手のひらだけがなくなつてゐる。」

すぐさま魚たちは僕の拘束も食べてそのまま影からゆつくりと現れたルキアの手元の瓶へ戻つていった。

「な、何をしたんだ？君は？それにこの馬女はどこから出てきた？ん？」

男は問い合わせようと僕のほうへ歩みを進めて、初めて自分の右足の踵がなくなつていてことに気が付いたようだ。

そのままバランスを崩し床に倒れこんだ。

「これも全部君が？セト君。君は最高だなあ。まさか僕を出し抜くぐううう！」

話している途中にルキアのきつつい蹴りが決まつた。そのまま男は窓際まで飛ばされ口から血を吐きながらうずくまつた。

インドアファイツシユは捕食したものに痛みを与える出血もさせない。本人が気づく前に取り返しのつかないところにまで食い続け追い込む。そして肉塊同然になつても捕食された側は死なない。死ぬときは両目を食われた時だけ。だからこいつに捕食されたものは最後に大きな口を開けて近づいてくる姿を見て恐怖しながら死ぬという。まあ情報を聞き出すためにもそこまではしないが動けないように踝は食わせた。

そして……

バンツ!!

そんな勢いで開けたら壊れちゃうだろつてぐらい勢いよく乱暴に背後の扉が開き

そこには先生にレンフレッド、バーダーさんにその弟子のみんな。先頭には柿崎がいたのでおそらく彼の千里眼は僕の残した痕跡をばつちり見つけたようだ。

「さて、形勢逆転つてやつですね。おとなしく……」

「アハハハハハツ！ハハハハハ……ハアハア。まつたく君は」

男が顔を勢いよく上げフードが取れた。

「最高だな。」

だが取れなかつたほうがどれだけよかつただろうか。背後からマーシエンさんとアエラの息をのむ音が聞こえた。そりやそうだろう。顔が半分ただれて左目のあつた場所がぐずぐずに崩れ落ちていた。口元だけは無事なようだがその顔は到底…：

あれにキスをされたのか…：思い出しだだけで吐き気がしてくる。

「ああ…：愛しの君にそんな顔してもらえるなんて…：僕は君の記憶にずーっと残つていられそうだな。んああ」

「ふざけたことを抜かしていないのでおとなしくしろ。お前にはあとでじっくりと話を聞いてやる」

レンフレッドさんがしかめつ面のまま銃を抜き男へ近づいて行つた。

僕はそれと交代するようにゆつくりと後ろへ下がる。

男はそれを聞くと背後の窓ガラスに無くなつていないほうの手を置き不気味にほほ笑んだ

「話？レンフレッド。お前に話すことなんか何一つないなあ。それに結構楽しんだし。」

踵のない足のまま無理やり窓に寄りかかりながら立ち上がる。全員が警戒して一步下がつたそしてその瞬間。

パリイツン!!

背後でガラスのようなものが割れる音がした。振り返ると部屋の外にかなりの量のガラス片が散らばっている。そしてほぼ同時に僕の頬を冷たい風が撫でていった。

慌てて振り返るとそこに窓ガラスはなかつた。あるのは大きな窓枠だけ。そして…：

「セト君。愛してるよ。」

氣味の悪い笑顔を僕に向けたまま男は窓枠の外へ身を投げた。その目は最後まで僕を見つめていた。

第43話『なにもわからぬままに』

夜が明けた

あの後とりあえず皆それぞれ帰路につき現場の後処理は学院が受け持つことになった。

男の死体はあの時慌てて下を覗き込んだ僕ら全員が目撃していた。翌日家に来たバーダーさんの話では顔こそぐちやぐちになつて判別できなかつたが、持ち物や指紋などから過去に学院に出入りしていた魔術師であることが分かつたらしい。とことん自分たちに落ち度があることを謝罪していた。

他のことはまだ…：

「あいつは”彼ら”って言つてました。したら彼らは何人かの集団である可能性が高いかと…」

学院や先生にはあの時のことを唇を犯されたこと以外全て話した。「私たちも全力を挙げて調査をするつもりだ。すまないが待つていてくれ。」

結局有力なことはわからないままバーダーさんは帰つていった。それと入れ替わりでアドルフさんがやつてきたのは少し意外だった。

先生が僕にお茶を出すように言うのを
「手短にすみますので」

と断り、つづけた

「以前からそちらで保護していただいていた幻獣たちなのですが、やつと引き取り手が見つかりまして…あ！そんな怪訝な顔しないでくださいよ。私やレンフレッドとも昔からの知り合いで。世界各地にいくつも土地を持つていて幻獣を保護・研究をしている魔法使いなんですよ。名前はラブ。ラブ博士です。」

学院にそんな魔法使いとのつながりがあるとは意外だった。なんせ人に教える立場である大人たちが反社会勢力に金を借りてるようなどころだ。バーダーさんみたいにね。

「それで？どう言う手はずなの？」

先生はその名前を聞いて少し警戒を解いてる。なるほど、名は知れてるつてわけだ

「実はもう準備 자체はできてまして、明日にでも連れていいけるんです。あとはどこまで連れて行つていいのか、そちらで決めてくれれば…」

「そうか…長くもないが彼らともお別れか。

「まあ、せかしはしないから…」

「いえ、今日中にご連絡させていただきます。」

こういうのは長引くほど決めづらくなるものだ。実際先生にも負担になつてるし早く解決しなきやならない。アドルフさんもわかつてくれたようだ

「わかりました。それでは失礼します。また明日お会いしましよう。」

彼がかえつて僕は一人一人に会いに行つた。
彼らと話して…

翌日の昼にはアドルフさんたちがやつてきて皆を連れて行つた。その中にはラブ博士という人物もいた。魔法にかかる人にしては珍しく透き通るほどに心の香りが漂う人だつた。嘘も偽りもなくただ彼ら動物たちへの愛に満ちそして、ひどい悲しみをまとつた…彼の過去に何があつたのか、そんなことは聞けなつた。だが彼ならば信用できると瞬時に思える。そんな人だつた。

日も暮れ始めたころには先生の家はずいぶんと静かになつた。

なんたつて僕と先生とルキアとピュティアしかいないのでからね。「結局その子以外みんな引き取つてもらつたのね。」

「ええ。僕はどうにも生き物を育て暮すことを甘く見ていたようです。彼らにとつて合わない環境での生活は結局ストレスになつていった。僕じやそれはどうしようもできないつてわかつたんです。彼らと話して。みんなが僕に好意的に接してくれる一方で心の一番の中心では故郷を思つてました。そんな彼らをここに縛るわけにはいきません。そう思つたからこそラブ博士に任せたんです。」

「まあ、それもまた一つの成長つてことにしてあげる。」

ピュティアは生れすぐ怪しい連中に捕まり育てられてたせいで故郷を知らなかつた。母すらも…

だから僕は彼女と暮らし続けることにした。どこかで共感めいたものを感じていたのかもしれない。

だが今はそんなことはどうでもいい。

改めて家族の一員になつたこの子を歓迎しなくては。

夜の帳が下りる

今日はいつもより長く部屋に灯が灯つっていた。

だからこそアレは来たのだろう…

暗闇に鋆びた鉄の呪いが木霊する

第六章【迎冬編】

第44話「祝い事」

自分の誕生日をめでたいと思えるのはあとどれくらいなのだろう。きつとこんな事考え出すようになる頃が終わりなんだろうな。もう二十か。

みんな節目だという。人生の大人への一歩だと。今までは子供で突然大人になる不思議な節目。そりやそれが日本だけの文化だつてのはわかつて。でもどれだけアメリカにいても家族は日本人だつたんだ。僕にとつてこの誕生日は特別なんだ。

15も超えたころからか。誕生日をこの上ない楽しみとして感じられなくなつた。クリスマスもそうだ。家族が突然一人になつたとき……それは僕が15になるそんな日の出来事だつた。

二人は僕の誕生日を祝うため忙しい仕事の中合間を縫つて帰るため列車に乗つていた。僕はニューヨークのあの家でそれを待つていた。

そして日が変わつても二人は帰つてこなかつた。よくは憶えていない。ただおぼろげに父と母の乗つた列車の横転する映像がテレビで流れていたのを見た気がする。

訃報が届いたのは翌日だつた。後で聞いた話だが二人は胴を切り離された状態で見るも無残な状態だつたそうだ。届いた遺品はあのネックレスだけ。

だからこそ、僕は祝い事は避けてきた。爺やもむりに誕生日を祝うことにはなつた。少しだけ豪華な夕食だつた。それで満足だつた。

親の命日だというのに祝われて喜べる人間がいるだろか。

“でも今年は特別だから。”

目が覚め朝日とともに僕の横で眠つていたルキアはそういつた。
寝言だらうか？

ベッドのわきに置いてある箱を見ながら昨晩のことを思い出した。

そう、あれはピュティアをかまいつつ話題が僕の誕生日に移り始めたころのことだつた。いつもより僕たちは夜更かしだつた。

「セトは明日誕生日なのよね。そしたら明日はセトのお祝いだね！」

ルキアのこの一言にはどうにも閉口した。

僕はあえて先生に誕生日は教えていなかつた。祝われたくないから。

僕の感情を読み取つたルキアは申し訳なさそうな顔をしてた。

「知つてたわよ。でもそつちが言わない以上私も追及はしないわ。」

あれ？

「え、でも。どうやつて…？僕は」

「あなた、ジャックのところに行つたとき住所とかいろいろ書いたでしょ。」

あ、

そういうえば僕が探偵のジャックのところに相談しに行つたときまず最初に問診票みたいなものを書かされた憶えがある。そこには誕生日の記入欄もあつたかもしれない。

「これでわかつた？でもあなたがそれを人に言いたくないと思つていいのと同じくらいにあなたは祝つてほしいと思つてる。さみしいと思つてる。でなきやルキアに教えることないでしょ？」

「それは…」

教えてなんかない。気づいたら彼女はそれを知つていた。僕と繋がつたがためなのかはわからないけども。

「もし教えてないで知つていたというなら、やつぱりそれはあなたが自身の誕生日に特別な思いを持つている証拠よ。隠したければたとえ命すら繋いでいたとしても隠し通せる。あなた達二人がそこまでの結びつきを持つていよいのはわかつてゐるはずよ。」

なんだか責められている気がする。どうして自分のことを不幸と思うのを否定するんだ。

「嫌な…言い方ですね。まるで僕がかわいそうだと同情してほしいからルキアに教えたみたいじやないですか！」

僕のあからさまな不快感に二人は戸惑いを見せていた。

「落ち着いて。何をそんなに」

「そうよ。私だつてあなたが誕生日を隠す理由なんてわからなかつたわ。」

「そうか…二人がしつてたのはそれだけだつたのか。
これじやあ本当に憐れんでほしいみたいじやないか。自分で外堀を埋めてしまつた。」

「ごめんなさい。勝手な被害妄想ですね。これじや」

心配そうな表情の二人。何とか先生が口を開いてくれた
「私じや何もできないだろうけど、理由聞いてもいい?」

どうしてかはわからないがすごく言い出しやすかつた。

5年間つづいた抵抗はつゆほども感じられない。

「明日なんですよ。」

「明日…？」

「僕のせいで死んだ両親の、ね」

ルキアはハツとした表情をした。

先生は眉一つ動かさずこつちを見つめたまま無言だつた。

当時の出来事を話し終わつたころには僕自身も落ち着きを取り戻していた。

先生は僕を見つめたまま口を開いた

「そう。」

あつさりとただそれ一言だつた。これにどうにも納得がいかない
のはルキアだ。

「そうつて! エルダそれじやあセトがあんまりだよ。かわいそ…」
「じやあ誰がセトを祝うの? セトはそう思われたくないから隠して
きた。で、そうなつたら誰がセトの誕生日にプレゼントを贈るの? 誰が
ケーキを用意するの?」

そうだ。僕にとつて無駄に同情しないでそうやつて祝つてくれる
人が必要だつた。

言われて初めて気づけた。

「ありがとうございます。あの、僕」

先生はにこやかに微笑みながら僕の言葉を遮つた。そのくらいわ

かつてるという表情だ

「それじゃあ明日はごちそうとケーキ。それでいいわね？いや。もう決めたわ。」

「はい。よろしくおねがいします。」

なんとも不思議なあいさつで僕の誕生日の前日は締めくくられ

た…ハズだつた。

第45話 「鉄鎧」

外はすっかり冬らしい寒々しい風が吹いている。

まだ雪は降つてないが木の葉も落ちまさかこんな真夜中のさみしい世界を歩いて来る奴はないだろう。

夜も更けそろそろ小さなお茶会をお開きにしようとしていた僕たちだつたが、どうにも眠るのは延期になつてしまつたようだ。

足元には小さなウサギ。そう、来客だ。こんな時間に来る来客などまず普通の人間じやない。ウサギが来客を告げるとほぼ同時に玄関の戸をコンとノックする音が聞こえた。

先生はすでに来客に見当がついているようで『なぜその人物が今家を訪ねにきたのかわからぬ』といった様子。

「セトは私の後ろにいなさい。ルキアはちゃんとセトを守つてあげるのよ。」

「わか（りました）（つたわ）」

同時に返す僕らに注意をむけつつも先生は扉を開き来客と相対した。

先生の背中ごしに見える客は白い和服を纏つていた。

「あなたがこんな時間に来るなんて予想もしてなかつたわ。いつたい何の用？」

先生の警戒の匂いは今まで一番強かつた。あの闇市のときなんか比べ物にならないくらいに。とびつきりの敵意と警戒心。僕ですら身震いしてしまうほど恐ろしく鋭い匂い…

「よせよエルダ。君のかわいい弟子までも震えあがらせているぞ。仮に君たちに危害を加える気があるのなら私がここまでたどり着けないというのは君も知つていいだろ？」

「私は茨の魔法使いのような自分を守るすべを持つていない以上警戒はするし、あなたを客として迎え入れる気もないわ。ましてこんな深夜に人のうちに上がり込もうとするようなやつを！正気とは思えないわね、鉄鎧」

鉄鎧と呼ばれた人物はそれもそだと納得したような表情を浮か

べている

確かにそれは悪かつただが今回は本当に悪意はないんだ。

ただ一

鉄鎧はずつと小脇に抱えていた箱を前に出した。

「君が弟子をとつたというから祝いがてら、少し見に来ただけだ。それだけだよ」

これは先生にはとても意外だつたらしくしばらくの硬直の後
「いいわ、お茶くらいしかだせないけど、あがつて。」

そういうて振り向いた。

この場合これは僕にお茶を出すようにする合図だ。

僕が紅茶を用意している間、鉄鎧と先生は応接室で何か話していった。

話は残念ながらちょうどお茶を出しに部屋に入つたタイミングで終わつてしまつた。

だがこの会話に何かしらの意味があつたのはよくわかる。先生の殺氣ともとられかねない警戒心はせいぜい夜道を歩いていた時に野犬を気にする程度までは落ち着いていた。

「どうぞ…」

食器が少し擦れたのか力チャヤという音が響く。間近で見れば見るほど美しい皮を被つてゐる。その美しさあつてこそ彼の和装も映えるものだ。当然その皮が彼自身のものであればの話だが。

「うむ…：良い香りだが少しばかし私から目を離してくれると助かるな。私は本質を見られて いるだけで苦痛を感じるたぐいなんだ。すまないね。まさか竜舌蘭アガヴエ・エクネの花というものがこれほどこちら側に近い力を持つものだとは思わなくてな。」

「あ、ごめんなさい。」

思わず勢いよく目をそらしてしまつた。ほんの少しだつたが目が合つた。とてもじやないが僕だつたらたとえ祝いの品を持っていようがいまいが家には上げないし近寄らせもしないだろう。

彼から感じる悲しみよりもおぞましいほどの鎧びた呪いのほうが強い存在だつた。あの目から隣人たちを縛り付けかねない鎧びた鉄

のにおいがする。

「で、様子は見れたわね。さあ次はどうするの？」

「ふむ、しばらくぶりに他人の家で茶を飲めたし、祝いの品を渡して早めに退散するとしようかな。君の弟子に使つてもらおうとこれをね。」

そういつて鉄鎧は足元に置いていた薄べつた箱を先生へ手渡した。

匂いは大丈夫そうだ、呪いの品だが、危険な匂いや悪意の匂いはない。ただ独特の獣のような匂いがする。

「人狼の毛皮……ね。これが物騒なものじやないと言い張れるあなたはかなりおかしいって自覚したほうがいいわよ鉄鎧。」

箱の中から出てきたのは何かの毛皮。先生の話からして動物に変化できる人間である人狼の毛皮だつていうのはわかる。話には聞いていたがこんな不思議な感覚のものなのか。人狼の皮だが、いくつもの動物の匂いがする、そして微かな後悔の匂いも……

「まあたしかに……物騒ではあるが、何事も使いようだ。便利だし、決して無駄になるものでもない。それにそんなに不安なら処分なりうつぱらうなり好きにしてもらつて構わない。あくまで私個人の気持ちを充実させるためだけにすぎん。」

表情はうまく読み取れないが言葉尻にさみしさを感じる。香りとか匂いじやなくて……ただそう感じる。

「それじやあそろそろ失礼しよう。夜もかなり更けてしまったようだし。邪魔をしてしまつたね。」

鉄鎧はすっと立ち上がりそのままお辞儀をして玄関へと向かつた。

「あ、ありがとうございます……その一」

なんとか自分で話せるタイミングをと思つたのだが鉄鎧は片手をあげそれを遮つた。

「あ、いや。いい。別段言わなくても大丈夫だ。君も魔法使いの弟子になつてさらに自身の特性が伸びているんだろう？ 私からなにか感じているんだね。だからと言つて無理に言葉を選んだり、飾らなくていい。最初の感謝だけでも私は十分だ。それよりもだ」

彼はするつと振り返り僕を見つめ、続けた

「他人のために気を使つて遠慮したり言葉を選ぶのも思いやりだが、時にその悩んだ時間や気遣いが相手を傷つけたり、自分を追い込むことになることもある。別に私は今のこと気にしてるわけじゃないが、これは先達からのアドバイスだと思ってくれ。」

再び鉄鎧は僕らに背を向けて帰つていった。

大した見送りもできなかつたが：

奇妙な誕生日前夜だつた。

そろそろ起きねば。この時間に日差しが入つてゐることはもういい時間のはずだ。

誕生日にこんなにワクワクするのは何年ぶりだろう。

今日はこの時期にしては少し暖かい風が吹いていた。

第46話『誕生日の嵐』

目覚めて一番にしたことは顔を洗つて裏口から外へ出て庭の手入れ、そして朝食用の食器の準備。毎朝のルーティンを誕生日だからと言つてさぼるほど僕は間抜けじやない。

そしてお次はいつもと変わらない朝ご飯。僕自身あまり主役だなんだとちやほやされるのは苦手だしこのくらいあつさりとしていたほうが楽でいい…

ドサツ！

さて新聞でも、と玄関を開けたら突然大きな影が入り込んで僕の上に覆いかぶさつた。

思わずうわッと声を出したが、先生が駆けつけるころにはこの黒い影がニューヨークのジャックが僕宛に送つた誕生日プレゼントだということが分かつた。

それにして…このプレゼントの山はミョウチキリンな空飛ぶクラゲから飛び出してきた。

何でもありだな、魔法

中には季節のお菓子とこれはどうにも日本旅行に行つてきたようで京都のお土産が詰まつてる（だつて KYOUTO MIYABIとか海外受けしそうなローマ字書いてるもん。てか京都の綴り間違つてるぞこのお土産）

古典的なワガシだけでなく抹茶味のバームクーヘンやクッキーなんかもある。最近のジャパニーズは洋菓子をアレンジしたようなお土産もいっぱい作つているのか。

「これじゃあただの旅行自慢みたいなものにしか見えないわね」呆れた風に言つてるがそんな先生は緑茶のパックを凝視している。穴が開きそうだ。

ルキアはコンペトウとかいう名前の小さい砂糖菓子を眺めている。これはどうにも星をモチーフにしたようなカラフルな小さな砂糖のお菓子で見た目もかわいらしい。

どうやらこの誕生日祝いは僕ら全員にとつて良き贈り物になつた

ようだ。ジャックには世話になりっぱなしんだなあ…

お土産をひつかきまわしてあーだこーだ言つているうちにキッチ

ンからはいい香りが漂ってきた。

「ケーキはお昼。さらに『ちそくは夜！』プレゼントはその時にね」

そうは言いながらもいつもよりは格段に豪華なお昼だ。

そしてこれまた甘い香りと包み込むような滑らかな味わいのケー

キ

魔法使いのごちそうとタイトルをつけて本が書けるな。

オーブンから出てきたケーキだがいつの間にか生クリームのデコレーションがなされている。

イチゴとアンズのジャムがクリームとともに間に挟まつており、上部はまるで王冠のようになつて並べられている真っ赤な大きなイチゴ。その間にはぎつしり詰まつたブラックベリーとラズベリー。三人で食べるのではここまで巨大ではないが、これぞまさに誕生日ケーキそのもの！といった感じで今まで食べた中でもトップクラスにおいしいケーキだつた。

豪華な昼食もひと段落し先生が皿を洗い僕が部屋を片していくたそ
んな時だつた

コンコンと玄関の扉をノックする音が聞こえ僕は特に何も考えず
はいはいと言いながら出でしまつた。

まさかそこに自分のいとこであるショウシラカワがしかめつ面をして立つているとは予想だにできなかつた。

「やつぱりここにいたんだな。秘書に調べさせてここでお前が怪しい連中とつるんでるって聞いて連れ戻しに来た！」

どうにも最悪の誕生日になりそうな予感がし始めた…

追つて先生も玄関へやつてきた

「どなたでしようか？ いつたい何の御用で？」

ショウ兄さんはフンと鼻を鳴らして人差し指を上にたてながら話をしだした。

「うちの従弟がね。怪しい魔女だか魔法使いだかを名乗る女の家に入り浸つてるって話を聞いてな。行つてみりやなるほど怪しい女の家

に上がり込んでるのはほんとだつたみたいだな。てめえセトに何吹き込んだかは知らねえがこいつは連れて帰らせてもらうぜ」

そういうつてかなり強引に僕を引っ張り出そうとする兄さん。

さすがにこいつは無茶苦茶だ

「ちよ、ちよっと待つてよ兄さん。そりやないだろ!? 何も知らないのに突然何さ? 人のやることには文句言うなつていつも自分で言つてるじゃないか!」

そうだこの人は大概周りのやることには無頓着でだからぼくが家を空けるつて言つた時も特に詳しくは聞かずに管理を受け持つてくれたんだ。なのにそれが手のひら返したようになぜ今更来たんだ? 「それは! 赤の他人のしかも普通のことやつてるレベルでの話だ。魔法なんだつて怪しいカルトに落ちぶれた自分の身内はまた別問題だ!」

ついにはカルトとまで言いおつた…

まあ確かに科学主義というか現実主義な兄さんからすればカルトにしか見えないかも知れないな

背後では先生もうなずいて話を聞いている。自分がカルトだつて馬鹿にされたことに関しては特に気にしてない様子だ。

「カルトじゃない! 僕はいたつて普通の生活をしてるし魔法だつて本物だ! 何なら僕だつて使えるさ」

落ち着いてことを分析できている気になつているがどうにもでてくる言葉は語気が荒く、ただでさえ話しながらどんどん赤くなつている兄さんの顔がゆでだこみみたいに真っ赤になつてしまつた。

さすがにまずかつた、後悔した矢先

「カルトに呑まれた奴はみんなそういうんだよ。ついにはお前自身もできると抜かしてきやがつた。できるもんなら見せてみろ! くだらない妄想には付き合えないんだよ。どうだ?」

「わかつたやればいいんだね、兄さん。見せればおとなしく帰つてくれるんだね?」

もうやけくそだ。こんなことで魔法を使うのはどうかとも思うが

兄さんの財力も考えれば下手な遺恨を残して突き返すのも恐ろしい。

それに自分を馬鹿にされただけならまだいいが先生のことまでここまで言われちゃとりあえずぎやふんといわせないことには収まらない。

すぐダイニングに通して一番簡単にはつきりわかるものを見せることにした。

「私手伝う？」

「いや、こんなことに隣人たちの力を借りるのもおこがましい話だしこれは俺の問題だから自力でやる。」

ルキアの提案を断り、相変わらずしかめつ面の兄さんの前に座る。「インチキだとか言われるのも癪だし何をどうするか説明するよ。」

大急ぎで部屋からとつてきた水晶を兄さんに手渡す。

怪訝そうな顔の兄さん。

「そいつは間違いなく何の変哲もない水晶だ。粘土細工みたいに手で形を変えるなんてことはできないし、色だつて変わらない。よく見てくれ。そうだろ？」

「・・・ああ」

「じゃあそいつをそうちだな・・・花の形にでもしよう。嘘じやない。机の上において。僕も兄さんもそいつには触れない。一瞬でえてやる。」

さらに怪訝そうな顔になつた兄さんをよそに水晶へ集中を向ける。思えば最初に魔法を使つたのもこんな石だつたな。

意識を向け魔力を水晶へ注ぎ変えたい姿をイメージする・・・

水晶に淡い輝きが見えた刹那

ピキピキパキパキという氷が割れるような音とともに掌に収まるような小さな水晶からまるで本当の植物が発芽するかのように水晶の芽がでた。

昔テレビで早送りの植物の成長を見たがそれをそのまま再現した

かのようにその芽はあつという間にアネモネの花を咲かせていた。

土台の水晶は少しだけ小さくなつていし、総量自体も変わつてない

ようだ。前の時のような暴走傾向にないいい証拠だ。わきから見ていた先生もフムフムと頷いている。

当然驚いているのは兄さんだ。鳩が豆鉄砲喰らつたような顔してる。

「な、あ…」

「どうだ兄さん？満足かい？」

したり顔な僕にどうにも腹の虫がおさまらないのか兄さんはキツとこつちをにらんだ

「まだだ！今度は俺の言うものの形にしてみろ！」

なるほど確かに条件をこつちが出しちゃいかさまにしか見えないだろうな。

「いいけどこいつの質量を上回るようなものは作れないからね、あくまで水晶の形を変えるだけだからね。」

「わかつたわかつた。んじゃあ鷹だ。」

「鷹？あの鳥の？」

「そうだ！鳥の鷹だ。やつて見せろよ！」

どうにも兄さんは強気すぎていけない。

返事を返す必要もない。また意識を向けて

バサツバサツ

あ…ああ…という少々間の抜けた声を漏らした兄さん
まあここまでやればそうもなるか

今この卓上には水晶の淡い輝きを放つたミニチュアサイズの鷹が
弧を描いて飛んでいる。

「し、信じられん…そんなことが」

唖然とする兄さん。それじやあトドメと行くか

「そんなに信じられないなら」自慢の秘書に聞いてみるのが一番かもね。」

「え？」

もうこの人今日だけで一生分驚いてるんじゃないかつてくらいの何度目かもわからぬ驚き顔。

「外で車待たせてるだろ？一緒に来てるんだろうからその人に聞けば

いいんじやない？ついでに会社の金のピンハネについても聞いてみれば？」

「な、何を言つてるんだ？セト」

先生はどうやら気付いているようだ。

「いやね。変な話なんだよ。僕は別段素性を名乗つてこの辺うろうろしてるわけでもないんだ。兄さんの秘書が調べてたつた数か月で情報をつけめるわけがない。」

「だがあいつは俺が命じてから一ヶ月もしないで見つけてきた……！ そういうえばお前が今何してるのがかつて言いだしたのはあいつだったな。」

それもそのはずだ玄関から乗り込んできた兄さんの背後。車の運転席にいた男。ちらつとだがそれでも十分思い出せた。

「理由はシンプルさ。僕の行く先に秘書の彼がいたからさ。それもとびつきり真っ黒なオーラションにね。いや確かに思い返せばいたよ。でもまさかこつちの顔を覚えていたとはね。」

「なに？ オーラション？」

「そ、魔法使いとかが集まつてやるオーラション。当然一般人には参加どころか会場に入るのも不可能。でも彼はそこにいた。しかもあのオーラションはお金もそれなりにかかるはず。いくら社長秘書とは言えそんな大金持つてたのかわからぬなあ！」

オーラションのことはさらっと流しつつ棒読みな思わせぶり発言 兄さんはすでに魔法のことを信じている。疑いのにおいが薄れ始めてるのがわかる。

この状況でとる行動は……

「よし！ わかった。俺の負けだ。もう何も言わないし。連れ帰る真似もしない。それよりも急用ができちまつたからな！！」

そういうと来た時より顔を真っ赤にして兄さんは玄関から飛び出していつたしまつた。

「あなたの兄さん。ずいぶんせつかちなのね。」

「まあ従兄なんで実兄ではないんですけどね。面白ないです……」

先生までも唖然とさせてこの嵐は過ぎ去つていった

外からなんかもめてる声が聞こえているがそれにかぶせるように車のエンジン音が響き兄さんのおいは遠ざかつていった。

「あれ？なんか置いてあるよ！」

さっきまで兄さんが座つてた椅子の上を指すルキア

相変わらず意地つ張りな人だなあ

数ポンドの紙幣が置いてある。

あの人らしい氣もするがなんともまあ…：

「お兄さんなりのお詫びなのかもしれないわ。ありがたく受け取つときなさい。」

「さ、片づけて片付けて！せつかくの誕生日なんだから気を取り直していくわよ！」

なんだか妙に喜びのにおいを振りまいている先生にせかされて僕らは嵐の後を片付けた。

でも僕もそんな先生の喜びが嬉しかった。

第47話 「春の嵐」

春

冬を越え大地に生命があふれる季節
人もまた同じく新天地へと踏み出すものも多い
そして… 彼女もそうなのであろう

僕は誕生日の終わり頃から何も変わらなかつた。先生たちとより親交を深めることはできたかもしない、だが魔法使いとしての成長はあまり良いものでは無かつた。

せつかく杖を作つてくれたと先生が言つてくれたのに木を選ぶだけで3日、まして望みの形を目指して削るなどやつたこともなく結局満足したものになるのに2週間もかかつてしまつた。

しかもそれでも自分の力には自信が持てず杖を握つても暴走するばかりで今杖は使い魔であるルキアに預けている。

自分に自信がなくなつていき落ち込んでいた僕に先生が数日休みをくれた

「街でも行つてリフレッシュしてきなさい」 だそうだ

とはいひきなり街へ行く用事もないしせつかくの休みをどうするかと悩んでいた時だつた

突然スマホに見知らぬアドレスからメールが飛んできた
いや正確にはこのアドレス自体は知つていたがまさかあちらから連絡してくるとは思わなかつた。

数か月前のホテルオークション

例の駄々つ子の監視警護がてら展示物を眺めていたらオークションを運営しているという男に声を掛けられ
少しばかし話し込んだのだが、私がやたらと食いついたのを気に入つたのか彼は連絡先を交換しようと持ち掛けてきたのだ。少々怪しい男だつたが不思議と損はさせないという言葉に信ぴよう性を感じて応じてしまつた。

しばらくは失敗したかと思つたが、とくにダイレクトメールされる

わけでもなく連絡先交換したという事実を半ば忘れていた。

そんな彼セス・ノエルからのメール文はシンプルだつた

「とてもとても珍しいお品が手に入りましたので折角ならどう連絡させていただきました。ご興味があるならば添付ファイルをご覧ください。」

ファイルには日時と場所の連絡が書いてある

「珍しいってなんだろうね？」

後ろからのぞき込んでいたルキアが不思議そうに首をかしげる
「だつて魔法使い相手に珍しいっていうのよ。想像もできないわ」

確かにそうだ。僕が先生のもとで魔法を学んでいるのは周知の事
実らしくおそらくセスも知っているだろう。それに今まで全く連絡
をよこさなかつたのに突然…

オーラクション日時も先生からもらつた休みの期間内だ。

「よし。ちよつとくら行つてみるか！」

そうして僕はルキアを連れ、まだ寒さの残る春の街へと繰り出した。

たどり着いたオーラクションでは魔術師ともどきのような半端物が
それなりの数が集まつていた。

呼びつけたくせにセスは会場に案内した後は忙しいからととつと
と消えてしまつた。

ルキアはいつものように影の中。こんなところで揉め事はごめんだ。
会場に入つてすぐセスがなぜ僕を呼びつけたのか分かつた気がし
た。

とても甘くまろやかな香りが僅かではあるが漂つている

隣人たちや僕らのような人間たちにはとても魅力あふれる…こんな香りは初めてだ

そんなことに思考を巡らせているとオーラクションが始まった。

出されるものはどこぞの妖精の羽とか、何とかの鱗とか、確かに一般に取引されることこそないがありきたりなものばかり、香りの

正体とは全く違う

まさかだまされたのではとあきれ気味に眺めていると最後の商品
だという声とともにそれが現れた

赤い髪と若葉色の瞳

触れたら折れてしまいそうなほど華奢な体、かぶせられたヴェール
からもわかるその不思議で魅力的な魔力の香り

「こちらは今回の競売で出品されたもの中でも希少なものです」

司会の声とともに会場がどよめく

ああそうかこれがそうなのか…

気づくとルキアが人の姿で僕の脇の席に座つて恍惚とした表情で

彼女を見つめている

夜の愛し仔

愚かな客たちは歓喜し値段は跳ね上がる

人を道具以下としか見ていない目下衆の目をした客とどこまでも
虚ろで心まで空虚なスポットを浴びる少女

だが、氣味の悪いそんな空氣を一瞬で自分の色でかき消すものが流れ込んできた

会場の空氣とはまた別の不気味な存在、人ならざる顔と底知れぬ闇
に近い魔力を携えてその男

エリアス・エインズワースは壇上へと昇つて行つた

噂には聞いていた人嫌いがまさかこんなとこに現れるとは…
裂き喰らう城などと呼ばれる異形の者

彼は司会の注意する言葉など気にしないで一言

「500」

オークションは終わつた。少女は影の茨の弟子となつた

僕は終始呆然としてただけだった

どこか他人事で終わると思っていたこの出来事が僕の運命の歯車
をまた狂わせ始めるのだと気付けることなどできるはずがなかつた

第48話『羨望』

帰ると入り口で仁王立ちして先生が待っていた
どうやら今日の行き先はばれていたようだ
せつかくの休みを魔法使いならば絶対行かないであろう下賤な場所で過ごした

それに対する怒りは顔を見ればわかつた

「あんなところ…私たち魔法使いが行くところではないわ」

居間での会話第一声はこれだ

まあ当然だ。反論もできない

「はあ…」

大きなため息だ。呆れ、いや諦めに近い香りだ

「まあ、興味は尽きないか…今回はこれ以上何も言うつもりはないわ。もう少し自分が危険なことに首を突っ込んでるつてことを自覚して」

「ごめんなさい」

先生だつて好きで叱つているわけでないことくらいわかる。だが
はつきり言つてこの説教は僕の身に染みるものにはならないだろう
それだけ今日見たものの衝撃は大きかつた

あんなに豊潤で魅力的な香り

まがい物の竜舌蘭^ほの花とは大違ひだ

あの子

僕より年が下だつたように見えたエニルほどではないがそれなりに美人だつた

しかしあの死にきつた眼に恐ろしさがあつた

人間何を見てくればあんな目をするのだろう?

両親の死を受けた僕ですらあんな生きることを諦めたような状態にはならなかつた

うわの空

あきれた先生も説教をやめてしまいその日はそのまま夕食で終わ

り

次の日からはまた修行という名の普段の生活に元通りまあそんなことでスランプがどうこうできるわけがなかつた

少しマシになつたかもしけないがニューヨークのオークションの頃のような自信はなくなつてしまつた

思えばあの妙な男に唇を犯されたのがケチのつき始めだ

あの頃から魔力のバランスがわからなくなり

隣人たちの力の借り方も要領を得なくなつてきた

まるで小学生まで満点しかとつたことなかつたのに中学生になつて段々授業についていけなくなつて高校生ぐらいには落ちぶれてしまふ典型的な苦悩学生のようだ

誰かのせいにしたいが実際あの男のせいとも言い切れない

ただ時期が被つただけ

悪いのは体質にあぐらをかいた自分

失敗はしたことがあるし周りから侮辱されたこともあるが

徐々に腐つていく経験はない

才能があるとは言われなくとも無能ともいわれてこなかつただからスランプからどうすれば出られるのか知らなかつた

そんな折にやつてきた話は

件の少女を買つた魔法使いエインズワースが少女を自分の弟子としたこと

そしてそういつた奇行を監視し報告するはずだつたのに何も報告を上げないどころか止めもしなつた

サイモンへの不信感による

地元の教会からのエインズワースの調査依頼だつた

第49話『邂逅そして』

その少女の第一印象は不気味…

いや、奇妙といえばいいだろうか

自分の内側に感じていた何かより何倍も魅力的で芳醇な香り
絶望を含みながらしかしどこか光を見つけたような瞳

自分にないものとは惹かれる一方で恐れも感じるものだ

彼女はそれをそのまま感じる存在だった

先生に連れられ僕は今エリアス・エインズワースの自宅にいる
オーラクションの時はあの頭に警戒を抱いたが実際あつてみるとどうにもただ不器用なだけにも見える

当然彼が人とは異なるむしろ怪異に近い存在であることは感じ取っているが…

喋る言葉は同じ、紅茶だつて飲む

頭が犬か何かの骸骨だがそれ以外はいたつて人間だ…

###

つい先日、近所の教会の神父が暗い顔してやつてきた

なんでも、教会が監視を続けていた

破裂城ビルム・ムーリアリス

という存在に大きな変化があつたようで

本来ならば監視者からの報告があるはずなのに教会には何も連絡はなかつた…

不審に思つた者たちが神父を通じて先生に依頼してきたつてことらしい

先生曰く

宗教団体みたいなもんだが一枚岩ではないらしく
特に渦中の人物エインズワースの監視を行つてゐるサイモンさんは少々恨みを買いやすい所に属しているらしい

今回彼経由での依頼でないのも彼を信用しないものがいるからだらう

とのこと

なんとも無様な話だ

本来ならばこんな事付き合う義理はない

だが…

エインズワースが娶った少女

スレイベガの少女

模倣品の僕は勿論、先生もその存在への興味が止まらなかつた

#####

そういうしてゐるうちに話は当然少女の話題になつていく
バカ高い金で競り落としてどう使われてるのかと思えば
彼自身どう接すればいいのか完全にはわかつてないようだ
一緒に暮らし

魔法を教え：

僕の生活と対して変わらないように見える
エインズワースの言葉に嘘の匂いはないし
恐怖や憎悪の匂いは漂つていなし

少なくともエインズワースの隣に小さくなつて座つてる赤い髪の
少女「羽鳥チセ」は現状苦しい生活をしているわけでは無さそうだ
少々痩せ過ぎている気はするが身体に目立つた傷もない

夫婦だと聞いていたがどうにも僕には親子のようなものに見えて
しかたないが……

「で？用事つてのは僕の監視かい？大方サイモンの奴が碌な報告をし
なかつたからつてところだろ」

話始めた骸骨頭は話が分かる人物のようだ声は男性に近く少し低

い

どう発声しているのかとかあまり考えないほうがよさそうだ

彼の本質は匂いだけでは嗅ぎ分けられなさそうだし

「話が早くて助かるわ。まあ今見てるこの状況を伝えればそれで今日
の用事は終わり。といきたいところだけど…」

先生は僕のほうを見て少々の間の悪そうな顔をした
なるほどここからは大人同士のお話というわけか

「チセ、すまないが少しこの青年の相手を… いや別に僕はいても
らつても構わないけど」

「ああいえ構いませんよ。彼女さえよろしければ私としても少しお話
してみたいですし」

「私も… 大丈夫です」

ふむ… 少し我是弱いようだ

まあ確かに自分の学生時代を思えば当然か

日本人であることが疎外感といじめを生み生活環境はいいとは言
えなかつた

彼女も怪異を常に見続け生活してきたと聞く

そんな中でまともな生活ができるかと言われば答えはノーだろ
う

最近知つただけでも彼らは友好的であつても決して安全な存在で
はない

僕自身彼らの好意であわやな事になりかけたことがある

羽鳥に案内をされてエインズワース邸の庭に出た近くの森が見え
何とも長閑な田舎といった感じ

二人並んで無言でそんな森を見つめながら座つている

気まずい…

画が弱いのは勝手だが無言は居心地が悪い

これは何か話さねばと彼女のほうを向き直つたとき体が少し動い
たせいかポケットからコインが飛び出してきた

元来財布嫌いで小銭をポケットに押し込んでいる

よくスられるからやめろと言われてきたがまあこの癖は治らない
慌てて拾おうとしたとき手が触れた

羽鳥もまた私の落としたコインを拾おうとしてくれていたようだ
そうして触れ合つた彼女から流れ込んできたのは…

あまりにも残酷な人生

まだ20にもならないというのに人の悪意にさらされ続けた苦し
みの一生

断片的なビジョンでしか見えなかつたがその苦しみだけは痛みを感じるほどに……

「あツ！」

小さな声で羽鳥は叫んだ

「す、すまない。これは私の性質というかそういうもので…うまく扱えないんだ。決して覗き見てやろうと思つていたわけではないんだ。本当にすまない」

最近はルキアの手を借りてもこのままだ

母の形見は最近はつけていてもあまり意味をなしていない気がする

そこまで自分の魔力は荒んでしまつたのかと落胆の日々に嫌気がさして結局家に置きっぱなしだ

結果はこれ

慌てて言い訳がましくも謝る僕を見てハトリはフフツと笑つていた

「大丈夫ですよ。そんなに謝らなくても。私、私を必要としてくれる存在がいるってことは嬉しいんです。彼のことはまだよくわからなーいし、生活にだつて完全に慣れただけじゃですけど」

そういつて彼女はここにきてからのことを話した

知らないことばかりだつたがセスの教えもあり英語だけは何とかなつたらしい

来てみれば周りには優しい人が多くそれなりに満喫しているよう

時折彼女から発せられる”居場所がある”という言葉が妙に頭に残つた

だがそれでいて実感させられる

当たり障りない返事をしながら彼女が魔法使いとしてはどこまでも恵まれているんだと思わざる負えない

それは羨望か、妬みかも知れない

だが喋る彼女から感じる魔力やオーラは自分にないもの全てを含んだ完璧なものだつた

先生の期待に応えられず
すさんだ場所に遊びに行く僕と
師に求婚されるほど気に入られ、周りからの期待にこたえられる才
をもち
スランプに甘んじて何もしていない僕とは全然違う
きつとどんどん離されていく
果たしてそんな僕に先生のもとの居場所などあるのだろうか…

第50話『霧の中』

帰ると

どつと疲れが押し寄せてきた

結局、あの後いくら羽鳥と会話しても自分の心の中のモヤモヤは増えしていくばかりだった

彼女の生まれ持った才能にまがい物なんかが勝てるわけがない

彼女のような力が自分にあれば

そう思うと悲しみより妬みのような感情が強く湧き出てくる

そしてそんな自分に失望する

この負の連鎖が疲労困ぱいの自分を作り上げていた

明くる日も先生は昨日の話ばかりしていた

僕から見た彼らはどうだつたとか

羽鳥に何か感じたかとか

そんな話ばっかりだ

はつきり言つてうんざりだ

話半分で今日も魔法の勉強だが当然力なんて入らない

先生もそんな僕の変化に気づいていない

生で初めて見た存在に興味津々

まあそれだけ老いてつぶれているような存在じやないって証拠だ

が……

夢を見た

少女が僕を見下ろしている

赤い髪の少女はあざ笑うかのような表情を浮かべ見下ろしている

数日悪夢と焦燥と妬みに悩まされた

この数日で先生まで遠い所に行つてしまつたような気がする

そして本当に先生は数日家を空けることになつた

なんでも旧友からの頼みだそうで2日は開けるとのことだつた

今の調子じやついて行つてもお荷物だし僕は留守を任せられた

先生が家を出た日

朝から随分と霧の濃い日だつた

家にいてもやることはなく
ルキアには好きにしていいとだけ言つて

散歩に出た

もう昼だというのに家の裏の森は霧が濃い
不思議と朦朧とする

悪夢から寝不足がちだつたしそれのせいかもしない
少し座つて森を眺めた
何の変哲もないただの森
霧が濃いこと以外は普通の森

ただ妙に落ち着くというかここにいたいと思う
虚無と無意味のはざまの中
何処からか声が聞こえた

「君は…」

霧に紛れてどこかあやふやでしかしきsstとしみ込む
不思議な声

「君は… 孤独だ」

「誰も君を見ない」

「哀れでかわいそうな君」

「君自身そう思つてるだろう？劣等感を感じてるだろ？」

そうだ

僕は今苦しんでいる

「今ままじゃ何もうまくいかない」

自分に才がないばかりに

「ちがう」

？では努力が足らない？

「それもちがう」

「それじゃあ君の先生も君を見捨てるだろうな」

それはいやだ

捨てられたくない

「ならば君は考える必要はない」

「私が答えを教えてあげよう」

あなたは誰だ？

「それは君が気にすることではない」

「なぜなら私は君の味方だからだ」

「だれよりも」

「そうか… そうかもしれない

「では教えよう」

「君が力を得ようとしないからだ」

力…：修行じゃない？

「そうだ。いつもやっているような遠回りじゃない」

「だが今の君では得られない」

じゃあどうすれば？

「あの少女」

少女？ああ羽鳥か

「あれはよくないねえ」

「君を惑わし力を得るのを邪魔してる」

邪魔…：彼女が

「現に君の先生は君を見なくなつたじゃないか！」

「今まで君のあつてきた人だつて次本当に君のこと見てくれるのか

？」

「あの少女は大きな存在だ。いや今は違うがきっとそのうち大きくなつて君を蝕む」

「僕を…： 蝕む…」

「そう…： だから…」

「さあ決断はできた。行こう」

彼の言葉に任せて動く

彼の言葉の通りに考える

それだけで今までの悩みが解けていく

すべてが分かつた

こんなに気持ちのいいこともない

自分で考えて悩んでたのが馬鹿みたいに

「今は何も考えず、"僕"に任せなよ」

甘い声を聴いていると不思議と体が軽くなつて
考えがまとまらなくなつっていく

でもそれは正しいことをしてゐるから
だから大丈夫

「そう何も心配はないさ。さあおやすみ…セト・ナンブ」

第51話『妬み』

深い暗い

雪の降る夜明け前

森の中を声に導かれて歩く

頭の中の人は正しい道を教えてくれる
でもどこに向かってるのかはわからない
考えなくていいってあの人人が言つたから
扉

目の前には見覚えのある扉がある

そう、ここはあの忌まわしい女の…

『ほら今はバケモノもいない。戸をノックするんだ』

コツコツと軽い音を立て戸を叩く

はーい

伸びる明るい少女の声

扉を開けたのは赤い髪の少女

『さあ！それをお前が支配しろ!!その女だ！それさえお前のものにすれば邪魔する者はいない！居場所

を取り戻せ』

そうだ。彼女を俺が

「あれ？セトさん？どうかしました…ギャツ!?」

何をしているのだろう？

一瞬何か聞こえたと思ったら目の前に彼女の顔がある
なぜ地面に頭をのせながらこっちを見てるのだろう?
まあ倒してくれるなら上から力かけられるしそれでいいのか
彼女には僕がすべて教えるんだ。僕がふさわしいってことを
『そうだ！コイツにはお前しかいないんだ。それをしつかり教えてや
れ』

体は勝手に動いてくれる

何をすればいいのかおしえて…：

「エリ……ア……ス……」

——貴女なんか産まなきやよかつた——

!

なんだ？僕は何してる。それに今のは……？
なぜ目の前に羽鳥チセが倒れて僕はそれに覆いかぶさつて首を絞めながら服をはぎ取ろうとしてるんだ？

そうだ

彼女に必要なのは僕じやない
僕の居場所はここじやない

彼女の居場所も僕じやない

『チツ……もう目覚めたのか……』

じゃあ彼女の居場所は？

頭に浮かぶのはバケモノ

エインズワース

あ、僕殺される

「うわああああああ！」

叫んで跳ねてやつとそこで自分に敵意を向けている犬が目に入つた

ダメだ逃げないと死ぬ

殺される

エインズワースにもこの犬にも

どこ？逃げる

彼女の家の周囲は森が多い道に逃げてもすぐ追われる

そうだ森の中だ

「ゲッホ……あ、あの」

まづい羽鳥が起き上がった

人は思考と同時に動けるというが実際は違う
思考する前に動いているんだ

目の前の景色が一瞬で狭まる

木木木木木木木

エインズワース

一瞬だつたけど視界の端にあの骸骨頭が写つた

逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ

小枝がバチバチと体にあたり血が流れてきた
口も切れてるし鉄の味がする

足元見えないし

なんかふらつくし

あえ?

ぐにやんと視界がよじれて足がもつれる
だがなぜか僕は倒れていない

「セト!しつかりつかまつて!」

聞き覚えのある女の声

体が宙に放り投げられたと思つたら
少し高いところに僕は座つている

セントールの背中

ルキアの背中

その背中を認識した瞬間にもう森は別の森になつていた
エインズワースたちの住む家のあたりとは違う場所に

「これからどうするの?」

ルキアも僕も焦つている

だが落ち着いてはきた

「先生の家だ。荷物をまとめるぞ」

「その先は?行く当てなんて……」

いやある……

思えばそもそもその話あの霧の中僕が一人になるのを狙つていた何

かがいる

これは怪異というより人だ

僕と羽鳥を接触させたがつっていた何か

それから身を隠すという意味でもばつちりの場所だ

まあ何より先生に会うわけにはいかない

人を辱め傷つけた人間を弟子としておいておかせるわけにはいか

ない

思考を巡らせて いる間にすでに家の前だつた

ここにはお世話になつたものだがもはや感傷に浸つて いる時間はない

いつものトランクに部屋の私物とピュティアとそのご飯とを詰め込んで後は服と…もう余裕はない

とりあえず思いつくもの全部放り込んで家から飛び出した

すでに日ものぼりはじめ少しづつ明るくなつて き て いる

「行先はここだ。」

ルキアに行先のメモを見せ、二人の手を合わせた。本来行つたことない場所など魔法で飛べないので今回はこのメモのおかげで行けそうだ…

冷たい風が吹き込み景色が回る

グワーンと歪んだ景色が形を取り戻すとそこは街の喧騒の中だつたいや、その喧騒から少しだけ離れたところ

目の前にあるのは扉

バンバンと強く扉をたたく

もしここがだめならもうあてはない

扉はかなり慎重にゆっくりと開き

その向こうからは顔に大きな傷を携えた男が出てきた

「き、君は…！どうしたんだ？エルダは？」

「レンフレッドさん…だすけてください」

雪のちらつく寒空の下彼の家から漂う暖かい空気はあまりにも眩しかつた

第52話『逃亡』

逃げた

逃げた

逃げた

僕は逃げた

弱い自分が悪いのにその身可愛さに逃げた
レンフレッドに”言い訳”している今でさえ逃げようと言葉を探
している

でも今更逃げたつてどこにも…

「君が言いたくない気持ちにあるのはわかる。だが、真実がわからん
ことには俺も助けたくつたつて助けられない。」

こんな親身になつてくれる人に…

隣に座るルキアも借りてきた猫みたいになつてる

僕はレンフレッドさんの家に転がり込むようにやつってきた
とりあえずと上げてもらつたが一息つけば事情の説明を求められ
るのは当たり前のことだった

たどたどしくそしてぼやかして話していればこうも言われる

「僕がここにいること、せん… エルダさんには秘密にお願いします」

レンフレッドさんは黙つてうなずいた

やつとすべてを話せる

最近のスランプのこと

羽鳥への先生の反応のこと

霧の中の声のこと

自分が弱いから体を使われたこと

そして彼女を傷つけたこと

逃げてきたこと…

話の切れ目切れ目でレンフレッドさんはいくつか質問を挟んで僕
がそれにこたえる

話し終わったころには30分以上経っていた

しばしの沈黙の後

レンフレッドさんが口を開いた

「俺は…それを、君が『羽鳥チセ』にしたことを責めるつもりはない。君の身に起きたことは明らかに攻撃だ。俺のほうでその敵については調べてみよう。この間のオークションでの一件もそうだが、君に接触を図ろうとしている敵対的な存在があるのかもしれん。」

目つきのキツい人だが物言い 자체はむしろ優しい
だが、

「気持ちはわからなくもないが、エルダから逃げたのはマズかつた…」
一気に表情が陥しくなる

「エルダは少々そつけない奴だが、それでも責任感はあるし君を守つてくれていた。黙つて消えたとなれば…心配もするだろう。夜の愛し仔への反応は別に君を卑下していただけではないしな。」

それはわかつていたはずだつた…でも彼女に嫉妬していたのは事実。

彼女との違いを受け入れられなかつた

アレを差と感じてしまつた。

「矛先を羽鳥チセに向ければどうにかできると思つてたんです。劣等感を…自分に向けるべき感情を他人に恨みにしてぶつけた。先生のことはわかつてました。あの人はそんな人間じやない。でも僕は先生に…エルダさんにそんな弟子を持つていてほしくなかつた。あの人の弟子に惨めで醜いやつがいるのが嫌だつたんです。」

言つてしまえば自分の問題だつた

自分で蹴りをつけなければならぬといふわかりきつていた事実
レンフレッドさんは今度は静かに話を聞いていてくれた

そしてこつちを見つめ

「君の言いたいことはわかつた。身を隠すと言うなら手伝おう。俺と一緒に学院に来い。」

と言い切つた途端顎に手を当てて後ろを向いてしまつた

「ん…だが生徒としてじやまざいな。誰かの助手つてことで職員と

して……俺は手一杯だしな……ここを貸すのはアレに襲われるリスクもあるからな……あいつに聞いてみるか……」

何かブツブツ言つたあとレンフレッドさんは振り返り

「君をバーダーあたりの助手として一時期匿えないか取り合つてみよう。とりあえずついてきてくれ。俺の部屋にしばらくは寝泊まりするといい。」

「……が家なんじやないんですか？」

少なくとも中は広いが普通の家に見える生活するための。

レンフレッドさんは妙に顔をしかめて

「まあ……そりなんだが。少しばかしここは今入れる状況になくなってる。今日も必要な資料があつたから取りに来ただけで今は研究室で生活してる。」

そういうながら彼はなくなつた片腕の袖をつかんだ

前にあつたときは腕があつたはずだったが……

「まあ少しトラブルがあつてな……ん？までよ……」

話を濁されそりだつたが以外にもレンフレッドさんのしかめつ面は余計深まることになつた

「一つ思い当たる節がある。」

？僕のことについて？

「そうだ。君を襲撃した存在。直接それがやつたとは思えんが関連している可能性はある。」

「だが仮にそれならその話は学院に戻つてからだ」

レンフレッドさんは興味をもつて顔を上げた僕をせかすようにコートを羽織りだした

もう大して手のひらを温めてくれなくなつたマグカップのコーヒーを飲み干して僕も立ち上がった

ルキアは影の中に入つていつの間に準備万端のようだ
さて、こいつを首にかけて

手渡されたのは首にかけるための紐のついた小瓶

中にはどこかで見たことのある結晶が入つている。先生がくれた

本の中にあつたな

なるほどこいつは相当な代物だ。

「これは俺の研究の成果でな。蓋を開けると…」

「二つの結晶が合わさりその反応でなんかできると」

「まあ瓶の構造を見てもらえればそのくらいはわかるか。まあ簡単に言えばそれで指定した場所に移動できる。それは学院に向かうものだ。先に行つてくれ。ついた先に俺の弟子が待つてゐる。話は通つてゐからとりあえずそこで待つてくれ。俺もすぐあと追う」

「わかりました」

「くりどうなずき蓋に手をかける

ちよつとばかし怖いところはあるが…：

パキッ！

蓋を開けると氷が割れるような音が響き目の前が凄まじい光に包まれた。

一瞬目がくらんで… 視界が返つてくるとそこはさつきとは全く別の部屋だった

比較的広い部屋にテーブルと机と本と山になつてゐる書類と…

「お、あんたが先生の言つてたセトつて人だな。」

声の主はきょろきょろしてゐる僕の目の前に立つていた

長めの金髪で綺麗な目をした女性だった。

服装は赤をメインとした割と鮮やかというか派手目な感じで少しボーキツシユにも感じる

「あ、ああ… あなたがレンフレッドさんの言つていたお弟子さんの」「アリスつてんだ。」

少々ぶつきらぼうにも感じるが。彼女なりの警戒つてやつか…

そうこうしてると後ろから光が差してきた

「まだ挨拶の途中だつたか。問題なくこれたようだなセト君。」

ゴホン。レンフレッドさんはずいぶんわざとらしい咳払いをして服を正して僕のほうに手を伸ばした。

「少しの間かもしれないが… ようこそ学院へ」

これから何が待つてゐるのか… まだ払いきれない苦悩が頭にこ

びりつく中、その歓迎の言葉はあまりにも優しい光に思えた

第七章【学院編】

第53話『学院』

目が覚めると
知らない天井

そう

僕は逃げた

レンフレッドさんに置つてもらい魔術師たちの学院とやらにいる既に数日が立つた

先生はここに来たことはないらしいからここでしばらく生活するのは間違つてはいないうだろう。

学院の人らで話し合つたらしく僕の処遇はあつという間に決まつた

生徒としてではなく

他の魔術師の補佐として研究者の一人のような立場で籍を置くことになつた。

そしてその魔術師というのがバーダーさんだ

レンフレッドさんはちゃんと僕をバーダーさんの助手として入れると話を勧めてくれた。

今回僕を攻撃した存在は完全に謎

極力他者との接触は減らしたい

となれば生徒という立場はいささか問題がある

それにバーダーさんは竜舌蘭の花などを専門としている研究対象として手元に置いておきたい

そんな気持ちもあつたのだろう。ほかの三人

つまりマサト・カキザキ、アエラ・ホーキンス、エニル・マーシュもまた彼の助手という立場で学院に所属している。

生徒の立場なら危険な場所に彼らを連れだせるわけがない。

部屋は余っているがあまり大量に使わせたくない
というお上のご意向の元

僕は柿崎と相部屋になつた。

今日はその相部屋一日目だ。レンフレッドさんの研究室のソファーの上の生活も終わり。お札を言つてからと思ったがどうにも今日は外せない会議があるとかで早朝からいないらしく。部屋でわざわざ僕にコーヒーを持ってきてくれたアリスに礼を言つて出発した。

まあそうはいつても少し歩いた先にある部屋に移動するだけながら…：

「柿崎君とセトは結構仲良しよね」

ルキアは人型で隣を普通に歩いてる

廊下を並んで歩く

思えば学生が経験しそうなことだが自分の記憶をさかのぼつても楽しい学友との

廊下での他愛ない会話つてのはなかつた。

「そう見えるか？仲がいいって」

そう思うと突然このくだらない会話が大切に思えてくる

「だつてオーラクションの時から結構お互いのこと信用してる感じでやり取りしてたからさ。」

「そりやあだつてあの場で僕を除いちやあいつが最年長だつたし。頼りになりそうな感じだつたんだよ。」

「それは匂いが？」

「いやなんとなく。」

「やつぱりなんとなくでそう思えるなら仲がいいってコトよ。」

「そんなもんかね？」

そうこうしているうちに新しい自室の前にたどり着いた

部屋からはなんかごそごそ音が聞こえてくる

間違いない柿崎がいる

相変わらず鼻は使い物にならないがさすがに廊下にまで響く音は聞き逃さない

一応戸はたたいたが返事はナシ

ひたすらガサガサ音が聞こえる

これはなんか遠慮する必要がない感じだな…

「いいんじゃない？あけちゃつても」

力チャヤリと扉を開けはいる

部屋の中は一見すると凄まじく奇妙だけどまあ想像通りというかお察しの内容だった

部屋の中心を境界線に片方は机とベッドだけの何もないエリアもう半分はとつ散らかつていて

段ボールと巨大ビニール袋にゴミやら本やらを詰め込みながらあたふたしている男が床に座つていて

部屋に入ると同時にその男柿崎はこつちに向いた

「おあッ！もう来たのか！こつちで手いっぱい見てなかつた。」

「全くだ…あとから来た私が言うのもアレだが日ごろから部屋くらい片付けておけよな…」

「うるさいなあ！俺だつて一昨日になつて突然あんたがここに来るつていうから大慌てで…」

「昨日からやつてまだ片付いてないのか…？」

「ま、まあ私の場所がありやいいや…入つていいんだよな？」

「自分の部屋に入るのに許可どるやつはいないぜ」

カバンを引きずりながら部屋に入つてみる

入り口から向かつて正面には机、左右の壁際にはベッドが置かれている

ベッドは新品のシーツが綺麗に張られている。これは僕の引っ越しが決まつた後にやつてきたのだろう

机はと言えば綺麗に磨かれた木製でわきには引き出し付きの棚が備え付けてある

シンプルだが使い勝手がよさそうだ

カバンから物を出して自分風に改造してやればそれでよしといつたところか

「なあ。あんたの荷物そのかばん一つか？旅行じゃないんだぜ」

「このかばんが見かけ通りのサイズなら2泊3日旅行つてところだな。まあ服洗えるんだつたらもう少しできるだろうけど」

「へえ～先生の研究室みたいな感じなんだな！バーダー先生の部屋も見かけの倍以上あるんだよ」

思えばレンフレッドさんの家や先生の家もそうだったな
先生の家は外で見るより一回りは広かつた気がする
僕の部屋もこの部屋と同じかそれ以上あつた…
あの部屋にはもう戻れない

「セト… 大丈夫？」

ルキアが僕の片手に手を当ててる

「ああ… ちよつと懐かしんだだけだから…」

彼女は机の軽く腰掛けながら僕の荷解きを眺めている

「なあ柿崎。蛇とネコは大丈夫か？」

「え？ アレルギーは特にないぜ。大丈夫だ」

「そうか。ならいい」

「いやあ～

「な、なあ。そろそろ聞いていいか？」

片付けもまだ半端なところで柿崎が声をかけてきた
結構恐る恐るつて感じだ

「なんだ？」

「そのお嬢さんは誰なんだ？あまりにも自然にいるから聞けなかつた
んだが…」

その視線の先にいるのはルキア

そういえば魔術師は使い魔といったものはとらないという

知らないのも当然か

「私の相棒。ルキアだ。ああ安心してくれ。普段は私の影の中で寝る
からベッド盗つたりはしない。」

「よろしく～」

ゆらゆらと手を振るルキアに畳然としてる柿崎

「そ、そ、うなんだ…俺の知ってる妖精ってのはもつとこう羽が生え
てるとか小さかつたりとか空飛んでたりとか馬だつたりとか…こ
こまで人間そのものつてフォルムなんだな」

「まあ彼女がわざわざこの姿にしてるだけだからな。もともとはセン

トールだからいわゆるケンタウロスなフォルムだぞ」

ふふんとルキアは鼻を鳴らしている

ああそういえばそうだったな

「一応むやみやたらに彼女連れてどうこうはするつもりはないしコミニュニケーションする機会はあんまりないだろうけど、彼女に妖精つていうのはやめてやつてくれ。隣人たちはその呼び名を好いやいないんだ」

「そうなのか？そいつは悪いことした。ごめんルキアさん」

正直な男だ。バーダーさんやレンフレッドさんはまた違った人間

「いいのよ。人間はよく間違えるもの。それに私たちはそのくらいやどうつてことないわ。でもたまにその呼び名にありえないくらい激怒する連中もいるから気をつけなさいよ。じゃあセト私少し休むわよ。」

ルキアはそういうて僕の影の中に吸い込まれていった。

「自分が魔術師だつて言われていろいろ信じられないものを見てきたが…」

「まだ驚きは多いだろ？いいだろ楽しい世界だ。」

にや～

「ところでそのネコちゃんも俺にとつては驚きの一歩だな。」

小さめなケージの中にはピュティアのことだ

「サー・ポ・パードって知ってるか？今じゃ世間でも噂すらされなくなつた生き物さ」

「確かネコ頭の恐竜みたいな生き物だつたような…」

そいつはあくまで伝承の話

この子は原種だ

「意外と違う姿だろ？まあ人は瞞まないと思うけど不安ならトランクの中で飼うから安心してくれ」

「いいのいいの気にするなつて。別に動物は俺も好きだし。それより荷解きをのんびりやるのはいいが明日からはあんたも先生のお手伝いだからな。準備はしとけよ」

「多分準備できてないのはお前のほうだぞ柿崎。どれ、その片付け手伝つてやろう」

誰かと一緒にする生活

ほんの少しだけ前向きになれた気がする

しかしふつうは引っ越ししてきた側が手伝つてもらうんだと思うんだけどなあ…：